

380
38



始



富士梨之概要

加島村農會

380-38



富士梨之概要

加島村農會

大正
8. 12. 25
内交



洛

多



嶽

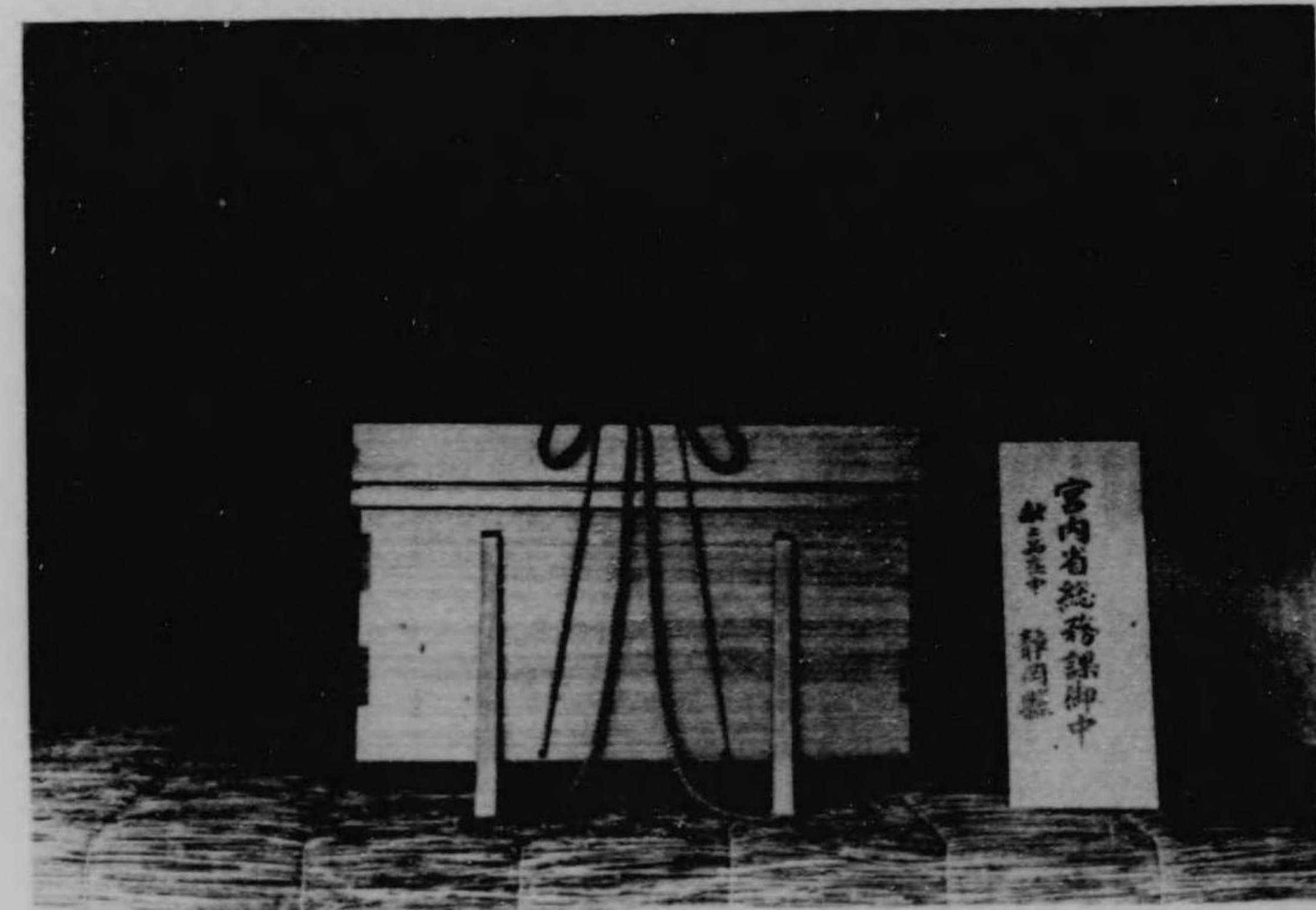
室

西

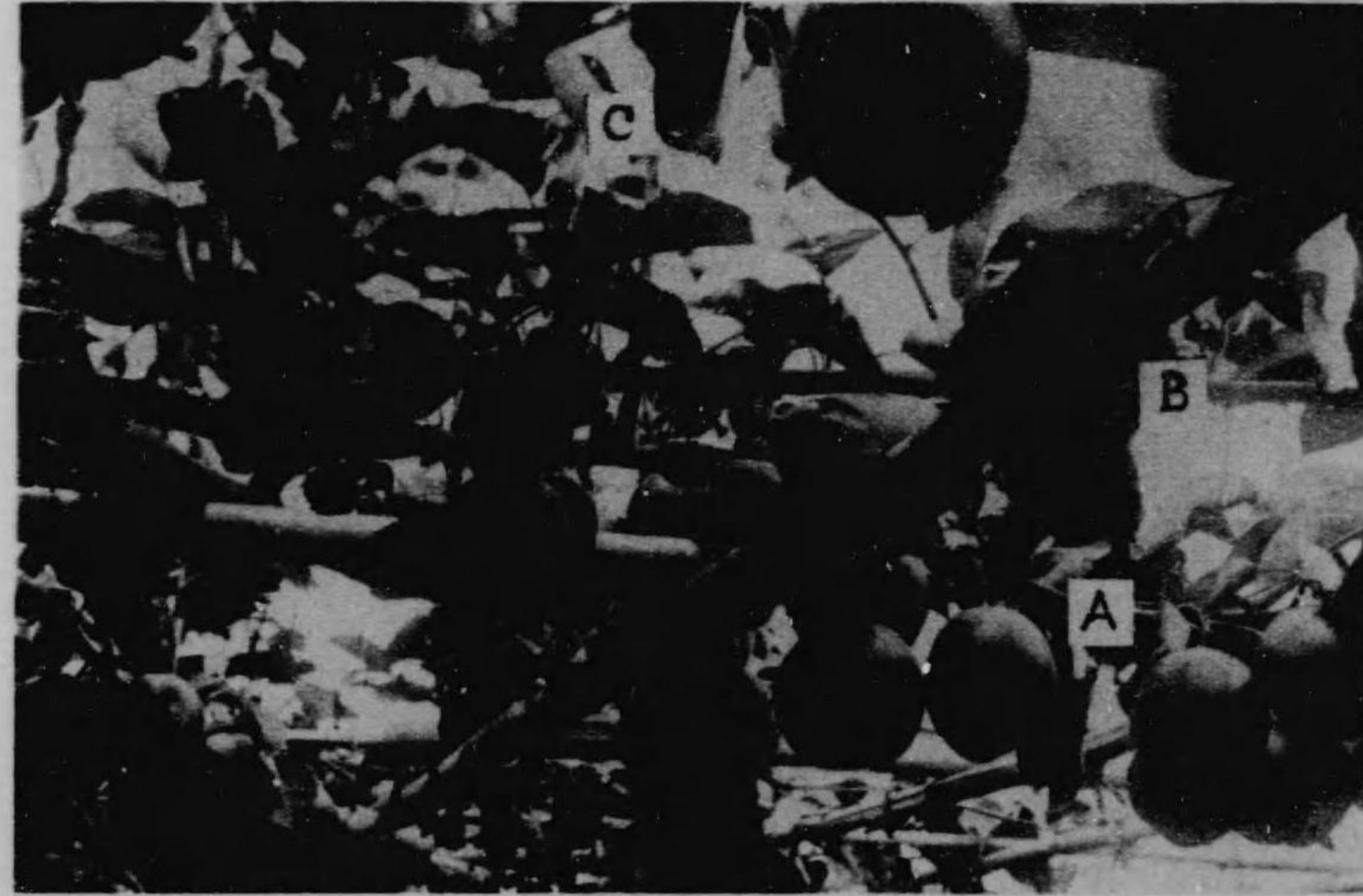




富士梨開花ノ狀況



大正五年八月富士梨獻上



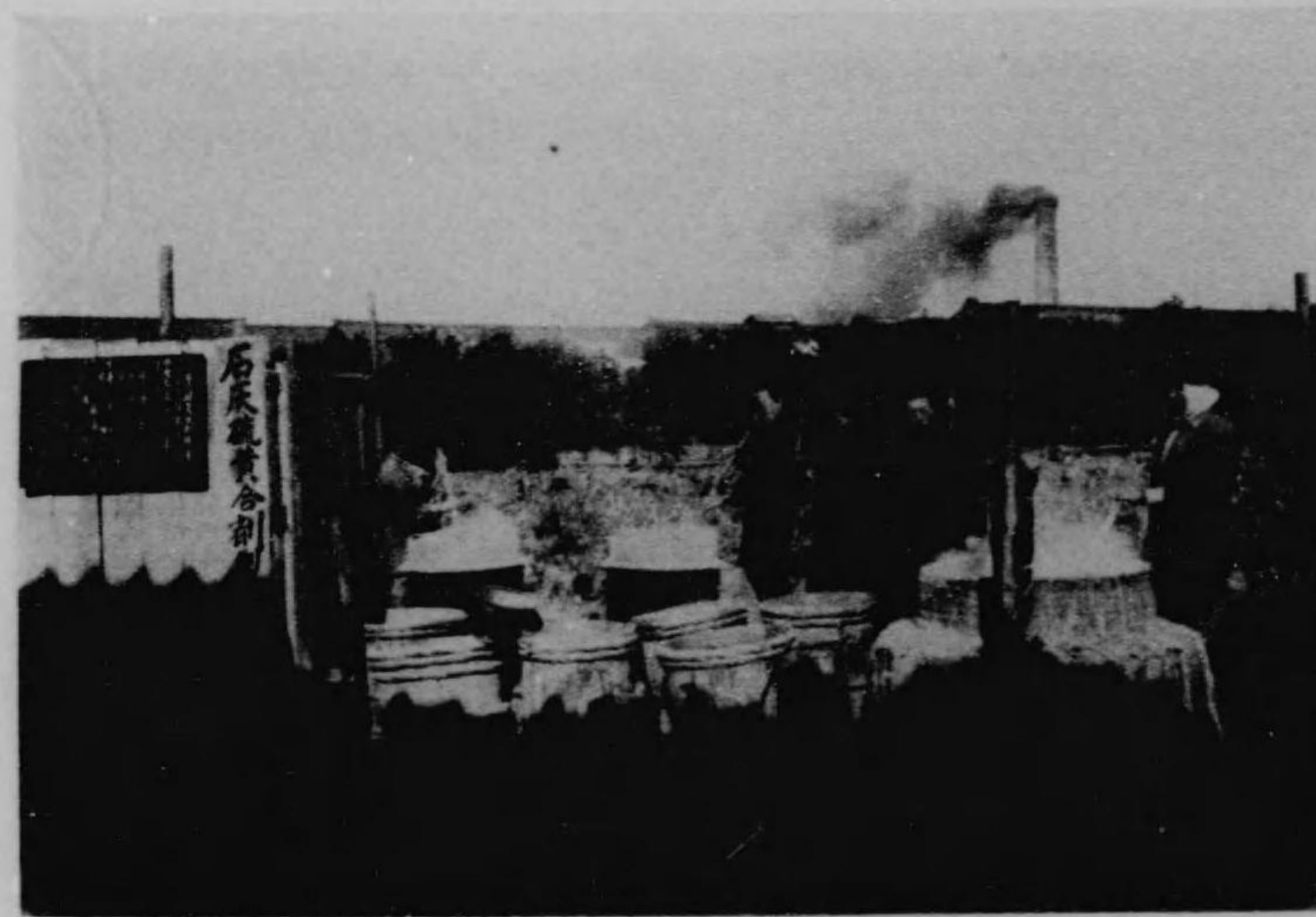
(照參事記) 態狀果結月明
 ス新更季冬テシニ枝果結ノ年本ハ枝 A
 ス果結年明テシニ梢新ノ年昨ハ枝 B
 ス果結ニ日年三ヶ付ヲ枝果結短ニ日年二テシ曲誘季冬ハ枝 C



氏郎十嘉見農村島加 園 梨

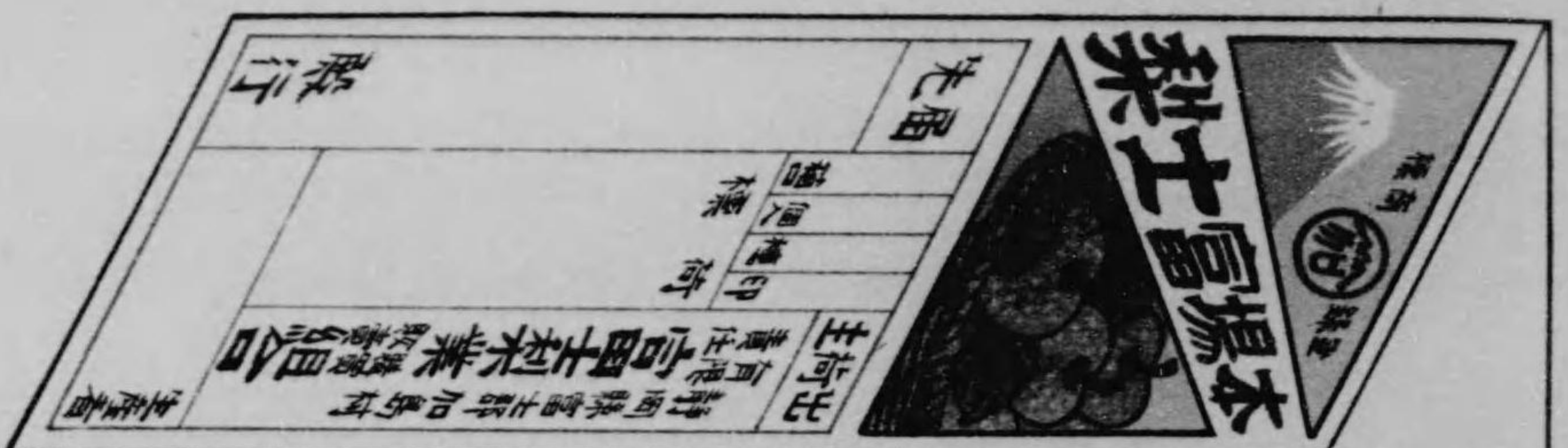
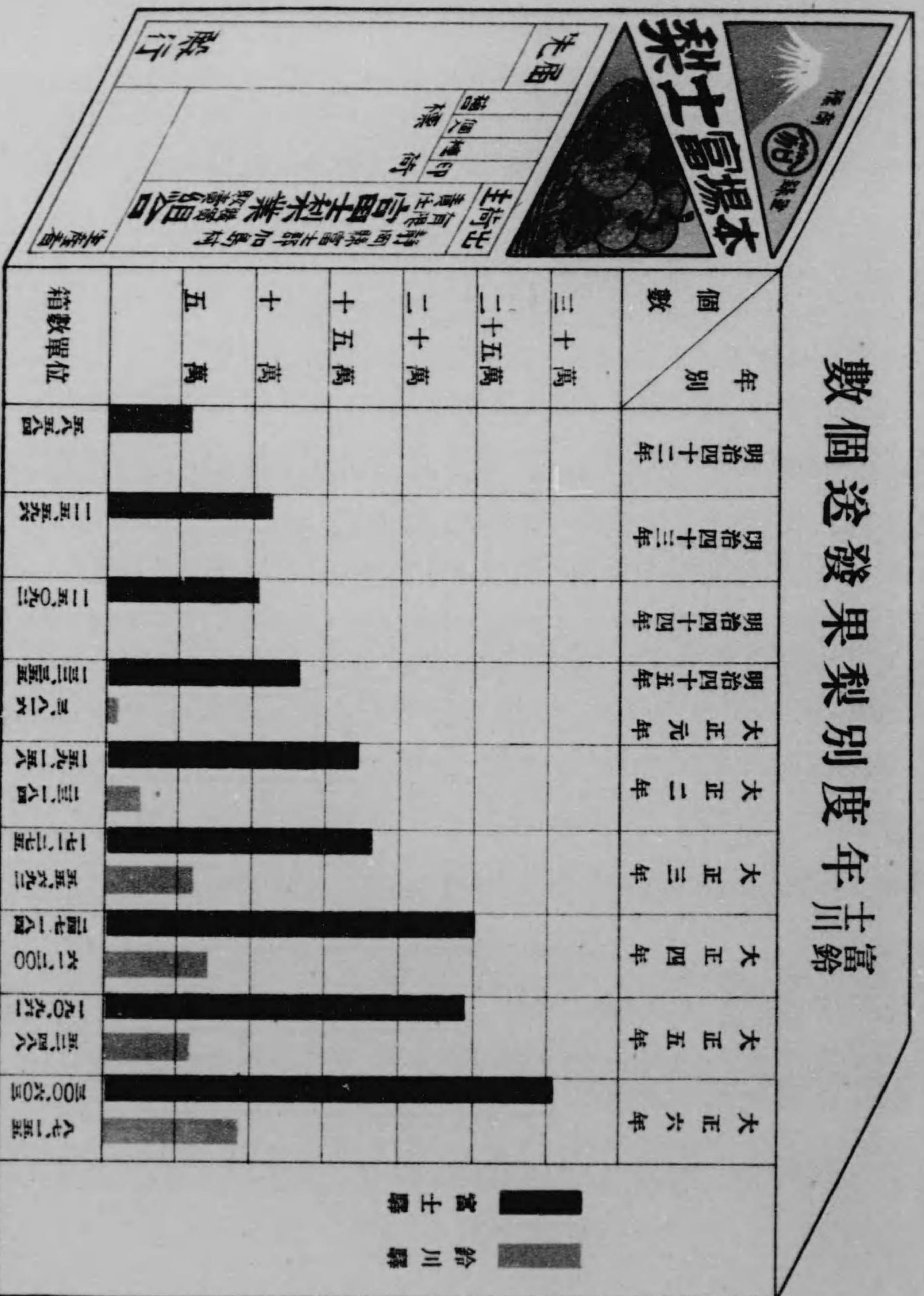


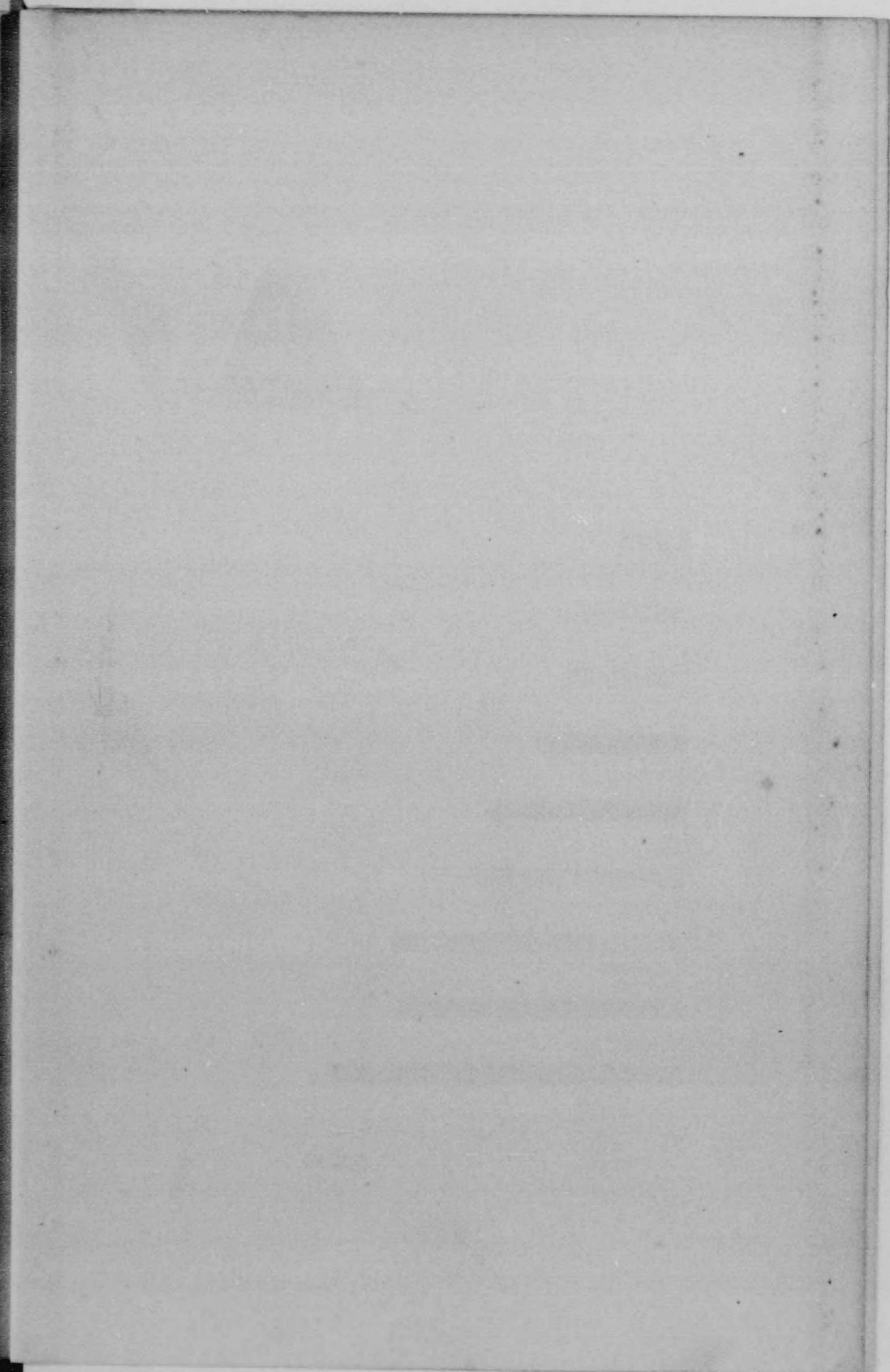
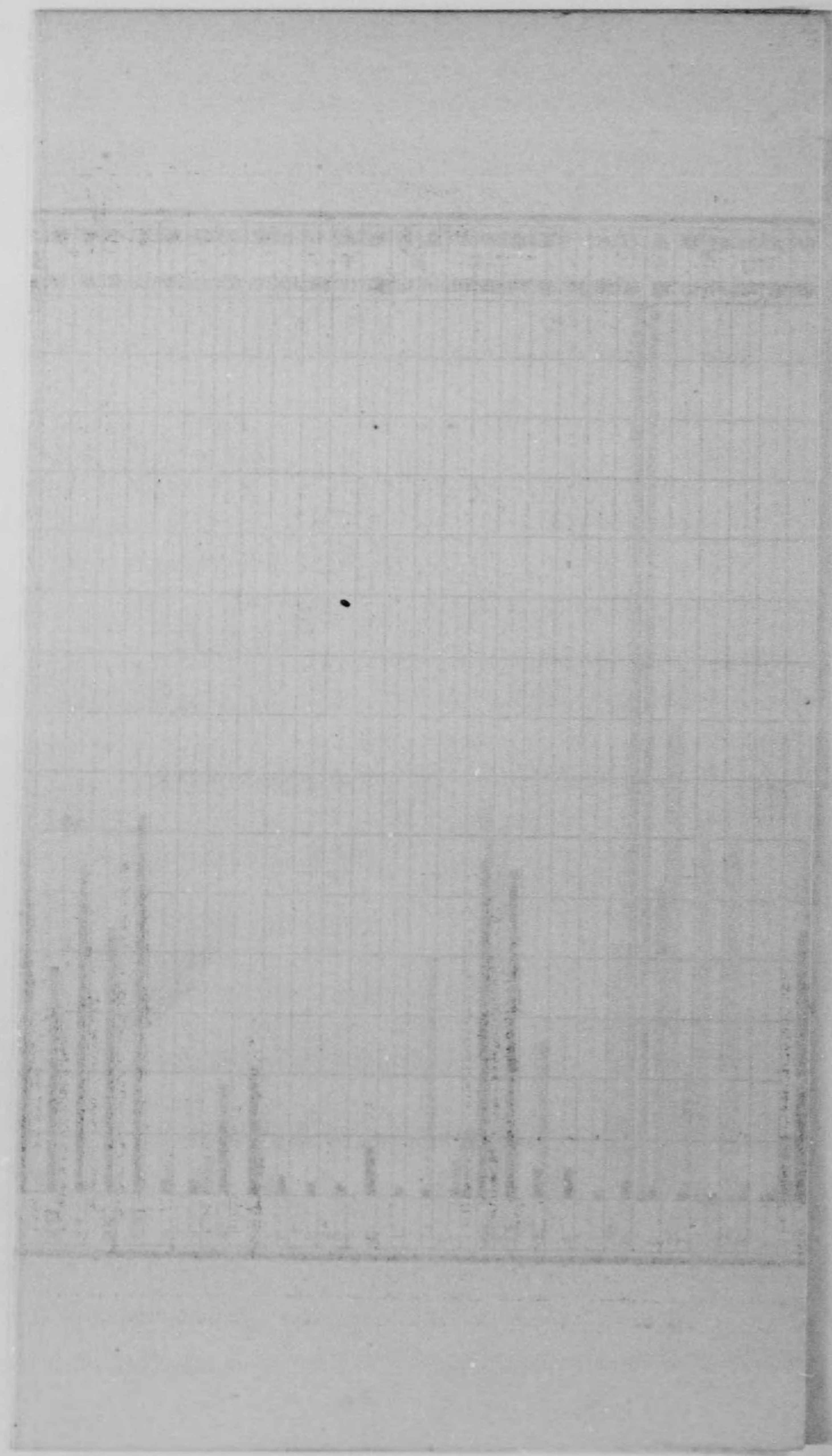
富士驛 富士梨搬出ノ狀況



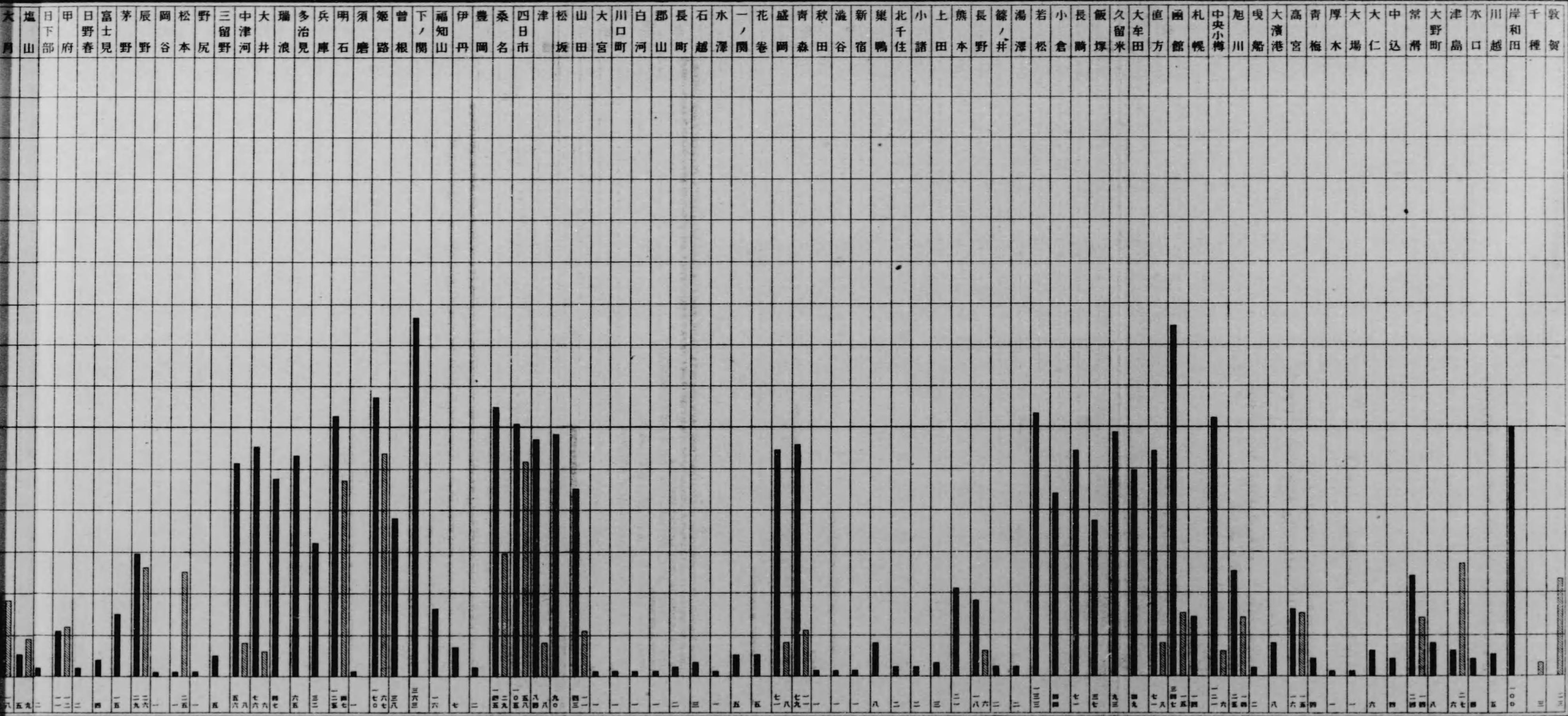
加島村農會石灰硫黃合劑製造

富鈴市年度別梨果發送個數



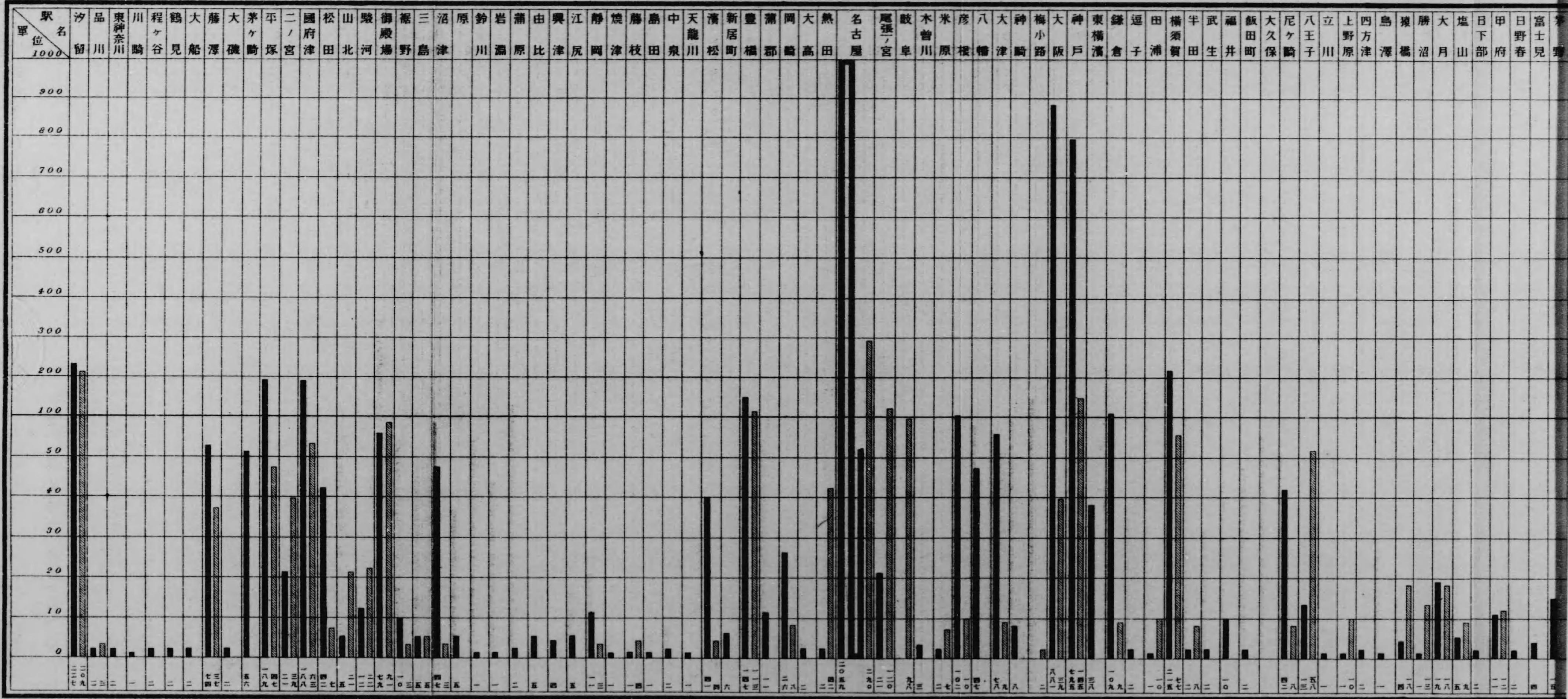


大正六年富士川梨果發送驛



果發送驛別噸數

富士驛
 鈴川驛



序

富士郡加島村にては既に數十年前農家の副業として梨樹の栽植を企てしも其の肥培管理の法未だ幼稚にして隨て利益の認むべきもの少なかりしが十年以來時勢の進運に伴ひ盛に増植し近時最も隆盛を極むるに至れり而して數年前梨果の産額稍増加したるの時恰も富士驛新設せられたるを以て栽培家は自家生産の梨を各市場に輸送したるも販賣の法其の宜しきを得ざりし爲問屋の爲めに翻弄せられ豫期の利益を得ざりしのみならず或は却て多大の損失を招きたるものありき然れどもこの苦き經驗は反て栽培者に共同團結の必要を感得せしむるの動機となり明治四十四年有志胥謀りて産業組合法に據る信用購買販賣組合を組織せらるゝに至れり爾來役員と組合員は協力一致して或は栽培法の研究に或は荷造の改善に或は販路の擴張に全力を傾注せしかば雷に商賈の術策に乗せられざるのみならず競て各市場に歡迎せらるゝに至り富士梨の聲價頓に揚れり組合の斯くの如き好成绩を收むるに至るや初め其の前途を危ぶみ加入に躊躇せるものも續々加入して逐年組合員の數及販賣數量を増加し昨大正六年度の如き賣揚高一躍二十萬圓の多額に上り産業組合中央會より其の成績優良

なるの故を以て表彰せらるゝに至れり大正七年度は相場昂騰と豊作とに依り優に三十萬圓餘の巨額に達せんとするの盛況を呈するに至れり
抑本組合の組合長理事等幹部は常に組合の爲めに獻身的努力を吝まず組合員は絶対に幹部を信任し事業の經營施設等一に幹部の裁量に任せて敢て疑はず爲めに業務開始以來數年ならざるに異常の發展を遂げ且つ敏活にして徳義を重んずる組合の活動は富士梨の信用を益高からしめ今日に於ては東西市場の各問屋は争て其の委託販賣をなさんとし恰も富士梨委託の有無が問屋の信用如何を卜知するが如き觀あり組合の實績此の如く市場に於ける好評上述の如くなるを以て他の梨産地は勿論組合組織を必要とする業務に關係するものは遠近を問はず親しく其の活動狀況を視察せんとし組合を訪ふもの踵を接するに至れり

一昨年農家の副業改善に熱心なる加島村農會は一般農事の改良進歩を圖ると同時に益梨樹栽培の奨励と組合の穩健なる發達とを促進せんとし余に農事監督の推舉を囑せらる余は其の意を諒し意志鞏固にして業務に熱心親切なる新井誠一郎君を薦めたり君赴任後一般農事の改良に腐心すると共に梨業の改善には一段の努力をなし其の成績大に見るべきものあり而して君は當業者指導の劇務の傍松永農會長の旨を承け筆を呵して富士梨の一般及組合の實況を記述し富士梨之概要と題し余に一讀を需めらる縋きて之れを見るに記する所極めて微細能く富士梨の今日あるを了解せしむるを得若し夫れ組合を訪ふもの親しく組合の實況を視察し而後本書を熟讀せば梨樹栽培の一般に通じ組合の眞髓を明かにすることを得て裨益する所多大なるものあらん聊か所感を記して序となすと云爾

大正七年九月

恩 田 鐵 彌

緒言

本郡は梨の生産地として名あるのみならず其産額亦全國に冠たるに關らず之れが事實を窺ふに足るべき資料なきは斯業發達上遺憾とする所なり

仍て本會は富士梨に關する事項を蒐集し以て世に紹介せむとし大正六年五月より調査に著手しこゝに本書を編纂するに至れり幸に當業者諸士の參考となるを得ば本會の満足之れに過ぎざる也。

而して専ら斯事に膺りしは本村農事監督新井誠一郎氏にして本務の餘暇調査に従事せしめたるを以て時に遺漏なきを保し難しそは完成を他日に俟たむとす

本調査施行に當り本縣立農事試驗場及本郡農會並郡下町村農會

より多大の便宜を與へられたる好意を謝す

大正七年九月

静岡縣富士郡加島村農會長 松永正名

静岡縣富士郡加島村農會長 松永正名
より多大の便宜を與へられたる好意を謝す
大正七年九月

富士梨之概要

目次

第一編 富士梨之栽培	一
第一章 由來及現況	一
第二章 位置及地勢	五
第三章 氣候	六
第四章 地質及土性	一一
第五章 品種	二一
第六章 栽植	三一
第七章 間作及耕耘除草	三三
第八章 肥料及施肥法	三三
第九章 剪定整枝	四〇
第十章 摘果	四九

二

第十一章	採收	五〇
第十二章	收支計算	五三
第十三章	病害并驅除豫防法	六三
第十四章	虫害并驅除豫防法	七一
第十五章	病虫害驅除豫防劑	九〇

第一編 加島村農會施設事業

第一章	視察員の派遣	一〇三
第二章	梨果並梨園經營品評會	一二五
第三章	肥料試驗地の設置	一三八
第四章	剪定指導	一五一
第五章	梨樹研究会	一五二
第六章	模範梨園設置	一五六
第七章	園藝講習會及講話會	一六三
第八章	石灰硫黃合劑製造	一六三

第九章	病虫害驅除豫防指導	一六八
第十章	加島村農會の梨業に對する改良方針	一七一

第三編 富士梨と梨業組合

第一章	組合の概況	一八一
第二章	組合設立の動機及經過と其變遷	一八三
第三章	組合事業經營の方法	一八五
第四章	有形無形の効果	二〇一
第五章	將來の計劃	二〇五
第六章	組合員に關する事項	二〇六
第七章	累年貸借對照表及損益計算書	二〇九
第八章	組合定款及議事細則	二二五
第九章	事業執行細則及處務規定	二四三
第十章	事業報告書	二五一
第十一章	富士梨販賣方法	二八〇

第十二章 富士梨の特點……………三〇一

第十三章 市場に於ける取引並他府縣産との競争……………三〇五

一 名古屋枇杷島市場……………三〇五

二 豊橋市場……………三〇七

三 大阪市場……………三〇七

四 神戸市場……………三〇七

五 四日市市場……………三〇八

六 下ノ關市場……………三〇八

七 久留米市場……………三〇九

八 小田原藤澤鎌倉横須賀市場……………三一〇

九 東京及横濱市場……………三一〇

第四編 梨經營法……………三一五

第一章 梨經營……………三一五

第二章 梨業兼營普通農業……………三四八

附 録

一 静岡縣に於ける梨生産額郡別表……………三七四

二 仕向地別鐵道賃銀表……………三七六

三 縣外輸出地別梨實調査表……………三八一

目次終

富士梨之概要

第一編 富士梨之栽培

第一章 由來及現況

本郡梨栽培地は從來米麥作を專業として他に殆んど副業として視るべきものなかりしも獨り梨樹の栽培は最も能く本郡南部の土質に好適し今や栽培反別三百五十町歩に達し其産額二百七十萬貫價格六拾萬圓を越え實に郡下の重要物産たり今其起原を討ぬるに富士梨の濫觴とも稱すべきは明治元年加島村水戸島鹽澤茂三郎氏庵原郡袖師村より白玉淡雪ケシ等の苗木數十本を取寄せ庭前に試植したるを以て嚆矢とす

同三年に至り田子浦村字宮島丹羽武平なるもの庵原郡高橋邊より苗木を購入し栽植せり越えて同六年加島村水戸島鹽澤茂十郎氏は淡雪平子ケシ等の苗木を購入し約二反歩の坪山に試植せしに其結果良好なりしを見て同十年に至り千葉縣八幡及庵原郡

袖師村より平子幸藏枇杷形上花松尾等の苗木を多數購入し尙自ら養成せる苗木を以て肥沃なる水田約六反歩に試植せり然るに當時近郷の者は其舉を無謀となし嘲笑せしも同氏は益々素志を堅め熱心經營せり然るに同十二年頃に至り鹽澤茂三郎氏の試作のもの成績甚だ良好なりしを以て同村佐野多作鹽澤惣十郎三浦彌九郎氏等も亦千葉縣八幡及庵原郡袖師村秋葉新田苗木商千葉淺次郎なるものより平子上花幸藏軸太等の苗木を購入栽植せると其成績良好なるに依り先づ附近の農家同化せられ次第で最初嘲笑せし人々も梨栽培に従事し明治二十四五年頃には附近一般に普及するに至れり

斯く栽培者の數頓に増加し産額亦多大となるに至れりと雖も其の販路としては附近の町村のみなりしを以て忽ち生産過剰を來し價額低落し斯業者の困難一方ならず爲に伐採するものさへあるに至れり時に本村水戸島の同業者なる三浦彌九郎氏は深く是れを憂ひ明治二十七年單身梨を携へ名古屋豊橋及び伊勢方面に到り百方苦心奔走の結果漸く該方面に販路を開くを得たり茲に於て價額復活し需要は年と共に益々多きを加へしを以て當業者は愁眉を開き再び盛に栽培するに至れり

以來長足の進歩をなし一方栽培反別及生産額の増加すると共に他方に於て農會及組合によりて販路の擴張を計り以て現今の盛況を呈するに至れり郡下の梨栽培反別は近年著しく増加したりと雖も樹齡若くして未だ結果せざるもの尠しとせず若し數年を経て結實の盛期に達すれば數倍の産額あるべきを信ず願みて四十年と比較すれば其進歩の長足なりしを知るを得ん茲に累年の統計を示せば實に左表の如し

年次	樹數	作付反別	收穫高	價格
明治四十年	二二,六五〇 _本	一〇,一三 _町	五八四,九〇〇 _円	二一,七六三 _円
同 四十一年	一四,一三五	一一,一七	六二七,一七五	二二,五五五
同 四十二年	一七,〇〇〇	一一,五五	七二七,七〇〇	一五,一九〇
同 四十三年	二〇,〇二八	一五,七六	八五,六八五	二六,四〇一
同 四十四年	二八,九六六	一九,一四	八七九,五八五	一六,三〇五
大正元年	三三,二三五	一九,九二	九六六,五六〇	一七,四九九
同 二年	三六,二三五	二二,二四	一,〇〇六,三五〇	一九,〇九〇

同三年	二五,二六七	二,二一四	一,一五五,五五	二四,一三五
同四年	二六,二二七	二,四三五	一,七六四,六三	三四,六九七
同五年	二九,九二七	二,八九八	一,五九六,二〇八	三三,〇三九
同六年	三四,一〇五二	三,四五五	二,六三七,三六〇	六二,一九五

次に大正六年の統計書に據り町村別に其産額を示せば左の如し

町村名	反別	收穫高	價格	栽培者 二反歩以下	栽培者 二反歩以上
加島村	一五,〇〇〇	一,一〇〇,〇〇〇	二八,〇〇〇	二八名	二七名
田子浦村	一三,〇〇〇	一,一〇〇,〇〇〇	二五,三五〇	二九	二一
岩松村	二,三四〇	一,一〇,〇〇〇	三六,〇〇〇	一五八	六九
元吉原村	一四,〇〇〇	六,七二〇	一五,〇九八	一三六	一七
島田村	一〇,七〇	八〇,〇〇〇	一七,六四〇	二八	三三
須津村	五,一〇	三三,一九〇	四,〇〇〇	一五	七
吉永村	四,一八	三三,三三〇	四,〇六七	九	八

應岡村	二六〇	一四,六一〇	二,〇〇〇	二	六
傳法村	一六〇	九,六〇〇	一,六〇〇	四	二
計	三,四五五	二,六三七,三六〇	六二,一九五	八五七	五五九

第一章 位置及地勢

梨の主なる栽培地は富士郡の南部に位し北方富嶽を負ひ南は駿河灣に面し西は富士川の急流を劃して庵原郡に相對す氣候溫和にして平坦なる沃野なり
 東海道往還並に鐵道線路は東西に貫通し富士驛及鈴川驛は本郡南部の中央に在り
 富士身延鐵道は富士驛を起點として大宮町及甲州身延山を経て甲府市に至るの鐵道にして現に芝川驛迄貫通し目下延長工事中なり里道は東西南北に區劃交叉して富士驛及鈴川驛に交通せるを以て貨物の集散輸送の便大に開け益々農産物の増殖發達を助長せり其盛夏の候梨果の運輸等に就ては最も便宜の地なり
 其主なる栽培地は加島村を第一として之に次ぐるに田子浦岩松元吉原島田の數ヶ村にして從來米麥の栽培盛なりしが特に近年梨栽培の盛なるに至れり

第三章 氣候

氣候は溫暖にして平均氣温十五度二分雨量は稍多く平均二千五百四十六mmにして雨天日數百四十四日なり

初霜は十一月十日乃至十二月二日にして平均十一月廿日とし終霜は三月十五日乃至四月四日平均三月二十四日なりとす

當地に於ける最高温度は八月にありて攝氏三十二度最低温度は二月にありて零下八度三分に下降せる事あり(富士農林學校調査降雪は殆んど見ず風向は冬季より初春には北風多し此間屢々西風起り氣候を寒冷ならしむ之を富士川出しと云ふ晩春より夏季に至る迄は溫暖の南風を常とす殊に梅雨期に際し南方より來る暖風は多量の水蒸氣を含むを以て時としては霖雨濛々として連日晴れざる事あり

初秋の候に至れば颶風の來襲する惧あり冬季は西北の烈風多けれ共快晴の日は此の季に於て最も多しとす

今左に富士郡立農林學校に於ける氣象觀測を表示せん

大正元年度

種目	月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
氣温	最高	六〇	九六	一一四	一五四	一八五	二二八	二五四	二八二	三二五	一九三	二三一	八三	一六六
氣温	最低	一四	一一	三	六七	一一二	一五六	二〇四	二〇五	一七〇	一一二	五五	〇四	九三
最高		二〇二	一三六	一五四	一八五	二二四	二四七	二八〇	三〇八	二五八	二二七	一六八	二二八	二〇七
晴天日數		二	一八	一〇	一四	一八	二	一三	二七	八	一九	一九	一三	一九一
曇天日數		九	六	一六	二	六	一五	一七	四	一五	九	七	一五	一三〇
降水日數		三	一一	一一	一五	一六	一六	一八	八	二二	一一	一〇	一〇	一五〇
降水量		一四八	二二三	九五	一五八	一〇七	二二八	七三	六〇	一九六	八七	一一三	一一三	

初霜 十一月十一日

終霜 四月十二日

初雪 十二月二十九日

第一編 富士梨之栽培
大正二年度

種目	月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
氣溫	最高	五二	七八	九二	一六二	一八二	二三〇	二五五	二六二	二三五	一九〇	一四三	八四	一六二
氣溫	最低	(-)二九	(-)〇八	(-)〇一	九三	一〇〇	一六一	一九三	一八五	一五八	二二四	四八	(-)〇八	八四
最高	最高	九三	一一〇	一〇〇	一九三	二二五	二四六	二七七	二八九	二五一	二二六	一七一	二二八	一九一
晴天日數	晴天日數	三三	二〇	二二	一〇	一七	一一	一九	一八	一一	一一	一七	二三	二〇三
曇天日數	曇天日數	五	七	六	一六	六	三	二	一〇	一六	一四	八	五	二七
降水日數	降水日數	六	六	六	一四	一三	一七	一三	八	一八	一三	一一	六	一一
降水量	降水量	二六	一六三	九五	一一	一六〇	二二	二七	一五二	八七	一六八	二〇七	一六三	一三一

初霜 十一月二日
終霜 三月二十七日
初雪 二月十六日

大正三年度

種目	月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
氣溫	最高	七四	六七	一三二	一四四	一八九	二三一	二七七	二七九	二五〇	一九二	一五〇	九三	一七二
氣溫	最低	(-)一一	〇八	四六	五七	二二	二六八	二二三	二〇七	一七七	八五	七一	(-)〇四	二五三
最高	最高	一一二	一〇四	一四六	一七七	二二七	二七七	二九九	三〇五	二七六	二三五	一八三	一四〇	二五三
晴天日數	晴天日數	二四	一四	一三	一八	九	一三	一八	二〇	一一	一三	一七	二四	九五
曇天日數	曇天日數	六	八	一〇	八	一三	一三	八	五	七	五	九	四	二四
降水日數	降水日數	六	一〇	一九	二二	二〇	二三	二二	一一	一二	一一	九	八	九六
降水量	降水量	一〇八	七四	一五七	一五九	一一五	一四八	七六	三八〇	四〇八	一〇七	一三〇	六七	一四三

初霜 十一月二十二日
終霜 四月十一日
初雪 十二月二十二日

第三章 氣候

大正四年度

種目/月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
氣溫	六二	七八	九五	一五、一	一八、六	二二、七	二六、八	二七、〇	二四、八	二〇、三	一五、三	一〇、〇	一七、〇
最高	一〇、八	一一、一	一四、二	一九、三	二二、〇	二五、七	二九、八	三二、六	三〇、四	二四、四	二二、二	一七、〇	二二、六
最低	(-) 一、三	〇、三	〇、七	七、五	一〇、八	一七、八	一八、〇	二二、五	一八、八	一一、七	五、八	(-) 〇、一	九、三
晴天日數	二五	二五	二〇	二一	一五	八	三	一五	一九	一六	一九	一九	二〇、四
曇天日數	四	八	二	三	〇	二	五	九	五	七	八	九	九、一
降水日數	九	一三	二	一四	一〇	二	一〇	一五	一四	二	八	四	一四、一
降水量	一六、一	一三、四	一一、九	一一、一	二、八	三、二	一四、九	二四、九	二二、五	二二、六	一三、五	五、四	一四、一

初霜 十一月十五日

終霜 四月八日

初雪 二月二十五日

大正五年度

種目/月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
氣溫	九〇	八三	九五	一五、八	一九、三	二二、六	二六、二	二八、三	二六、三	一八、五	一四、六	九、六	一七、四
最高	一四、二	一一、四	二二、六	一九、九	二二、四	二五、一	二八、〇	三〇、四	二八、一	三〇、七	一七、九	一二、七	二〇、二
最低	一〇、一	(-) 一、三	(-) 一、八	四、七	九、七	一八、〇	二〇、〇	二二、五	一九、三	一二、六	七、六	二、五	九、四
晴天日數	二四	一八	一八	八	一〇	六	一五	二〇、〇	一五	八	一三	一九	一六、六
曇天日數	六	八	八	一〇	一八	一八	一三	八	九	三	七	九	二、六
降水日數	三	七	八	九	一〇	一八	一四	一一	一〇	二	六	二	二、六
降水量	二二、〇	三一、一	二二、一	二二、五	一九、三	二〇、二	二二、五	二二、二	二八、八	一六、五	一三、〇	二、八	一三、八

初霜 十一月十四日

終霜 四月七日

初雪 二月十二日

注意

- 一、日照計の設備なし
- 二、降水量は各月平均一日の量に付き合算せず
- 三、降水量全量は各年のものを附記し置く
- 四、晴天日数は氣象觀測規定による曇量七以下のものとす
- 五、曇天日数は曇量八以上のものとす
- 六、降水日数は氣象觀測規定による午前中に降りしもの或は午前十時觀測時以後のもの等記入稍々複雑なるにより従て實際の雨日より増し此の日数は各欄に記載せる日数を合算す

第四章 地質及土性

富士川(下流東部)及澗井川流域

本區域として調査したる部分は富士郡、吉原、島田組合町村、元吉原村、傳法村、鷹岡村、岩松村、田子浦村、加島村の七ヶ町村にして其面積九千九百八十九町一反に達し内田千九百九十七町三反畑七百三十二町九反山林七千七十六町七反原野百八十二町二反とす而して梨栽培地に於ける土質は大別して火山岩層地及第四紀新層地の二系統となすを

得べし今其分布の状態及土性の概要を記すれば次の如し

一 火山岩層地

本系統に屬する地域は岩松村、鷹岡村、傳法村に於ける丘陵地の一帯之に屬すと雖も更に之を大別して二種となすを得べし

即ち一は岩松、鷹岡兩村の北部に連亘する丘陵地にして輝石安山岩及安山岩質集塊岩に依り構成せらるゝものなり他は富士燒岩及火山礫により構成せられたるものにして傳法村北部及鷹岡村南部の丘陵地之に屬す、兩者共に大小丘陵の起伏多きも傾斜急なるもの比較的に尠なく一般農耕地を構成す

土性 本系統に屬する土壤は富士山爆發及噴火の影響を蒙り礫確なる砂礫及火山灰を被覆し吸濕状態に於ては粘着性を帯ぶると雖も腐植質物の含量多く大別して礫質壤土及腐植質壤土の二種となすを得べし而して底土は母岩又は茶褐色埴土より成るもの多く往々燒石の妙層を支へ、數尺にして母岩に達するあり土性分布の状態を見るに岩松村大字岩本、鷹岡村大字天岡、大字入山瀬方面の臺地及傳法村大字傳法に於ける吉原町に接近したる臺地の一帯並に丘陵凹地は一般に腐植質壤土に屬し其他の大部分及丘陵凹地は概ね礫質壤土を構成し而も腐植質物の含量尠からず

本系統に於ける土壤は概ね有機質物及火山灰を混雜するを以て膨軟なる状態に於ては極めて孔竅量に富み大氣の透過良好なりと雖乾燥に過る頃は強風の爲に植物養料の貯藏庫たる細微の土粉を飛散するを以て土地の瘠薄を來すのみならず降雨に際しては過分の水濕を吸収し遂に沈定固結して植物生育上惡影響を及ぼすを以て常に水濕の状態を適當ならしめ時々耕耘を行ひ之等理學的性質の改良に努めざるべからず更に化學的試験成績に就きて觀るに窒素及磷酸の吸收力著しく強大なり而して腐植質物の含量多きを以て土中窒素の含量極めて多しとす磷酸及加里の有効量亦尠ならず一%枸橼酸に溶解する石灰の量も豊富なり又鹽化加里法に依る酸度は特に強度のもの無く弱酸又は中性の程度にあり

二 第四紀新層地

本區域に屬するものは富士川下流東南部潤井川沿岸及浮島沼近接の卑低地並に海岸地方一帯の地にして全部平坦なる高程二十米を出でざる地帯にして大部分農耕地を構成す

土性 富士川は其水源を遠く甲斐國八ヶ嶽に發し大小の支流は花崗岩地、古生層、中生層、第三紀層及火山岩層地を經過し本流に合し遂に本區域に達し土砂を沖積し潤井川

は其の幹支を論せず悉く火山岩地より發源し共に其流域の土壤を構成す而して兩川の氾濫當時の状況により各種の土性を現出せりと雖も大別して壤土及砂質壤土、砂土の三種に區別することを得べし、今其の分布状態を示せば次の如し

加島村、島田村、岩松村に於ける本系統耕地の大部分及田子浦村、大字助六以東一帯の地は壤土を構成し就中岩松村に於て火山岩層地に接近する部分は礫質壤土を成す而して又元吉原村、鈴川、今井地方一帯及加島村、柚木一方面に於ては埴質壤土を構成し殊に元吉原村に於けるものは低濕地にして腐植質物の含量尠なからず砂質壤土として見るべきものは田子浦村、大字助六以西及加島村、森島、宮下方面を経て岩松村、大字松岡に至る富士川沿岸地の一帯にして元吉原村、大字田中、西相原方面は砂質壤土又は壤質砂土に屬するも腐植質の含量比較的に多し其他富士川下流及海岸地方に於ては砂土又は壤質砂土を構成す

理學的性質に就き按ずるに富士川接近地及海岸地方を除くの外は大體に於て砂子及粘土質物の分配割合に平等にして土中大氣及水分の透過良好なりと雖も火山灰の含量多き地方に於ては降雨に際し過量の水分を吸収し沈定壓迫せらる、時は土層中の孔隙は全く水分を以て充實せられ大氣の透過不充分にして植生に對し不良なる作用

を喚起するものなり尙元吉原村地方に於ける低濕地に於ては常に過量の水分を吸着するを以て有機物の酸化分解を妨げ遂に腐植質物の集積を來せるものなるを以て排水を講じ風化作用を促進するに努めざるべからず

更に化學的成分に就きて見るに海岸地方及富士川接近の砂質土を除くの外は火山灰及腐植質物の含量比較的多きを以て窒素及磷酸の吸收力は一様に強大なり而して窒素全量及磷酸加里の有効量並に一%枸橼酸に溶解する石灰の量比較的多しとす

然れども現地に於ては浮石其他の砂礫の含量多きを以て其分量に至りては分析成績に比し稍稀薄せらるゝものと謂はざるべからず鹽化加里法による全酸度は概して尠なく中性又は弱酸の程度にして強度の酸性を帶ぶるもの殆ど無しとす

要するに本地は化學的見地よりする時は肥料の吸收力大にして且つ有効性養分の含量は敢て尠からずと雖も理學的性質に至りては火柴を夾雜するを以て安倍、大井、天龍等の諸川の流域たる第四紀新層地に比し良好なりと稱し難きを以て生産力増進の一策として耕耘を盛ならしめ大氣及水分の透過を良好ならしむるに努めざるべからず次に本區域に於て調査したる町村別調査箇所採取土壤點數分析土壤點數及其の理化學的試驗成績竝に地質土性別平均化學的試驗成績の概要を表記すれば次の如し

一 町村別調査箇所採取土壤點數分析點數

郡市町村名	調査箇所數	採取土壤點數	分析點數
富士郡 加島村	二元	八	二
同郡 田子浦村	一元	四	二
同郡 岩松村	二元	五	三
同郡 傳法村	一元	四	一
同郡 鷹岡村	一元	六	三
同郡 元吉原村	二元	八	三
同郡 吉原島田組合町村	二元	四	二
合計	一四四	三三	一六

二 供試土壤採取地名及地質土性其他

土壤番號	郡市	町村	大字	小字	地番	地目	地質	土性	氣乾細微土百立方センチメートル平均重量	反歩深サ三寸三分ニ於ケル土壤重量
一	富士郡	加島村	元市場	—	三	田	第四紀新層	壤土	八七五	一三〇七

番號	土壤	窒素	磷酸	水分	一%枸橼酸 = 溶解性	石灰	游離腐植酸	氣乾細微土百分比	氣乾細微土中鹽化
十五	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十四	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十三	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十二	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十一	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九	同	同	同	同	同	同	同	同	同
八	同	同	同	同	同	同	同	同	同
七	同	同	同	同	同	同	同	同	同
六	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一	同	同	同	同	同	同	同	同	同

十六	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同村今井城之内									
田									
同									
壤植土質									
七三〇〇									
一九四七六									

三 化學的試驗成績

番號	窒素	磷酸	水分	一%枸橼酸 = 溶解性	石灰	游離腐植酸	氣乾細微土百分比	氣乾細微土中鹽化
八	三〇.九 一三.三	一三.〇 一三.四	二二.一 二一.三	〇.三 〇.四	〇.〇 〇.一	〇.〇 〇.一	二.九 二.八	〇.三 〇.六
七	三三.六 三三.九	八.九 五.九	三.二 三.〇	〇.三 〇.三	〇.〇 〇.〇	〇.〇 〇.〇	二.二 二.二	〇.三 〇.五
六	六〇.六 六〇.六	二.七 二.六	五.八 五.〇	〇.五 〇.五	〇.〇 〇.〇	〇.〇 〇.〇	七.四	〇.五
五	一五.二 一五.三	五.七 五.八	〇.八 〇.六	〇.三 〇.三	〇.〇 〇.〇	〇.〇 〇.〇	一.八	弱酸
四	二九.九 二九.六	五.一 五.〇	一.四 一.五	〇.二 〇.二	〇.〇 〇.〇	〇.〇 〇.〇	二.三	中
三	四一.七 四一.三	一.三 一.四	二.〇 二.〇	〇.三 〇.三	〇.〇 〇.〇	〇.〇 〇.〇	〇.七	中
二	一七.五 一七.四	三.七 三.七	一.三 一.三	〇.三 〇.三	〇.〇 〇.〇	〇.〇 〇.〇	〇.七	〇.四
一	三〇.九 三〇.九	一三.〇 一三.四	二二.一 二一.三	〇.三 〇.四	〇.〇 〇.一	〇.〇 〇.一	二.九 二.八	〇.三

九	六四九三〇	二四五、二七四	七五二〇〇	〇.七四三三	〇.〇二八	〇.〇〇八九	〇.四三七	七六二	中
十	六八八五七	三三九、七五三	五九〇〇〇	〇.五九九〇	〇.〇〇三	〇.〇〇九三	〇.三三四七	四五八	弱
十一	五四九四四	一八九、〇五二	四、六三九〇	〇.五三七	〇.〇三七四	〇.〇一八一	〇.三六八〇	三〇四	中
十二	三八四七五〇	一四一、〇三八	三、〇二〇	〇.三六八一	〇.〇四一七	〇.〇一四七	〇.四三六〇	一六八	同
十三	四〇五、三〇一	八六六、〇三三	四、九九四一	〇.五四九〇	〇.〇四四五	〇.〇一六五	〇.四九三〇	二五四	同
十四	一七四、六八六	七五五、二八一	三、五〇〇〇	〇.三八一一	〇.〇三五四	〇.〇一〇七	〇.三五三三	一	同
十五	二六、〇三二	六九〇、七七一	一、〇八二〇	〇.〇二〇天	〇.一四一一	〇.〇三三五	〇.一九九七	四四〇	弱
十六	三四三、〇六三	七四五、七三四	三四九〇〇	〇.三六八一	〇.〇〇一九	〇.〇一九一	〇.三二八七	一	中

四 地質及土性別平均化學的試驗成績

地質	土性	吸收係數		窒素全量	一%枸橼酸ニ溶解性		
		窒	磷		加	里	
火山岩層	壤土及礫質壤土	五八、五元	二〇六、六七〇	〇.五九二九%	〇.〇三二六%	〇.〇一三五%	〇.四三三%
同	腐植質壤土	六四九、三〇〇	二四五、二七四	〇.七四三三	〇.〇二一八	〇.〇〇八九	〇.四三七

第四紀新層	植質壤土及壤土	窒	磷	窒素全量	一%枸橼酸ニ溶解性		
同	砂質壤土	三〇六、三三三	八八九九一	〇.三三三三	〇.〇一九四	〇.〇一四三	〇.三三四
同	壤質砂土	二七七、三三〇	八一九七〇	〇.三三四五	〇.〇四四四	〇.〇一九四	〇.四〇五〇
同	同	二六〇、〇三二	六九〇、七七一	〇.三〇二六	〇.一四一一	〇.〇二二五	〇.一九八七

以上は本縣立農事試驗場に於て大正四年土性調査を行ひたる成績を記載せるものなり

第五章 品種

過去と現在の栽培品種を比較するに其間多少の變遷なき能す數十年前に於ては五月丸軸太、江戸屋土用子等の劣等種ありたりと雖も時世の進運と新種の發現とに依り漸次減少し現今に於ては殆んど數ふるに足らざる有様となれり從來果物市場に於ける嗜好の状態を視るに程度尙幼稚にして重きを外觀に置き風味の如きは寧ろ第二位に置かる、傾向あり左れば成る可く大形にして圓形又は扁圓形を呈し果面の滑澤なるものは歓迎され之に反して小形なるか或は二十世紀の如き外觀の不良なるものは香味の如何に拘らず擯斥せらる、が故に主として栽培せらる、ものは實に斯かる資質

を有するものならざるべからざりしが現今需要者の嗜好向上し外觀よりも品質に重きを置くに至らんとせり古くより栽培に従事せるものは水熊(早生赤)平子(太平)等多く栽培し本郡梨の二割を占む然るに嗜好の程度向上するに連れ漸次長十郎種に代はらんとするの傾向あり

長十郎種は肥培容易く頗る豊産にして品質絶佳世人の嗜好に適し需要廣く市價自ら高く最も有利有望なれば明治三十七年より今に至るも依然梨中の重鎮として稱揚せられ優に富士梨の七割を占む今本郡に於て最も廣く栽培せらるゝ和梨を左に掲げ其内數種に就き解説せん

品種名	形状	皮膚	品質	熟期	收量	樹勢	備考
淡雪	扁圓中	帶黃綠滑	中	八月中旬	中	強	
江戸屋	扁圓小	赭粗	中	八月上旬	多	強	
五月丸	圓小	黃褐滑	中	八月上旬	多	強	
眞鍮	圓小	赤褐滑	中	七月下旬	多	強	

獨乙	扁圓中	赤褐滑	上	八月下旬	多	強	
赤穂	圓中	黃褐滑	中	八月中旬	中	中	
長十郎	圓大	赭滑	極上	八月中下旬	多	強	有
幸藏	扁圓中	赭粗	上	八月中旬	中	強	
市原早生	長圓中	淡褐滑	上	七月下旬	多	強	
今村夏	尖圓大	淡褐粗	上	八月下旬	多	強	
今村秋	尖圓大	暗褐黃粗	上	九月下旬	多	強	
太白山	圓中	淡綠黃滑	極上	九月上旬	中	中	
晚三吉	尖圓大	淡綠褐滑	上	十月中旬	多	強	
明月	長圓大	淡黃褐滑	極上	九月中旬	多	強	有
二十世紀	扁圓小	淡綠黃滑	極上	八月下旬	中	中	有望ナレドモ病害ニ犯サレ易シ
世界一	扁圓中	帶綠褐粗	上	九月上旬	多	強	
金龍	扁圓中	淡綠褐	上	九月上中旬	多	強	有望
平子(太平)	扁圓大	帶綠褐粗	中	九月中下旬	多	強	有望
水熊(早生赤)	圓中	暗褐黃	上	九月中旬	多	強	有望

松尾(大古河)	楕圓大	暗褐	中	十月上旬	多	強	
枇杷形(赤龍)	扁圓大	淡綠褐粗	中	十月下旬	多	中	
早生長十郎	扁圓中	赭滑	上	八月上旬	多	強	有
新長十郎	扁圓大	暗褐黃滑	上	八月上旬	多	強	有
力彌	扁圓大	帶綠黃滑	中	九月上旬	中	強	有望
敷島	扁圓中	赭粗	中	八月中旬	中	強	
博多青梨	短卵圓中	淡綠黃滑	上	八月上旬	中	中	

一、新長十郎

果形は中の大にして扁圓形果皮は帶綠赭色を呈し肉質柔軟にして風味は長十郎より良く甘味多漿早生種中味は第一等なり果心小さく種子少し普通七八十匁にして百匁以上の大果を見る事多し成熟期は早生長十郎と同じく八月上旬なり樹勢強健なれども長十郎より豊産ならず果實指頭大の時落果多く果形の一定せざるは此種の缺點なれども早生種中有望なり

二、獨逸

果形は中にして圓形なり普通七十匁位のもの産す果皮は赤褐色にして品質上等なり即ち甘味多漿稍々香氣あり樹性は強剛なれども黒星病に犯され易し豊産にして八月上旬より採收するも長く樹上に置く事を得葉は基脚窪み幅二寸九分長四寸一分位葉柄は短く且太く普通一寸位とす鋸齒は粗にて深からず早熟種の有望種なり

三、幸藏

果形は扁圓にして果皮赭褐色を呈し粗なり果肉は甘味多漿にして品質は上等なり八月下旬に採收す普通五十匁位のものにて八十匁位の大果を産する事あり樹性は強剛なれど豊産ならず

四、明月

本種は加賀國の原産にして本邦種中の最美に位する良種なり果は大にして長圓形を呈し果皮は滑澤にて鮮赭色を呈す果面に散在する斑點は圓形に果梗は中位にて肉硬なり梗窪は淺く蒂孔亦淺し有蒂種にして果肉は白色にて酸化せず果心は小形にて品質極上等甘味多漿にして永く舌中に甘味を残すを特長とす本邦種中の優品にて其右に出づる者殆んど無し九月上旬に採收し百七十匁以上に達する大果をも産す樹性は強剛にして枝條良く充實す節間長くして稍々屈曲す樹皮は飴綠色に稍々褐色

を含む其上に白灰色の縦走する覆物様の色ある事甚し斑點は橢圓形にして尖端のものは縦走す芽は小形にて稍々開く方なり芽色黒褐色なり葉は大形にして廣く基脚は窪む事なし葉端は急にとがり葉柄は細くして葉は一般に垂下するもの、如し鋸齒は深からず樹性は強健なれども往々黒星病に犯さる、事多く本邦種としては結果少き方なれど本村に於て豫備枝更新の剪定法に依りて非常に良結果を得つ、あり

五、早生長十郎

果は圓形又は扁圓なり果皮は赭色を呈し滑澤なり斑點は多角形にして長十郎に等しく蒂窪極めて美なり且つ稍々深く斑點の散在は粗とす品質は上等にして八月上旬に採收す中果は六十夕内外にして八十夕以上に達する大果を見る事あり富士梨早熟種中最も有利なる種類なりとす

六、長十郎

本種は神奈川縣橘樹郡大師河原の當麻長十郎なる者實生より選擇したるものなり果は圓形大果にして玉揃良く果皮は淡赭色なり果肉白色質緻密にして稍堅きも漿液多く甘味強し而して本種は甘味に於ても中熟種中の優品たるを失はずと雖も寧ろ其外觀の美なる點に於て常に同熟期の他種類よりも歓迎せらる貯藏力乏しきは本種の

缺點なり八月中旬より採收す中果は七十夕にして大果は百夕以上に達す

樹勢強健に枝梢中能く側枝を生ず花芽の着生良好最も豊産にして十三、四年生棚造七十五本植にて普通千二百貫を産す葉は甚大形にして基部は凹む其色澤は濃くして鋸齒は粗にて今村夏等より淺し葉柄は短かきものと知るべし即ち幅二寸八分長四寸二分葉柄一寸位なり

苗木の尖端より下方に五葉位迄は葉縁の稍々赤き小形の葉を附着す其尖端に於て棍棒狀に成長止るもの、如きは極めて少し葉の基部に托葉稍々多し極めて稀に一節三葉を附するあり幹は肥大して良く成長し一見水質の充滿せるもの、如し其色濃綠色に稍々餘色を帶ぶ枝條の斑點は凡そ苗木の如し即ち苗木にありては長さ四分の三以下に於て圓形をなし白灰色を呈し斑點上に褐色の條を存す斑點の散在は上下一様なり而して極めて微小なる斑點を混散することあり下部數寸の部には横に長き斑點を稍々存すあり尖端のものは長し新梢には綿毛を有す瘡地に栽植せる本種は樹皮に褐色を帶ぶる事多し營利的栽培として最も有望にして富士梨の大部分は本種なり

七、廿世紀

果は小形にして扁圓形なり果皮は淡綠黄色にて平滑なり果肉純白色にして質緻密柔

軟甘味にして漿液多く口中に入るれど溶くるが如き感あり一種の優味あり外皮薄く品質極上等なれども貯藏には適せず樹性は強剛なるも輪紋病黒星病に犯さる、事甚し餘り豊産ならずと雖も有望種とす

八、金龍

果形は扁圓にして果皮淡緑褐色を呈し粗なり果肉は甘味多漿にして上等なり九月中旬下旬に成熟す普通七十匁位のものにして百四十匁位の大果を産する事あり樹性强剛にして豊産晩熟種として最も有利なり

九、平子(太平)

果は扁圓大果にして玉揃稍々不良なり外皮厚くして稍々粗帯緑褐色にして果面の點紋比較的大なり果肉は外部に青味を持ち脆軟にして多漿甘味なれども長十郎程濃厚ならず白糖の赤糖に於けるが如く淡泊なる處に一種の妙味あり成熟期は九月中下旬なれば長十郎種に次で市場に現はれ大に歓迎せらる樹勢中位にして輪紋病に犯され易し枝條稍々太く花芽の着生最も良好なるが爲に主枝の伸長を妨ぐる事あり故に肥料を充分に施し幼樹の際は主枝の伸長に力むべし

一〇、水熊(早生赤)

果は圓形中果なり暗褐黄色を呈し斑點は多角形にて密に散在す斑點の色は淡し梗窪は狭くして圓滑なり蒂孔稍々深し果梗は稍々長きを普通とす果肉は白色にして果皮の近くは稍々綠色を帯ぶ心環は稍々大にて蒂窪に接す品質は上等とす成熟期は九月上旬より下旬とす中果は七十匁にして八十匁以上の大果を産する事あり樹性は中位にして黒星病輪紋病にかゝり易し葉は長くして長十郎或は晩三吉に反し外方に反る尖端は細くして卷くの傾向あり葉の基脚は凹む事少くして殆んど水平に後次第に圓くなれり色は濃くして光澤あり葉は一見硬固なる感あり葉脈は稍々帯赤色にて鋸齒は細くして鋭く裏には綿毛を有する者多し

樹皮長十郎の如きも稍々濃色なり成長の程度は長十郎に劣る斑點は大形且稍々不正なる圓形とす斑點は枝條の基部に多く新梢のものは長形とす斑點の色は一見褐色にして稍々凸出す苗木にありては幹の末細し其上端淡紅色を帯ぶる小形葉の四葉位を密生す

各品種の開花期

満花期は八分通開きたる時とす年により多少の差あり又地勢土質樹齡等によりて多少の差あるも大正六年度に於ける調査は左の如し

各品種	開花初	満花	最終
長十郎	四月八日	四月十五日	四月二十二日
平子(太平)	四月十七日	四月二十三日	四月二十五日
水熊(早生赤)	四月十七日	四月二十三日	四月二十五日
眞鍮	四月十一日	四月十七日	四月二十四日
幸藏	四月八日	四月十五日	四月二十二日
獨乙	四月六日	四月十三日	四月二十日
早生長十郎	四月七日	四月十四日	四月二十一日
今村秋	四月八日	四月十五日	四月二十二日
金龍	四月九日	四月十六日	四月二十三日
明記	四月十日	四月十五日	四月十八日
二十世	四月八日	四月十五日	四月二十二日
敷島	四月六日	四月十四日	四月二十日
晩上花	四月七日	四月十六日	四月二十一日

新長十郎	四月七日	四月十四日	四月二十一日
市原早生	四月七日	四月十四日	四月二十日

第六章 栽植

イ、一反歩に栽植する本數

栽植の距離は土地の肥瘠整枝の方法竝に土地の状況により多少異なれども普通一反歩百五十本植とし肥沃地は百二十本栽植す而して八九年の後枝葉繁茂し棚を蔽ふに至り間引きて七十五本乃至六十本とす而して一般に樹齡十數年後に至れば右の距離にては狭く枝梢を交叉し光線の透射を妨げ結果竝に品質に影響すること大なることを認めしかが近年は其距離稍々廣く栽植するものあるに至れり

ロ、栽植方法栽植苗の樹齡及歩合

植付の時は秋季落葉後十一月乃至十二月頃苗木を本圃に定植す栽植の方法は人によりて多少の相違あれ共先づ一定の間隔に繩を張り植付くべき個所に女竹を立て或は小穴を作る斯くして全圃の栽植位置定まれば徑二尺深さ一尺五寸位の穴となし之

に堆肥二、三貫匁を施し表土と共に能く混合し苗木は直根及長根を截りて根を四方に分ち表土を少しく覆ひ稍々根元を動揺し再び土を覆ひ然る後兩足にて根元を踏み堅め根邊を地平線より少しく高からしむ殊に注意すべきは深植を避くるにあり苗木は普通四、五年生を用ふるも近來は八、九年棚木を購入し植付くるもの多くあるに至れり

栽植の樹齡及歩合
 四、五年生 二歩
 八、九年生 八歩

八、苗木の價格

本郡に於て苗木を仕立つるもの殆んどなく多くは四、五年生苗木を埼玉縣安行及庵原郡袖師村並に高部村より移入す
 而して價格は年に依り異なるも普通次の如し(但シ一本ノ價格)

一年生	四 錢	七年生(棚木)	六 拾 錢
二年生	七 錢	八年生(棚木)	九 拾 錢
三年生	拾 錢	九年生(棚木)	一圓二拾錢
四年生	二拾五錢	十年生(棚木)	一圓五拾錢

五年生 三拾三錢
 六年生 三拾三錢

第七章 間作及耕耘除草

栽植後三、四年間は里芋、茄子、葱、越瓜、漬菜等の蔬菜類を自家用に供する目的を以て間作す
 殊に芋は夏日乾燥の際大なる葉を以て日光の直射を避け乾燥を防ぎ且つ樹下のものは味特に良好なりとて盛に之を間作として栽培しつゝ、あり
 耕耘は冬季十二月より遅くも施肥前即ち二月上旬頃迄に行ふ備中鍬にて全面を耕鋤す

除草は夏季發生の狀況により普通五回之を行ふ

第八章 肥料及施肥法

肥料の種類及施用方法の良否は成育並に結實に至大の關係を有するものなるも多くは過去の經驗と先輩の實驗とを基礎とし決定しつゝ、あり肥料の種類は堆肥、厩肥、人糞

尿紫雲英青刈大豆豆粕鯀粕油粕落花生油粕過磷酸石灰硫酸アンモニア藁灰木灰等とす

肥料は可成價の廉なるものを施用せんとするの風あり従つて其種類は區々にして一定することなし然りと雖も堆肥は自ら製造せらるゝ限り之れを施與し窒素肥料として紫雲英青刈大豆等の自給肥料を多く施用す鯀粕其他の魚粕は使用法簡便且つ肥効確實なるを以て其價不廉なるにも拘らず是れを專用する處尠なからず
其他大豆粕油粕等に木灰藁灰等を混用するもの亦多く鶏糞等も相當に施さる人造肥料に至りては過磷酸石灰を除くの外施用せらるゝもの少なし是れ梨樹栽培は速効肥料を給與する場合稀にして追肥は主として廉價なる人糞尿を施用するが故なり

施肥期

肥料は十一月より翌年三月迄の間に全量を施すもの或は落葉期間と五、六月との二回に分ち與ふるもの及び九月頃に更に追給して都合三回に分施するもの等ありて一様ならずと雖も今普通に行はるゝ方法は堆肥厩肥綠肥其他の遅効肥料は秋期落葉後より二月上旬迄に第一回の施肥として全量の二分の一を施す第二回は夏季生長中に枝條の生長竝に果實發育の模様に応じ人糞尿紫雲英鯀粕油粕其他の比較的速効性肥料を五月下旬より七月中旬迄に残二分の一の半量を施す此の期に於ける施肥は樹枝及果實の發育を助け花芽の生長を促し成績良好なり第三回は果實採收後直ちに禮肥として殘量を施すものとす

施肥量

施肥量に至りては栽培者により或は土質樹齡等により區々にして一定ならずと雖も今普通に行はるゝ方法に就き調査するに左の如し

普通に施肥するもの、例

種目	數量	窒素	磷酸	加里	價格
大豆粕	四五	三四〇	〇・六九七	〇・八三	二七二
鯀粕	一〇五	九七	〇・五三五	〇・〇七三	八〇七
過磷酸石灰	一五	—	一一四〇	—	三〇〇
木灰	三五	—	一・〇五〇	—	二四五
紫雲英(生)	二五	一・一〇〇	〇・三三五	〇・四二五	一五〇
堆肥	二〇〇	一・一六〇	〇・六〇〇	一・〇〇〇	三〇〇

計	六、七七	五、四七	五、二六	三、七三
---	------	------	------	------

次に標準量に基き加島村農會に於て示せる肥料の種類と其の用量とを示せば次の如し

反當七十五本植 (十二三年生)

第一例

肥料種類	反當用量	反當要素			一本當施肥料量
		窒素	磷酸	加里	
堆肥(腐熟)	1100 ^{kg}	1110 ^{kg}	0100 ^{kg}	1000 ^{kg}	1167 ^{kg}
人糞尿	3000 ^{kg}	1650	0390	0810	4000
鯨糞粕	17300	1575	0882	0110	0140
大豆粕	2376	162	0369	0455	0317
強過磷酸石灰	13800	—	2760	—	0184

第二例

木灰(普通品)	853	—	2190	4855	1074
合計	—	6000	7211	7100	—

肥料種類	反當用量	反當要素			一本當施肥料量
		窒素	磷酸	加里	
紫雲英(生草)	2500 ^{kg}	1100 ^{kg}	0215 ^{kg}	0455 ^{kg}	3331 ^{kg}
人糞尿	3000 ^{kg}	1650	0390	0810	4000
鯨糞粕	17300	1578	0882	0111	0140
大豆粕	17246	1169	0267	0316	0130
蒸製骨粉	11500	043	3189	—	0153
木灰(普通品)	9160	—	2204	5530	1130
合計	—	6000	7257	7100	—

第三例

肥料種類	反當用量	反當要素			一本當施肥料量
		窒素	磷酸	加里	
堆肥(腐熟)	100,000 <small>每</small>	1,160 <small>每</small>	0,600 <small>每</small>	1,000 <small>每</small>	2,666 <small>每</small>
大豆粕	36,770	2,490	0,570	0,808	0,491
鯨粕	22,847	1,992	1,114	0,153	0,191
強過磷酸石灰	10,795	—	2,159	—	0,143
米糠	20,000	0,358	0,698	0,288	0,266
木灰(普通品)	82,660	—	2,061	4,948	1,100
合計		6,000	7,328	7,197	

第四例

肥料種類	反當用量	反當要素			一本當施肥料量
		窒素	磷酸	加里	
堆肥	400,000 <small>每</small>	2,000 <small>每</small>	1,000 <small>每</small>	5,333 <small>每</small>	5,333 <small>每</small>
鯨粕	13,830	1,383	0,633	0,184	0,184

肥料種類	反當用量	反當要素			一本當施肥料量
		窒素	磷酸	加里	
大豆粕(撒)	15,600	1,133	0,134	0,108	0,208
菜種粕	28,755	1,494	0,718	0,383	0,383
過磷酸石灰	19,575	—	3,133	0,151	0,261
木灰	64,680	—	1,294	0,861	0,861
合計		6,000	7,000	7,000	0,862

第五例

肥料種類	反當用量	反當要素			一本當施肥料量
		窒素	磷酸	加里	
堆肥	400,000 <small>每</small>	2,000 <small>每</small>	1,000 <small>每</small>	2,400 <small>每</small>	5,333 <small>每</small>
鯨粕	18,240	1,824	0,811	0,218	0,245
大豆粕	32,000	2,276	0,480	0,576	0,427
米糠	20,000	0,540	1,050	0,450	0,108
過磷酸石灰	15,625	—	2,500	—	0,108
木灰	57,733	—	1,146	3,447	0,208

第六例

肥料種類	反當用量	反當要素加量			一本當施肥料量
		窒素	燐酸	加里	
堆肥	四〇〇,〇〇〇 <small>毎畝</small>	一,〇〇〇 <small>毎畝</small>	一,〇〇〇 <small>毎畝</small>	一,〇〇〇 <small>毎畝</small>	五,三三三 <small>毎畝</small>
大豆粕	五〇,二五〇	三,四一七	〇,七五四	〇,九九五	〇,六七〇
米糠	三,九五〇	〇,五七五	一,一一八	〇,四七九	〇,四二六
煙草莖	二,三三五	〇,三三三	〇,二二六	二,一一六	〇,二八五
蒸製骨粉	一六,五五〇	〇,五七九	三,六四一	—	〇,三三三
木灰	一七,六六八	—	〇,三三九	一,〇七六	〇,二四〇
合計		六,七九二	七,〇〇〇	七,〇〇〇	
合計		六,五四〇	七,〇〇〇	七,〇〇〇	

第九章 剪定整枝

富士郡に於ける梨の樹形は大部分水平棚架造にして他の整枝法を採用するものなし

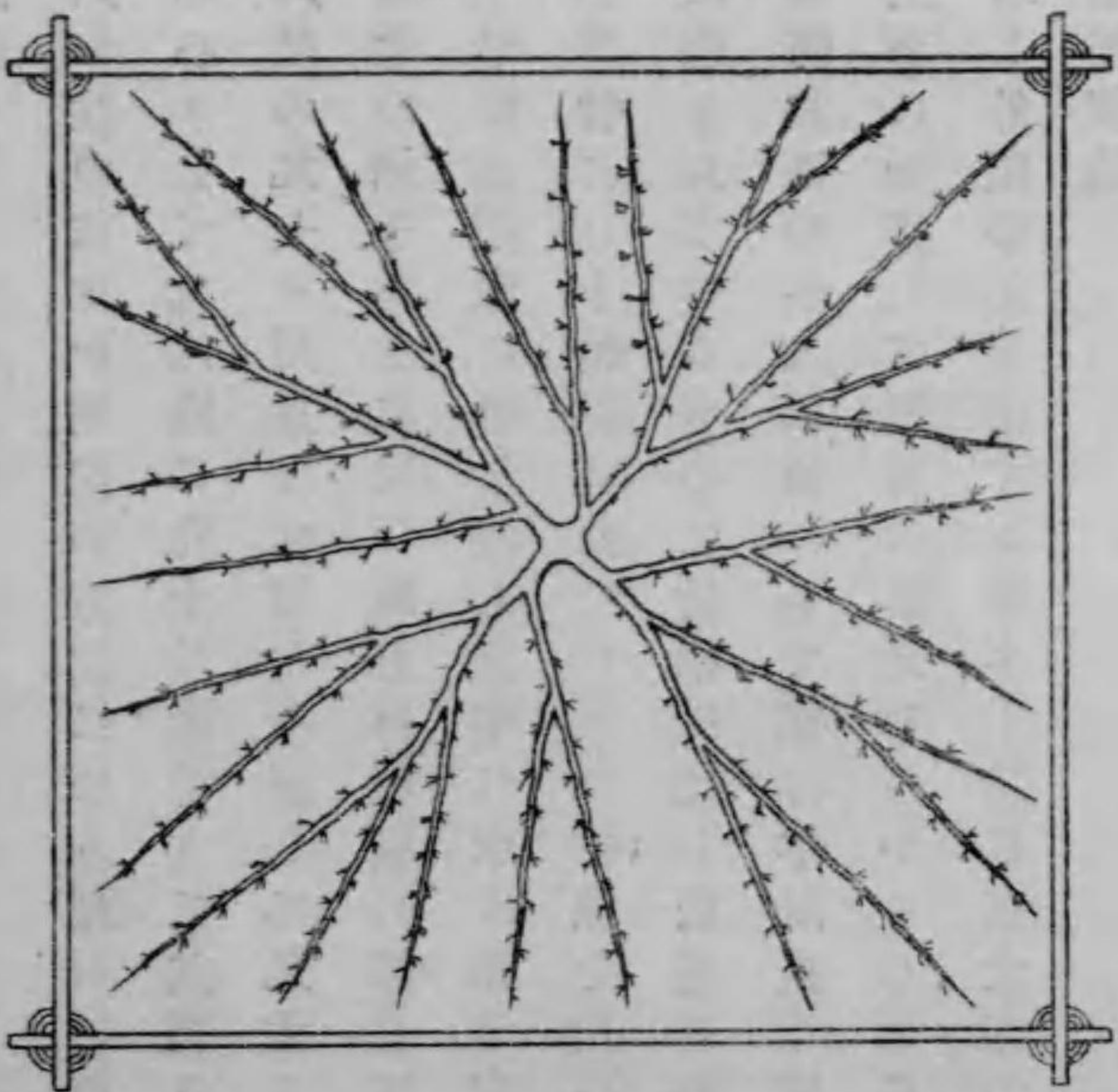
今之が整枝剪定法に就き大略を記述すれば次の如し
棚架法

五、六年生の苗木を前記の方法に依り植付け直ちに棚掛に従事す棚の構造は先づ梨樹を中心として其四隅に丸太杭木を立て其高さ五尺となし地中部は一尺位とするを以て六尺の丸太を用意せば可なり而して丸太と丸太との間に六、七寸の丸竹を渡し更に三、四寸の細き竹を二尺の距離に縦横に渡し完成す之に要する費用は收支計算参照初め一年間は稍粗に竹を渡し翌年に至り棚を完成するものあり又近時竹に代へ鐵線を用ひ親骨には十番線其他には十二番線を用ひて棚造をなすものあり三、四年前に於ては鐵線を以て作るものは竹棚に比し費用を要する事少なく病蟲潜伏の場所を絶ち驅除豫防其他の手入に便にして保存年限長く成績良好なりと雖も之が缺點は暴風雨の際上下に動搖して果實の落果を多からしめ且つ鐵線に銹を生じ降雨の際之が果實に附着し外觀の美を損する事多く殊に富士梨の如く袋掛せざるものに於て甚だしとす

棚架整枝法

苗木は棚の高さより稍々低く即ち四尺位にて剪定し春季多數の新梢を發生したるときは幹の頂端に位せる四枝を選びて主枝となし伸長せしめ殘餘の枝は綠枝剪定し幹

の肥大を圖るため特に存置せしめ置くものあれども頂端の四枝の發育不良なる爲め
殘餘の枝は全部剪去す



棚架整枝

を費すことあり而して右四本の主枝は同年内に三、四尺の長さに達すべきが故に冬季

剪定に於て主枝は棚の高さと同位置にて内方に鋸にて深く切目を入れ繩にて棚に結び付け同時に主枝は生長如何を斟酌し生長遅緩にして節間短かきものは短かく剪定すべく萌發力の強大なるものは長く剪定す主枝は普通二尺内外の長さに剪定を行ひ二年目に於ては頂端二芽を伸長せしめたる側枝を副主枝たらしむ主枝の屈曲部より叢出する徒長枝の中適當のものを其儘殘置し棚に誘引し主枝の數を多からしむるなり爾後副主枝より再び適當の位置に側主枝を出し年々この方法を繰返し棚一面に枝を配置し圖の如く副主枝側主枝の數廿六、七本を有し之れに結果枝を生成せしむるものなり

主枝の上面より發生する枝條は常に勢力強盛にして樹液を奪却し頂端主枝の生長を妨害すること甚だしきものなり
特に主幹に接近せる偃曲部に於て最も多しされば生長の初期全く摘去するか或は棚の上に空間ある時は誘引して之を充し側枝に變せしむ又は夏季摘心を下し抑壓するものなり

側枝剪定

夏季剪定としては生育中に新梢の生長點を摘除して基部の充實を謀り之れに據つて

果實の發育を助け花芽の生成を促す目的を以て近時夏季剪定を行ふものなるも棚架整枝の梨樹に對しては極めて必要なる作業なりとす其方法は栽培者に依りて異なるを以て一定のものなきも普通春期五、六月新梢の七、八寸に伸長せる頃五、六葉を残して先端を摘除す而して間も無く頂端に近き二、三の腋芽は刺戟せられて伸長し來るを以て五、六寸伸びたる頃二、三葉を残して第二回の摘心を施す斯くの如く生長を抑制し基部腋芽の發達を促すときは時として同年内花芽を生ずることあり然るときは最早果枝剪定の取扱ひをなすものなり

側枝が生長せる年内に腋芽の花芽に化するは生長末期に及びて枝の先端に於て往々現はるゝことあれども基部に近く生ずるは極めて稀に見る所にして一年生の葉枝には花芽を現出すること少きものなり

主枝の基部より叢出する徒長枝の一部は之を掻き取る摘除せしものより更に出せし二番枝は二三葉を残して剪定し尙三回目は前回と同様之を行ふ亦近時摘心を行ふものあるに至れり摘心は結果枝の生成上最も緊要なる作業にして其方法は五月上旬頃二三葉を以て摘心し爾後發生するに従ひ二番枝を一、二芽にて摘心し七月下旬迄に五回之を行ふものにして果實の發育樹液の經濟的利用上非常に有効なりとす

冬季剪定

冬季花芽を有せざる葉枝は冬季剪定にて四芽乃至五芽にて剪定す剪定せる葉枝は第二年目の春に至りて頂端一二の腋芽は伸びて新梢を形成すれども基部一二の芽は適度の刺戟を得て短枝を生じ同年内に短枝の頂端に花芽を戴くを常とす斯く枝上に短果枝を生ぜるときは冬季短果枝の直上部にて剪定す短枝にして若し花芽を戴くこと無く中間芽を以て終るときは短枝の上部一、二芽を残して剪定す第二年目に至りて葉枝上腋芽の果枝を生ずるは梨結果の習性なりと雖も或事情の爲めに果枝を生ずることなくして悉く葉枝を以て終ることあり然るときは冬季剪定にて主枝に最も近き亞側枝の分岐點にて剪定し尙亞側枝も二、三芽を残して剪定すべし

果枝剪定法

梨樹は短果枝及中果枝を最も貴ぶものなり之其結果したる果實は常に良質の果實を生産し結果確實なればなり然りと雖も之等の果枝上に多數の花芽を着生せしむるときは結果過多に陥り樹性滅殺の状態を呈するのみならず果實は小形にして品質の劣悪なるは免かれず且つ翌年の豊否に關する事大なれば適宜花芽の間引を行はざるべからず一果枝に保つべき花芽の數は樹勢と花芽の分布に依て異にすべきも確實なる

花芽なるときは一個若しくは二個を以て満足すべし剪定上否栽培上望む所は一果枝上に多くの花芽を着くるよりも果枝の数を増加せしむるにあり以後は幾多の枝梢交互錯綜し剪定法も自ら複雑となり亦各品種に依り多少剪定方法を異にするものなれば一々詳細に説き盡くさん事到底冊子の許さざる所なれば此所には明月の剪定法を記さんとす

明月剪定法

加島村梨栽培家和田精太郎氏は明月を結實せしむる事に於て獨特の技倆を有し剪定法は同氏の工夫に依るものにして其成績頗る良好なるを以て一般栽培者は此の方法を採用するに至れり今之が剪定法の概略を述べん

日本梨中にて明月は其性質他種と異なり普通剪定法にては花芽を着生せしむる事能はざる爲め一般に栽培せられざりしが果實の美大なると光澤品質の優良なるにより各市場に於て非常の好評なるを以て當業者は極力之が花芽の着生を研究し或は斷根法を行ひ或は剝皮法を又は洋梨的剪定法を行ひ或は施肥量を加減する等あらゆる手段方法を講じたりしも尙且つ良結果を得るに至らず若し右の如き斷根を行ふときは結果は非常に多きも果實の發育不良にして望なく又洋梨の如く長梢剪定を行ふと

きは最初の年は相當に結果するも二年目には結果不良に陥り成績佳良ならざりき即ち右の成績に依り明月は隔年結果の性質甚だしきものなるを知りたり

此に於て同氏は本年(一年目)の夏季伸長せし數本の徒長枝を其儘となし置き冬季剪定の際に之等徒長枝の中勢力中庸にして充實せるものを殘し他は全部剪去し此殘したる枝を空所に誘曲する時は二年目に於て多數の短結果枝を生ずるに至る

此際結果枝は基部よりも先端に多し第三年目に至り其短結果枝全部に枝の堪へ得る限りは結實せしむ冬季剪定には枝の中間に於て伸長せる新梢を適當の距離に横臥して次年の結果枝を造ると同時に本年結果したる枝は其基部に一、二芽を殘して全部剪除す而して其切口より再び新梢が伸長して之を横臥せしむるときは三年目には又結果枝となる斯くの如き方法を繰り返す事殆ど葡萄の長梢剪定と異ならず

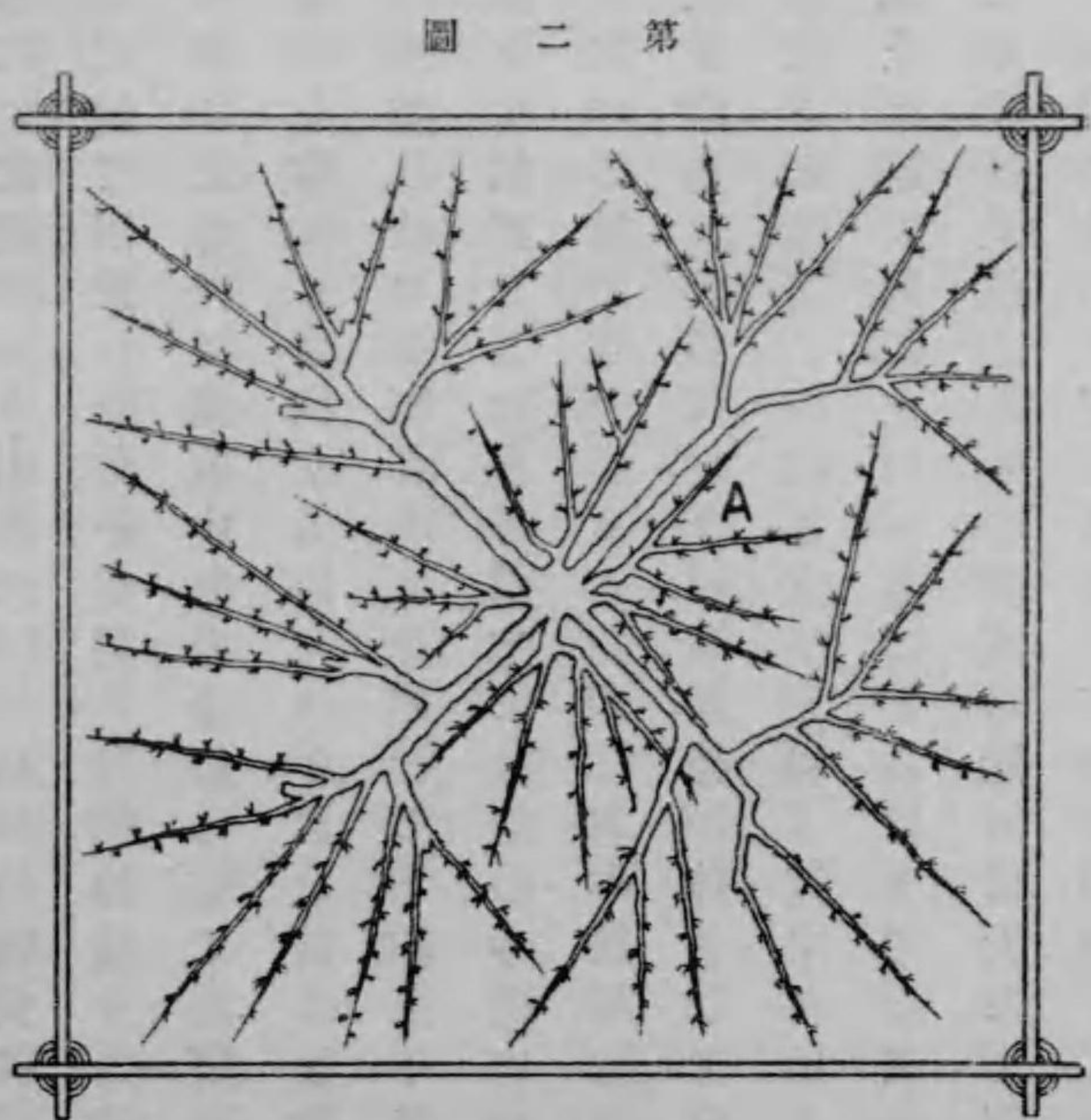
以上は單に側枝上の一部にのみ付きて説明せるものなるが此方法を専ら一般側枝上に施す外主枝とても其間隙の餘りに大なる箇所に適宜行ふものなり然して主幹より四尺以内は樹勢旺盛に失し新梢を誘曲するも花芽を生ずる事極めて少く葉枝を生ずる事多きを以て主幹部に近き部分は結實困難なるものとす故に主幹より四尺以内の枝は全部切り去りて斯る場所に第二圖Aに示すが如く長十郎幸藏等の如き稍早生種

を主幹部に接ぎ此空間部を補ふなり

此際早生種を接ぎたる理は即ち之に結實せる果實は明月よりも先に收穫せらるゝが

故之に用ひられつゝありし養分は急に明月種の方に増加され爲めに明月の果實は著しく膨大となるが故なり

斯る方法なるを以て枝は其年を支へるのみにて次年を心配する必要無く爲に過多の結實も決して憂ふる處なく又樹幹の基部に結熟せる長十郎は八月中下旬には全部採收し終るを以て此等の果實を養はんが爲に運行したる養液が悉く先端に向ひ流れ來るが故に忽ちにして



圖二第

枝整架棚月明

明月の果實は見違へる程生長發育するなり

即ち新梢は第三年目に結實せしめたる後第四年目の春季に於て更新せらるゝなり斯の如く豫備枝更新剪定法に依り殆んど完全に隔年結果の弊を防ぎ頗る良好なる成績を擧げつゝあり

第十章 摘果

梨樹のみならず凡ての果樹は剪定肥培等に努め多額を期し以て収益を收めんと欲すと雖も其結果に一定の限度あるものにして其結實過多ならんか果實個々の發達を阻げ果は小にして品質不良なるを免れず加之樹勢に不相應なる結果は直接樹勢を衰弱せしむること甚だしきのみならず延て翌年結果に影響し連年の豊饒得て期すべからず品質を佳良ならしめ形狀を正しくし隔年結果の弊を防ぐには必ず剪定と共に間引作業を行はざる可からず然るに初期の栽培家は勞を厭ひ効果少きを主張し諺に云ふ「文惜みの百損」の愚を演ずるもの往々あり

摘果は五月上旬より始め六月下旬迄に二回行ふ即ち第一回の摘果には一花序より病蟲害の被害を受けしものを間引きて二三顆に減じ第二回は果形正しく發育可良なるものを結果枝の勢力に應じて殘すべし結果豫定數の標準は樹勢及樹齡に依り一定

せずと雖も一反歩七十五本植樹齡十二年生の成木に對しては一尺平方に二個とし一坪は三十六尺平方なれば其數七十二個となり四坪には一百八十八個となるを以て一般當業者は成木一本に對し三百個内外を結熟せしむるものなり

間引に残すべき果實は常に完全なるものたるべく種々の變形せるもの或は傷害果病果等は摘果すべく普通一結果枝に一個乃至二個位を結果せしむれば充分なり而して梨の花は一つの短矮なる花序にして基部より漸次上方に開花するの性あり概して基部に存する花は上方に生せるものに比し早く受胎し生長を始むるものなれば生存上常に優勢にして落果する歩合少なきものなれば花及果實を剪定するに於ても基部に存するものを残し花序の先端上方に位せるものを剪去せらるゝものとす

第十一章 採收

綠色褪消して特有の色を呈し成熟するを待ちて採收すれ共北海道下ノ關九州方面の遠隔の地に販賣するものは稍々未熟の時採收す即ち遠隔の地に輸送し更に販賣者の店頭に露されて遂に顧客の口に入る迄には少なくとも十數日間其外觀を損せざるを要するが故に眞の採收期即ち成熟期を待たずして採收せざるを得ざるなり

當業者は出來得る丈け高價に販賣せんが爲に市場の景氣を見て走りと稱して僅かに食し得らるゝに至れば採收するものあり又は七月下旬増肥をなし採收期を遅延せしむる等同一品種にしして或は早く或は晩く採收區々にして一定せず主なる品種に付き採收期を示せば次の如し

採收期

種	類	初	盛	終
期	期	期	期	期
淡	雪	七月三十日	八月四日	八月十日
江	屋	七月三十日	八月四日	八月十一日
五	九	七月二十日	七月二十五日	八月三日
眞	鑰	七月二十八日	八月四日	八月十日
獨	乙	七月三十日	八月四日	八月十日
赤	穗	八月十日	八月二十日	八月三十日
長	郎	八月十三日	八月三十日	九月二十五日
幸	藏	八月十日	八月十五日	八月二十五日

市原早生	八月一日	八月十二日	八月二十日
今村秋	九月二十五日	九月三十日	十月十日
明月	九月五日	九月二十日	九月二十八日
二十世紀	八月二十日	九月五日	九月十五日
金龍	九月二十日	九月二十五日	九月三十日
平子	九月十五日	九月二十五日	九月三十日
水熊	九月五日	九月十五日	九月二十五日
松尾	十月三日	十月十日	十月十八日
早生長十郎	八月五日	八月十日	八月十五日
新長十郎	八月六日	八月十日	八月十六日
力彌	八月十五日	八月二十日	八月二十五日
敷島	七月三十日	八月二日	八月十日
枇杷形	十月三日	十月十日	十月十八日

第十二章 收支計算

梨樹栽培の收支は園主の栽培上の技倆と販賣上の手腕並に交通の便否風土の適否天候の順否等によりて一様ならずと雖最も廣く栽培せらる、長十郎種に就き調査せるもの左の如し

富士郡加島村(自作ニ就テ調査セルモノ)十三年生

(大正六年調査)

収入之部

収入總額參百〇五圓參拾錢

	收	量	單	價	價	格
上果		五四三		三五 _円		一八九〇〇
中果		四三〇		二五		一〇七五〇
下果		一一〇		〇八		八八〇
計		一〇八〇				三〇五三〇

支出之部

支出總額貳百參拾六圓四拾九錢

種	類	數	量	單	價	價	格
肥	料						三二、七三 ^円
大	豆		四五、〇		二八〇		一二、七一
鯨	粕		一〇、五		七六〇		八、〇七
過	磷		一五、〇		二〇〇		三、〇〇
木	灰		三五、〇		七〇〇		二、四五
紫	雲		二五〇、〇		〇一〇		二、五〇
堆	肥		二〇〇、〇		〇一五		三、〇〇
施	肥		五、〇		六〇〇		三、六〇
中	耕		六、〇		六〇〇		一一、三〇
棚	修				八五〇		八、五〇
一	竹		一〇、〇		八五〇		八、〇〇

杭	木	二	〇		〇四〇		八〇 ^円
三	繩	五	〇		〇四〇		二、〇〇
同	人	二	五		六〇〇		三、〇〇
間	引	五	〇		六〇〇		一一、二〇
剪	定	五	〇		六〇〇		八、〇〇
噴	霧				六〇〇		三、〇〇
新	調				六〇〇		一、八〇
病	蟲				七二〇		四、一三
一、	ボ	二	〇		八〇〇		一、四四
二、	石	一	〇		六三〇		八、〇〇
三、	除	三	〇		六〇〇		一、八九
同	人	一	九		四〇〇		九、八〇
採	收	一	九		四〇〇		二、四〇
荷	造	四	〇		六〇〇		一一、八二

一、箱代	一八〇	四一、四〇
二、繩代	一八	一、八〇
三、古新聞紙	九〇	四、〇五
四、釘代	二、五七	四、三六
五、荷造人夫賃	一八	一〇、八〇
六、運賃口錢	一八	五五、八〇
公課	元金五百圓年五朱	三、八七
土地資本ニ對スル利子		二五、〇〇
其他ノ資本ニ對スル利子		六、四五
耕耘器具費		一、五〇
周圍垣其他諸費		五、七〇
計		二二六、四九

差引純益金六拾八圓八拾壹錢也
 大正三年度に調査せる十ヶ年收支一覽及三ヶ年平均收支計算を示せば左の如し

十ヶ年收支一覽

(一反歩當)

△點は損を無點は益金を示したり

年次	栽植付費	資本利子	公課	荷造費	支出合計	果實其他高	每年收支差引額	累年損益
一年	二九、三〇	三三、二九	三八七〇	一一、五〇	一五七、三五九	二五、一六〇	△一三二、一九九	△一三二、一九九
二年	三二、八三〇	三八、七九	三八七〇	一一、五〇	八五、九一九	五三、三八〇	△三三、五九	△一六四、七六
三年	三四、六〇〇	四一、三四八	三八七〇	一一、〇〇〇	一〇〇、八二八	七〇、六八〇	△三〇、一三八	△一九四、八七六
四年	三九、九〇〇	四四、三八四	三八七〇	三九、五〇〇	二七、六五四	一三二、〇一〇	△四三、六六	△一九〇、五二〇
五年	四九、七五〇	四三、八七四	三八七〇	五二、〇〇〇	一四八、四六七	二〇六、九〇〇	△五八、四三三	△一三三、〇七七
六年	一〇八、三七七	三七、九九四	三八七〇	五九、〇〇〇	二〇六、一五一	一八六、四九〇	△一九、六六一	△一五二、七三六
七年	五二、九三〇	四〇、二一〇	三八七〇	五九、〇〇〇	一五五、九二〇	一九七、〇五〇	△四一、一三〇	△一〇一、六〇八
八年	五四、九三〇	三六、二一〇	三八七〇	六〇、〇〇〇	一五五、〇一〇	二〇一、〇五〇	△四六、〇四〇	△六四、五六八
九年	五四、九三〇	三二、六三三	三八七〇	六〇、〇〇〇	一五〇、四三三	二〇一、〇五〇	△五〇、六四七	△一三、九二一
十年	五四、九三〇	二六、五三八	三八七〇	六〇、〇〇〇	一四五、三三八	二〇一、〇五〇	△五五、七二二	△四一、七九一
合計	六〇一、三七五	三七四、九八二	三八七〇〇	四八、〇〇〇	一、四三三、〇三九	一、四七四、八三〇		
平均	六〇、一三六	二七、四九八	三、七七〇	四、八〇〇	一四三、三〇四	一四七、四八三		

備考 資本金は土地資本五百圓に對する年五朱の利子と各前年迄の損失金に對する年一割の利子とを併せたるものなり

栽培費

年次	苗木代	植付人夫	棚造材料	材纏	料絡	肥料代	除病蟲害防	人植	夫込外	計
一年	三,五〇〇	二,一〇〇	四,六四〇	一,五〇〇	一,五〇〇	一五,〇〇〇	一,四八〇	一,四八〇	一九,八〇〇	一一九,三三〇
二年					一,五〇〇	一五,〇〇〇	一,四八〇	一,四八〇	一九,八五〇	三二八,三三〇
三年					二,〇〇〇	一七,二七〇	一,四八〇	一,四八〇	二二,八五〇	三四六,〇〇〇
四年					二,〇〇〇	一八,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二七,〇〇〇	三九九,〇〇〇
五年			五,五五〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇	二二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二四,七五〇	四九七,五〇〇
六年				三,〇〇〇	三,〇〇〇	二〇,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二六,三三〇	一〇八,三三七
七年				三,〇〇〇	三,〇〇〇	二二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二六,三三〇	五二,九三〇
八年				三,〇〇〇	三,〇〇〇	二二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二八,三三〇	五四,九三〇
九年				三,〇〇〇	三,〇〇〇	二二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二八,三三〇	五四,九三〇
十年				三,〇〇〇	三,〇〇〇	二二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二八,三三〇	五四,九三〇

收入

年次	上果		中果		下果		間作	其他	收入計	備考
	數量	價格	數量	價格	數量	價格				
一年	七二	二四,二八〇	六七	一三四,〇〇〇	一〇	七,〇〇〇	二五,一六〇		二五,一六〇	
二年	一三四	四五,五六〇	一一〇	二四,〇〇〇	一六	一,二一〇	五三,三八〇		五三,三八〇	
三年	二四五	八三,三〇〇	二二〇	四六,〇〇〇	三六	二,五〇〇	七〇,六一〇		七〇,六一〇	
四年	三二七	一〇七,七八〇	二九七	五九,四〇〇	四六	三,三二〇	一三二,〇〇〇		一三二,〇〇〇	
五年	三四六	一七六,四〇〇	三三四	六四,八〇〇	五〇	三,五〇〇	一八六,四九〇		一八六,四九〇	
六年	三三五	二四一,〇〇〇	三四二	六八,〇〇〇	五五	三,八五〇	一九七,〇五〇		一九七,〇五〇	
七年	三三五	二七五,〇〇〇	三四五	六九,〇〇〇	五五	三,八五〇	二〇一,〇五〇		二〇一,〇五〇	
八年	三三五	二七五,〇〇〇	三四五	六九,〇〇〇	五五	三,八五〇	二〇一,〇五〇		二〇一,〇五〇	
九年	三三五	二七五,〇〇〇	三四五	六九,〇〇〇	五五	三,八五〇	二〇一,〇五〇		二〇一,〇五〇	
十年	三三五	二七五,〇〇〇	三四五	六九,〇〇〇	五五	三,八五〇	二〇一,〇五〇		二〇一,〇五〇	

拔木六〇本賣却代三三,〇〇〇ヲ加算ス

三ヶ年平均收支計算 (反當) 樹齡自八年至十年

採集及人夫賃別	箱	代	荷繩	代	造新聞紙及釘代	販人夫賃	賣販諸費	計	公課	土地資本ニ對スル利子	其他ノ資本ニ對スル利子	耕耘器具費	周圍竹垣其他諸費	總計	差引
一、二〇〇〇	一、二〇〇	一七	〇、二五	〇、二五	八	運賃口錢等	元金五百圓年五朱	元金六十四圓五十錢	ニ對スル一割						
五〇〇	一、三三五			三、一〇	五〇〇										
一六、二二〇	〇、四二五	一、四〇〇	四、〇〇〇	三七、二〇〇	五九、二二五	三、八七〇	二五、〇〇〇	六、四五〇	一、五〇〇	九、八〇〇	一六四、六七五	四〇、〇二五			

第十三章 病害并驅除豫防法

梨樹は概して病害に侵され易く就中被害激甚なるものは黒星病にして輪紋病之に亞ぐ赤星病は六、七年前寄生植物なるビヤクシン等を伐採せるを以て殆ど之が害を受くる事なし其他褐斑病腐爛病癌腫性細菌病白絞羽病苦腐病膏藥病白澁病等あるも被害の程度少し左に其大要を記載せん

一、黒星病 (黒斑病) くるて

本病は梨の葉及嫩梢果實果梗に發生する病害にして「ゲンワリア、ピリナ」と稱する病原菌の寄生に依り起るものにして本病は我國梨樹栽培地の何れの地方にも發生すれども寒地に於ては其被害甚だしと云ふ被害部は暗綠色を呈せる斑點を生じ漸次擴大して黒褐色に變じて表面粉狀をなし葉に於ては主に葉の下面の中肋及支脈並に葉柄に生ず果實果梗に生じたる場合は黒斑は後乾燥し裂片となりて脱落するに至る甚しき時は枝の尖端枯死するに至ることあり黒褐色の病斑部よりは盛に胞子を放散し迅速に傳染す天候濕潤なるときは傳播一層速かなり本病は墜落枯死せる病葉中に子囊殻と稱する凌各性の胞子を藏するものを生じ翌春發芽前後より胞子を飛散す又嫩梢

を侵したるものは菌絲組織中に越年し翌年更に胞子を生ずと云ふ
豫防法

- イ、嫩枝の被害箇所は勉めて剪定すべし
- ロ、被害果實及落葉は集めて焼却すべし
- ハ、三斗式石灰ボルドー液を左の時期に於て撒布すべし
 - 第一回開花前 第二回落花後 第三回小指大
- ニ、肥料の配合を適當にし窒素質肥料を過用せざる事
- ホ、若しボルドー液の被害を認めれば薄き水肥を施し置くべし
 - 害を受け易き種類例へば早生長十郎平子松尾今村秋等は可成撒布の時期を早め發芽前に一回開花前後に二回の撒布を行ふべし
- ヘ、被害甚だしき品種には特に營養状態に注意し堅實なる成育を計るべし

二、輪紋病

(静岡縣農會總田技手の調査せる成績を摘録す)

本病は本村にありては明治四十年頃より注意せられ當時當業者は之れを木の葉蛾類と混同し方言「テウスイ」の異名あり

本病は梨の成熟期に多く發生する病害なるも早きは七月中旬乃至同月下旬より起り

殊に八月中旬に於て雨後に發病最も多きものなり初め果皮に黒褐色不正圓形の徑五厘位の病斑を生じ後漸次輪紋を生じ擴大す即ち病斑暗褐色となり重輪は黒褐色なり、重輪狀病斑は果皮のみならず果肉の上面にも之れを生ず葉にありては多く九月下旬に發生多く本病葉に盛に來れば落葉を早からしめ翌年の樹勢に影響する事大なり

誘因

一、品種との關係 本村にありては廿世紀平子(大平)水熊(早生赤)に最も多く大正五年の如きは殆ど全果の二分の一は本病の被害を受けたり

二、土地との關係

本病は排水不良地に多く排水良好なる土地には少し

三、天候との關係

本病は天候濕潤なる時發生し乾燥せる時には少なし即ち梨果輸送の際晴天なれば箱中に於ては病斑の擴大乏しきも雨天なれば甚しく蔓延す

四、營養との關係

本病は營養不良なるもの即ち肥料缺乏せるもの又は肥料の配合合理的ならざるものに多し蓋し本病が成熟後に發生し生育の全盛期に發生せざるはこれ本關係を證する

ものにて樹勢の衰弱は本病發生上關係大なり
五、光線との關係

莖葉繁茂せし處に發病多し故に俗にいふ棚茂りすぎたるは本病發生上關係多き處にして光線の透射不良に起因するものなり又本病が採果後殊に箱中に於て發生多きも之れと同一の理なり

豫防法

イ、石灰多量式ボルドー液を五月上旬より六月二十日迄に三、四回の撒布を行ふ事

多量式ボルドー液調合量

硫酸銅 百二十匁

生石灰 六百匁

水 三斗

ロ、排水を良好ならしめ肥料を多量に施與し樹勢の旺盛を計るべし

三、腐爛病

我國にては北海道青森附近に被害甚し外國にては最も恐れつゝあるもの、一にして「ベアブライト」の名を以て廣く知られたるものとす

春期梨の花幼新梢に發生して枯死せしむるものなり花は褐色を呈し霜害を被むりたるが如き病徴を呈し昆蟲の來訪して花蜜を吸はんとする時自然の間に細菌の傳播を見るものなり花より漸次に幼梢に及ぼし枝條に涉り幹を害するに至り甚敷きは全樹を枯死せしむるに至る

然れども病は必ず上より下に及ぼすものにして被害部以下は決して病狀を呈せざるものと知るべし先づ被害枝條及び幹は初め赤褐色の小斑點を生じ之が水泡狀に膨大し其表面は粘質を帯び軟化するもの故に指頭を以て容易に樹皮を剝ぐを得べし然れども普通乾燥し黒色を呈して粒狀物を現出す之本病菌に非ずして死物寄生菌に由るなり

豫防法

- 一、溫暖なる地方にては常に注意して栽培し發生の初期に於て焼却等最後の手段をとるべし
- 二、低温の濕地に栽培する時は本病の發生多きことを以て可成的高燥の地を選むべし
- 三、春期開花前に於て園を廻り検査するに於ては効能多し
- 四、被害部は切り去りて焼き棄つるを要す樹幹の如きは剪定刀を以て被害部附近を凡

- 一、て削り取り焼き棄て其部には極めて濃厚なるボルドー液又はタールを塗布するか
 - 二、生石灰を塗り材部の腐敗を防ぐべし
 - 三、既に被害甚敷く手段の方法なき見込のものは速に切り取り焼き棄つるを要す
 - 四、六、本病は苹果、楡、山楡、海棠等棠梨屬植物にも發生せるが故に近傍にある之等の植物は前記の最後の手段を採るべし
 - 五、七、本病に罹り難き種類を栽植すべし即ちフレミツシユビユーチー、キーハー種の如きは之に對し強きもの、如し
 - 六、八、早春ボルドー液又は石灰硫黄合劑を撒布すべし
 - 七、九、冬期石灰硫黄合劑又はボルドー液にて枝幹の洗滌を行ふべし
- 四、褐斑病
- 本病は五月頃梨の葉上に褐色の小斑點を生じ漸次擴大して直徑二分乃至三分の稍々圓形をなせる斑點となり周縁は褐色を呈し中央部は灰白色となり葉は爲めに萎凋して枯死落下するに至る病斑は主として葉片に生じ中肋に生ずる事殆んど無く葉上二三個多きときは三四十個に及ぶ事あり而して病斑部擴大するに従ひ二三個又は十數個連續して全葉縁を犯す事あり梅雨期に發病多く排水不良なる地、土地肥沃に過ぐる

●●
豫防法

の地に成育せる梨殊に日本種及支那種に多く洋梨には發生稀なり

- 一、黒星病豫防を兼ね三斗式ボルドー液を三回撒布すべし
- 二、土地の排水をはかり窒素肥料を制限し磷酸、加里質肥料を増施すべし
- 三、被害葉は集めて焼却すべし

五、白紋羽病

本病の最初期は之を判別し難きも漸次衰弱し遂に發芽に異狀を呈するに至る即ち四月中旬出葉を始むるや直に顯はれ健全葉に比し病樹に生せし葉は萎縮し花も亦萎縮し生育不良となりかくて四月下旬に至れば葉著しく萎凋し甚しきは漸次其先端より黒枯れ七月頃に至れば全く落葉枯枝すされども被害輕少なるものは不完全ながらに生育し結實に至るも果實は自然萎縮し無味乾燥にして殆ど食ふに堪へず

發病は先づ古枝に顯はれ漸次若枝に及ぶ故に五月頃發病樹を検せば前年の枝のみ獨り健全にして其以前に生せる枝は何れも被害を蒙り居るなり

時に病樹の根部を検すれば白色絲狀のもの纏絡し其部分の組織腐敗せるを認むべし

誘因

本病の誘因として最も關係深きは排水不良及び連作等なるも本村に於て調査したる處にては田よりも畑に發病多く排水良好且高臺の地に多く濕地には比較的少く土質としては砂土に多きが如し

豫防法

- 一、本病は苗木により傳播する事多きを以て苗木購入及び移植の時注意し若し根部に本病徴あるものにて被害重きは焼却し被害輕少のもの及び疑問を存するものは被害部を除去し石灰乳生石灰一貫目に付水一斗及び二斗式石灰ボルドー液に三十分浸漬消毒して後移植すべし
- 二、本病は地下傳染を行ふを以て病樹を發見せば漸次根より根にと傳染するを以て其周圍に深溝を穿ち健全樹と遮斷すべし
- 三、被害の輕微なるものは之を掘り起し根部を露出し清水にて洗滌し生石灰乳を灌ぎ後覆土し置くべし
- 四、被害地に再び梨及び本病の傳染する作物を移植せんとせば前被害根を悉く集めて焼却し石灰窒素及び石灰乳或は燒土法を行ひ消毒すべし
- 五、本病は土壤傳染を行ふを以て被害地に使用せし鍬は熱湯にてよく洗滌するか或は石灰乳にて消毒するにあらざれば他の健全圃に使用すべからず

六、發病の初期は被害病菌を悉く除去し根部を清水にて洗滌し後新鮮なる水田の土地又は河底の土地を客土とすべし

第十四章 蟲害并驅除豫防法

梨樹の害蟲は今や數十種を數へ尙如何なる大害蟲の發見せらるゝや又はかり難きものあり本村に於て將來最も恐るべきは梨姬心喰蟲にして綠葉捲蟲、鋸蜂、介殼蟲、梨蠹、軍配蟲、赤壁蝨等之に亞ぐ當業者は害蟲の梨樹栽培上忽にすべからざるを悟り試験場等の成績を參酌し又農會技術員の指導に依り着々防除に励めつゝあり

一、サンホゼ——介殼蟲

年三回の發生をなし冬季は幼蟲及び雌蟲態にて越年し第一回は五、六月の交第二回は七月より十一月に至り胎生繁殖を營み分晩期甚だ長く約六週間に涉り日々數頭の幼蟲を産出す幼蟲は數時間這行し樹幹枝條葉面及び果實の表面に固著し養液を吸收す被害の局部は赤紫色に變じ果實は表面に凸凹を生じ不正形となり大に品質を損す繁

殖甚しき時は介殼相重疊し全く樹面を掩ひ爲めに枝葉の枯死すること稀ならず
豫防法

一、苗木は能く検査し介殼蟲の附著せざるものを撰み必ず青酸瓦斯燻蒸施行のものを
栽植すべし

二、早春發芽前石灰硫黄合劑を灌注すべし

三、被害樹は冬期石油乳劑の三倍乃至五倍夏季は七倍乃至十五倍液を撒布すべし

四、被害甚しき部は切り取り焼却すべし

二、鋸蜂

墨色小形の葉蜂にして年一回の發生をなし成蟲は四月上旬より中旬に互りて羽化し
成蟲は晴天無風の溫暖なる日中には盛に花間を飛び廻りて花托の組織内に産卵し孵
化したる幼蟲は果實の内部を喰害するを以て果は黒色となり萎凋するに至る幼蟲は
一果を喰盡せば更に他の果實に移轉喰害するを以て其被害甚し幼蟲は五月上、中旬頃
老熟して土中に入り結繭して其内に蟄居し幼蟲の儘越年す

豫防法

一、開花期に成蟲を鳥糞にて捕殺すること

二、花萼片及梨果等に産卵したるもの又は喰ひ入りたるものを悉く摘採して處分する

三、梨果の小指頭大に生育したる頃落果したるものは毎日拾ひ集め焼却すること

四、被害後樹下の土一寸内外を削り取りて地中深く埋むること

五、成蟲の襲來期に毒劑を撒布すべし

三、梨姫果蠹蟲

梨姫果蠹蟲に就ては本縣立農事試驗場岡田技師の調査せる成績を摘録すべし

一、成蟲 小蛾にて體長雌は二分雄は一分五厘翅の開張雌は四分雄は三分五厘(以上乾

燥標本の平均なり)色は雌雄同色にして頭胸二部は暗灰色複眼は凡く暗灰色なれど

も中央は黒し口吻は灰黄色唇鬚は灰色にして長く前上方に屈曲す觸角は鞭狀にし

て長く暗灰色なり前翅は長方形光澤あり暗灰黒色前縁に沿ふて黒白の斑點を散布

す又前縁より後縁に向つて太き斜線を走せり外縁に沿うて黒點を散列し是れに沿

ふて黒線を走せり外縁の縁毛は灰色なり後角に近き所に暗紫色の斑紋を有せり後

翅は灰色にして抱刺は三本を有し前縁は灰白色に外縁は淡黄灰色を呈す内縁の縁

毛は灰色にして長し腹部は七環節にして灰白色なり脚は前中後と次第に長く前脚

の脛節に一個の板狀の距と中脚に長短異なる一對の距と後脚に二對の長短異なる距あり跗節は孰れも五節より成る

二、卵 卵は光澤ある乳白色扁平楕圓形にして長徑一厘五毛短徑一厘餘孵化前に達すれば暗黒色となる

三、幼蟲 幼蟲の孵化したる時は五厘なれども充分生長したるものは體長四分内外、背面は淡紅色腹面は淡黄色なり頭部は淡褐色なり上唇は黒褐色第一環節の硬皮板は淡褐色各環節の背面には横皺ありて六個の斑紋を有し白色の短粗毛を生ず末節尾板の前環節の背面には三個淡黒色の斑紋を有す中央大に兩端少しく曲り兩側にあるものは丸くして小なり尾板は淡黒色を呈す

四、蛹 色淡褐色にして圓筒形をなし體長二分餘腹部には各環節に横二條に短粗毛を生ず

習性經過 此害虫の越年の個所に就ては種々にして晩生梨の多き地方にては貯藏庫の梁又は板又は包紙に結繭して越年すと然るに本縣の如く餘り晩生梨を栽培せざる地方にては多く長十郎種の果を取り去りたる跡又は粗皮間、繩の縛り目、竹の破れ目、又は土中にも降りて繭を作りて越年す余は數年キルクにて飼育せり又間々桃の秋期ま

で新芽伸長する所にては桃の粗皮間にて越年するを本年二月採集せり斯くして越年したる幼蟲は四月中、下旬より五月上旬に互りて繭内に於て蛹化し將に羽化せんとする時に於ては自體を半分程繭の外口に突出して羽化す蛾は晝間枝葉の間に翅を疊みて靜止すれ共夜間は能く飛翔し雌は主として桃の嫩芽に來り葉脈に沿ふて一粒づゝ産卵し置くを以て孵化したる幼蟲は嫩芽の内部に蝕入して加害する次第に移轉し後には出でて粗皮間に結繭蛹化す尙一回桃の新芽に寄生加害す(此際少數なれ共櫻櫻桃の新梢に寄生す尙他のものに寄生するが如きも余は未だ見ず)又七月下旬には時として梨の花芽の早く出來たるものにも寄生することあるは前陳の如し

七月下旬より一二回梨果晚き桃又は苹果にも寄生するならんも本縣には晩種なきを以て未だ認めず)に來り果面又は袋の外面に産卵し置くを以て熟視すれば此蟲の多き地方にては明らかに果面又は袋面に光澤ある卵粒を認むることを得孵化したるものは果面なれば直ちに穴を穿ちて内部に侵入すれ共袋の面にあるものは袋の破れ目又は袋を喰ひ破りて果實内に喰入し、成長したる後外部に這ひ出て適當の場所を搜索し結繭蛹化し羽化して尙一回を経て其後の幼蟲は越年す今此蟲經過時期の大略を示せば左の如し

發蛾期

幼蟲期

第一回 自四月下旬 至五月下旬

五月中下旬

第二回 六月上中旬

七月下旬

第三回 七月中下旬

七月下旬

第四回 八月上中旬

八月中下旬

七月以前に桃梨等の果實に喰入することあるが如き本縣としては實に稀なり又七月以後は桃等の新梢に喰ひ入るものも少し又桃の新梢の外余は櫻櫻桃の新梢にも寄生し居るを採集したり要するに此蟲は五月より七月に互りて主として桃の新梢を害し七月より八九月の交に於て晩生の桃及び梨の果實に好んで寄生するものなり

豫防驅除法

- 一、梨を主作とする園なれば其近傍には成るべく桃、櫻櫻桃、其他關係ある樹を植ゑざる
- 二、梨園の近傍に桃園ありて其桃に心折れを生じたる時は該蟲の逸出せざる以前に於て丁寧に摘採りて處分すること
- 三、被害の虞ある梨園には適期に於て勉めて良質の袋を丁寧に掛くること若し破損せば直ちに掛替をなすこと

四、袋掛けを行はずして此害蟲の被害ある地方にて其被害を防がんには七月中旬頃より二、三回除蟲菊加用石鹼液を梨果に注射すること

除蟲菊加用石鹼液は除蟲菊粉十五匁洗濯曹達五匁を水三升位に入れて能く煮沸し濾過したる後洗濯石鹼二十匁を解き一斗になるまで水を加へたるものを用ゆ但一反歩の用量は樹の大小果の多少によりて異れ共一回撒布量五斗乃至七斗を要す

五、前年被害ありたる梨樹は冬期勉めて幼蟲驅殺の爲め驅除を行ふこと

但此驅除には除蟲菊加用石油乳劑又は石油乳劑を稀薄にしたるものを成るべく多く撒布すること又は粗皮を削り取るも効あり

四、皮潜蛾

成蟲は年二回の發生にして初め五月下旬頃より幼蟲の存在を認め其後六月中旬に至り老熟して皮下に蛹化し次で六月下旬頃より羽化成蟲となる之れ第一回の發生にして其後第二回の成蟲は八月下旬に發生するもの、如し成蟲の樹皮に産卵するや之れより孵化したる幼蟲は表皮下を蝕害しつゝ、順次彎曲して絲狀の長孔を穿ち老熟すれば皮下に繭を營み茲に蛹化す繭は少しく中高き扁平楕圓形をなし其表面は枯死した

る樹皮を附着すれども下部は茶褐色を呈するを普通とす

蛹は約二週日を経て羽化する如く樹皮下を匍匐蝕害するが故にやがて其部分の表皮枯死して遂に剝離するに至る

豫防法

一、此蟲は比較的發生の時期相均しく餘り不規律ならざるもの、如し五月下旬第一回の幼蟲發生せる頃に至らば樹皮は著しく剝離するを以て一見して之れを認むることを得べし故に此剝離せる部分を除去するときは大抵一匹の幼蟲居るを發見するを以て此時期を見計ひ幼蟲を潰し殺すべし

二、早春又は産卵期等に石灰硫黄合劑を撒布するか或は冬季樹幹を清掃し青酸瓦斯燻蒸法を施行すべし

三、樹皮下の幼蟲及び蛹を削り取りて焼却すべし

四、浸透性に富む藥劑を樹幹に塗採すべし

五、軍配蟲

年四回の發生にして成蟲態にて枯葉間に潜伏して越冬し翌春發芽を俟ちて現出し五月下旬第一回の産卵をなす卵は一端少しく曲りて葉の外面に突出し一ヶ所に數十個

あり六月中旬孵化し七月上旬羽化す、爾後八月上旬九月上旬十月上旬の三回發生し成蟲となる、卵期は約十二日乃至十六日にして、幼蟲期は約十八日間なり、然れ共野外に於ける實際の發生は、不規則にして、秋季落葉前に至るまで不絶幼蟲及び成蟲の混在するを認めらる、該蟲は好んで葉裏に寄生し、黒褐の分泌物を出し、氣候の乾燥する時に於て能く繁殖す、加害葉は多く變色して黒褐を呈し不潔なるものとなる、此成蟲は落葉塵芥等の下竹藪石垣の間葉屋根其他日當り良き樹皮等の間隙に潜伏して越冬す

豫防法

一、除蟲菊石鹼液又は除蟲菊加用石油乳劑の二、三十倍液を撒布すべし

二、石油乳劑十倍乃至十五倍液を灌注すべし

三、冬季果樹園の清潔を旨とし落葉、塵芥等を集めて燒棄し又附近の雜草を燒却すべし

六、葉捲蟲

本蟲に數種類あり其中主なるものは「あかめむし」、「おほはまき」、「つまをりはまき」、「ふたほしはまき」とす茲に年二回の發生を營み春期發芽頃より秋期に至るまで葉を捲き或は嫩芽を綴りて喰害す「あかめし」は春期嫩芽花蕾及幼果を絲にて閉ぢ其中にありて喰害枯損せしめて大に被害あり冬期は卵若くは幼蟲態にて越冬す

豫防法

- 一、春期發芽頃に發生するもの多きを以て開花前に除蟲菊石鹼液を撒布する事は最も有効なり
- 二、新芽嫩葉を綴り其内に潜伏せる幼蟲及蛹を葉と共に摘採すること
- 三、成蟲を捕殺すること
- 四、赤芽蟲の卵は結果枝の基部に光澤ある白色の一塊となして産附けあるを以て冬期剪定の際勉めて除去すべし

七、赤壁蝨

年十數回の發生を營み春夏期に互りて盛んに發生加害す、運動は比較的活潑にして、時に葉面に靜止して養液を吸収す、幼壁蝨は他の昆蟲類と同じく數回の蛻皮をなして成長し、其形態は略々老熟せる親壁蝨に類似し、單に體の小なると脚三對あるの差あり、赤壁蝨の繁殖は天候と密接なる關係を有し、早天の能く打ち續く際には從て空氣乾燥するが故に、其繁殖蔓延すること夥しきも、一旦降雨至り濕氣を増加するときは俄然繁殖を停止す、故に赤壁蝨の被害は毎年早天の打ち續く時期に損害多く、梅雨期に少なし、冬季は親壁蝨の状態にて落葉幹枝の隙間等に於て越冬するもの、如し、卵期は甚だ短く

高温の際は普通四、五日乃至一週間にして孵化し、仔壁蝨となり直ちに加害す、親壁蝨は日に數粒宛の産卵をなし、一代は時期に依り異なるも一週間に於て約十二粒内外宛産卵す

豫防法

- 一、石灰硫黄合劑のボーメー〇・一乃至〇・二度のものを撒布すべし
- 二、石油乳劑なれば二十倍乃至二十五倍液にて効力あり
- 三、硫黄石鹼合劑を灌注すべし、即ち石鹼水一升に硫黄華二三匁を混ぜしものなり
- 四、硫黄曹達合劑の四、五十倍液を灌注すべし
- 五、つのもた液(ツノマタ)百匁を水三斗に溶解したるものを晴天の日を選び、丁寧に撒布すべし

六、石鹼液又は除蟲菊加用石鹼液を撒布すべし

七、夏期酷暑の候、晴天を選びて多量の冷水を強力噴霧器にて注射すべし

以上凡て藥液は單に一回位にては充分の効を奏し難し、發生當時の天候、其他の狀況に鑑み、二三日又は一週間を隔て、數回繼續施用するの要あり、又藥液は凡て葉裏に向て丁寧に灌注するを怠るべからず

八、梨銹壁蝨

梨の銹壁蝨の被害は從來當業者呼んで茶澁病と稱し一種の病害の如く認めたりしも其後調査の結果一種の微小なる壁蝨の加害によるものなることを確むるに至れり今此壁蝨に關し概要を左に記さん

形態 此壁蝨は到つて微小にして殆ど肉眼を以て認むること能はざる程のものなり成蝨は色淡黄色頭小にして長楔形をなし横皺を有す體長僅かに六七毛幅三毛内外なり前方に向つて二對の脚を有し腹部兩側及び末端に一對粗毛を有せり卵は透明にして球形黄色を呈す幼蝨は體成蝨と同一なるも色淡黄白色にして一層微小なり

經過習性 此壁蝨は冬期芽の鱗片の間に潜伏し五月中旬頃より出でて徒長枝の下葉の裏面に寄生し此處に繁殖し葉の硬化するに従ひ次第に上部の葉に蔓延繁殖するは六月中旬にして實に速かなり其頃に至れば徒長枝の全葉の裏面に無數の銹壁蝨の寄生するを認む是れが爲め悉く銹色を呈するを以て一般當業者は此狀を認めて茶澁病と稱し居れり其被害甚しきときは落葉するに至る又此被害は種類によりて輕重あるもの、如く上花長十郎等は比較的輕きも平子力彌等甚しきが如く認む

豫防驅除法

一、早春介殼蝨驅除として石灰硫黄合劑を撒布する事
二、若し最初發生を認めば「つ」のまたの溶液又は除蟲菊石鹼液を用ひて早く丁寧に驅除するを要す

九、梨木蝨 (なしじらみ)

半翅目木蝨科に屬し幼蝨成蝨共に梨の嫩芽新葉等に寄生し花蕾に産卵し煤病を併發する等其加害頗る大なり

成蝨 小形にして赤褐色乃至暗褐色を呈し複眼は暗紫色を呈し單眼は紅色なり胸背は能く發達し四條の黄色縦線あり翅は大にして透明縁紋は暗褐を帯び翅脈は褐色なり體長約八厘翅尖迄約一分四厘あり

卵 長楕圓形にして産下當時は淡黄綠色なるも孵化に近けば淡黒色に變じ一端に赤色の眼を現出す長さ約一厘二毛あり

幼蝨 孵化當時は略々扁平楕圓形にして淡黄色を呈し眼は紅色なり老熟すれば短楕圓形となり淡黄綠色にして明瞭なる黒色の斑紋を生じ紅色を散點す又胸側に相重疊せる二個の翅痕ありて暗色を呈す腹部の後半は暗黒にして眼は暗紅色を帯ぶ體長一分内外あり

經過習性 年一回の發生にして成蟲は三月上旬(暖かき地方には二月下旬より發現す)より現出し交尾すれば梨の新芽開發するを俟ちて産卵す幼蟲は四月上旬孵化し五月頃成蟲となる其儘草叢間に潜伏して越冬す成蟲は發芽當時續々襲來して嫩芽花蕾鱗片等に數十群居し、多數の卵を一ヶ所に集合して産附け其の性敏捷にして尾端より甘液を分泌す幼蟲は始め嫩芽花蕾等に集合するが故に葉の伸長を著しく妨害せられ甚しきは黄變凋落す成長するに従ひ新梢に移轉し一層害を逞うす老熟すれば四散して葉裏に至り羽化の準備をなす

防除法

- 一、早春現出する成蟲を捕殺すべし
- 二、産卵せられたる芽葉を摘採し燒棄すべし
- 三、石油乳劑二、三十倍液を灌注すべし又除蟲菊加用石油乳劑なれば四、五十倍液にて充分なり
- 四、除蟲菊石鹼合劑を撒布すべし

十、蚜蟲

半翅目蚜蟲科に屬し有翅及び無翅の成蟲あり幼蟲と共に諸種の果樹及び蔬菜に寄着

し葉芽新梢等より養液を吸收し大害を與ふ其種類甚だ多數にして一々詳述するの煩に堪へざるを以て茲に總括して説明せんとす

普通卵態にて越冬し五月上旬に至れば卵蟲發生し葉裏の主脈に沿ひて連列し養液を吸ひ無性生殖にて實に驚くべき繁殖と被害をなすものなり而して秋期に至れば交尾後精卵を産下し其儘越冬するもの多し

本害蟲は春期早くも梨樹の成長點に群集被害するを以て葉は卷合萎縮し枝條の勢力を減殺せらるゝ事甚し

一般に蚜蟲の繁殖する所には常に多數の蟻類の生存を見るものにて此蟻たるや蚜蟲の分泌する甘液を甜食せむがためにして蚜蟲は蟻によりて敵蟲を保護せられ又其傳播を媒助せられ或は越冬の準備を受くる等彼我共棲するものなり

防除法

- 一、春期發生の初期に際し園内を巡視し指頭にて壓殺すべし之れ甚だ不經濟なるが如しと雖も反つて經濟的なり
- 二、夏期は幼蟲の寄生せる枝梢は摘心と兼ねて剪去すべし
- 三、石油乳劑三十倍液除蟲菊加用石油乳劑五十倍液或は又除蟲菊酒精浸出液二十倍乃

至二十五倍液を撒布すべし注意すべきは卷合萎縮せる葉を擴げ内部にも細口の噴口を使用して灌注すべき事之なり

四、剪定の完全を期し光線の透射空氣の流通を佳良ならしむべし

五、空氣の流通日光の透射の悪しき土地は園地として選定すべからず

六、除蟲菊石鹼合劑又は石鹼水を初期に丁寧に灌注すべし

七、天敵としては瓢蟲七星瓢蟲草蜻蛉扁蛇寄生蜂等ありて之れを制裁せり就中肉食瓢蟲類の効能著大なりとす

十一、梨星蝨

別名カシハケムシ カシハマシ

年一回の發生にして幼蟲態にて越冬し早春發芽前より樹幹に上昇して將に發芽せむとする芽包に喰入し喰入されたる芽は一見異狀なきが如きも委細に之を検すれば其一部に孔ありて蟲糞の脱出せるを見るべし發芽期に至れば幼蟲は漸く成長し嫩葉又は花蕾を集めて捲綴し其内にありて喰害を逞うす而して幼蟲の發育と共に漸次開葉に移りて葉の兩縁を曲折げ絹絲にて綴りカシハ餅狀に捲き其中にありて喰害す之れ俗に「マンデウ」カシハケムシ等の名ある所以なり而して被害葉は一部又は全部黒變し枯死するに至れば更に次葉に移り喰害する事前の如し幼蟲は五月下旬より六月上旬

に至りて蛹化し六月中旬に蛾化し同下旬に産卵し幼蟲は六月下旬より七月上旬に入りて孵化す故に八九月の交より早春の發生を以て最も恐るべきものとす幼蟲は一、二回脱皮をなすのみにて未だ成長充分ならざるもの深く樹皮下又は根際に下りて越冬するものとす

防除法

一、冬期枝幹及根際等を掃除し潜伏所を尋ね潰し殺すべし

二、早春幼蟲の樹幹に上昇するを遮斷すべし之れには樹幹の周圍にトリートンダルフツドの如き膠粘劑を塗附すべし

三、被害の初期に於て捲葉を摘採燒却すべし

四、裏葉の卵塊を取るべし

五、成蟲は晝間飛翔遲鈍なるが故に掬殺し繭を採集し燒却するか或は潰し殺すべし

六、早春毒劑加用石灰乳劑又は毒劑加用ボルドー液を撒布すべし

十二、チヨツキリザウムシ

本種は獨り梨果のみならず桃、苹果等をも害す被害狀況を見るに成蟲は幼果に産卵し之れより孵化したる幼蟲は果肉を食して成長し被害果は多く腐敗して落下するもの

なり

年一回の發生にして冬期は土中の繭内に老熟せる幼蟲態にて越冬するものなり通常五月頃より成蟲即ち前胸は圓筒形に近く中央太く頭胸の背面に多數の小點刻を密布し紫赤色の粗毛を有し翅鞘の表面には各六條の縱點列を有し體長口吻共に四分位の象鼻蟲は交尾して幼果内に一粒宛の産卵をなす雌蟲産卵終れば粘液を分泌して産卵孔を閉塞し此液乾燥すれば黒褐を呈す雄蟲は梨にありては果梗を咬み切り置くの性あり幼蟲は果肉内にありて之を喰ひて成長し老熟する頃は果實は落下し幼蟲は果内より脱して地下二三寸の處に入り繭を作り其内に越冬す

●●●
防除法

一、成蟲は墜落性あるが故に早朝動作不活潑なるとき樹を振動し落下するものを捕殺すべし

二、落果は勿論被害果は悉く摘採蒐集して焼却すべし

三、冬期園地を耕起し土中に蟄居せる幼蟲を凍死せしむべし

十三、 養 蟲

年一回の發生にして幼蟲態にて養内にありて越冬す七月頃蛹化し八月頃羽化す雌蟲

は翅を缺き雄蟲の飛來を待ち交尾し養内に産卵す之れより孵化したる幼蟲は親養内より出で小枝葉片を集めて養を作る事親に等し而して本種の越冬せる幼蟲は發芽前の芽及其等の葉樹皮等を食するを以て時に大害を與ふる事あり

●●●
豫防法

一、晩秋より冬期に互りて枝條の養を採集し焼却すべし

二、産卵後の養蟲採集は多くの卵粒あるを以て効あり

三、早春毒劑を應用すべし

十四、 刺 蟲

別名柿の刺蟲 いらむし蛾

年一回の發生にして幼蟲態にて繭内にありて越冬す而して翌春五月頃蛹化し六月中旬より八月に涉りて羽化し葉裏に約二百個内外の産卵をなす産卵後七日位にして孵化し早きものは七月下旬より八月上旬に老熟營繭し遅きものは九月上旬より十月上旬に互りて老熟す

幼蟲は葉を喰害し大害を與ふる事あり吾人が梨樹間を往來するとき往々顔面に刺戟疼痛を覺ゆることあるは此蟲に刺されしなりかゝる場合には治療藥として稀アンモニア水を塗附するを可とす

豫防法

- 一、冬期落葉中又は枝條に附着する繭俗に云ふ雀籠スズメコを採集すべし
- 二、七八月頃葉裏の卵塊を採集すべし
- 三、夏日の晴天を選び強力噴霧器にて多量の泥水を灌注するか又は樹を動搖せしむれば幼蟲落下するが故に捕殺すべし
- 四、發生多きときは毒劑を撒布すべし
- 五、成蟲の燈火誘殺も亦一法なり

第十五章 病蟲害驅除豫防劑

〔一〕ボルドー液

驅蟲劑と言はんより主ら防菌用として發明せられたるものなれども毒劑使用の際本劑を混用する場合あるを以て左に其調製法を説明すべし

硫酸銅	百二十匁
生石灰	百匁乃至百二十匁
水	三斗

材料の選擇

生石灰 良好なるものを使用すべし品質佳良なるものは硫酸銅百二十匁に對し百匁内外を加用すべく粗惡なる時は百二十匁位を要す

硫酸銅 普通工業用の低廉なるものを使用す

水 可成清淨なるを良とす

調製法 先づ大小三個の桶を準備するを要す桶の大きさは調製量によりて決定せらるべきものなるも普通一個は三斗位を入れ他の二個は一斗五升入れにて可なり今三斗式液を調製する方法を述べんに初め硫酸銅百二十匁を一斗五升入桶に投じ熱湯二升を注ぎて溶解し残りの一斗三升は冷水を加ふべし又別個の一斗五升入桶に生石灰百二十匁を篋に盛りたる儘入れ少量の熱湯を注加して生石灰を消和せしめ乳狀として後全量一斗五升となる迄冷水を加ふ石灰の殘滓は篋の中に存するを以て之を除去し斯くして硫酸銅及び生石灰の桶を三斗入れの大桶に同時に移し込み能く攪拌すべし攪拌はポンプにて行ふを可とす之を三斗式石灰ボルドー液と稱す若し全量二斗なる時は二斗式石灰ボルドー液と稱す此混合液は蒼色にして少しく粘氣を帯び直ちに毒劑を加入し攪拌しつゝ撒布すべし良好なるボルドー液は調製後二、三十分を経るも

容易に沈澱降下するを見ざるも、生石灰の品質粗悪なるか又は調製する場合に混和液の暖きか或は其他の注意を缺くときは速かに沈澱下降し粘着力を減じ不良なるものとす

調製上の注意

- 一、生石灰及び硫酸銅液は混和前充分冷却せるものなるを要す
- 二、桶の内面には五升毎に水準を記し置くを便利とす又何れの式に拘らず全量の半分宛に生石灰及硫酸銅を溶解すべし
- 三、生石灰液及硫酸銅液は必ず同時に第三の桶に移しつゝ、兩液を合せ決して一方の液に他の液を加ふべからず
- 四、濃厚石灰ボルドー液を調製し後稀釋するは宜しからず
- 五、石灰ボルドー液は弱鹽基性の反應を呈するを可とす、若し調製液に青色試験紙を浸し赤變する時は之酸性反應なるを以て更に此反應を呈せざるに至るまで生石灰液を少量宛攪拌しながら加入すべし
- 六、石灰ボルドー液は入用の都度調製し決して之を貯藏すべからず
- 七、石灰ボルドー液の附着し難き作物には二斗の液に對し石鹼、砂糖又は膠を二十匁の割合に混すべし

施用上の注意

- 一、撒布後間も無く降雨ありて流去せられたるときは再び晴天の日に撒布するの要あり但し撒布後液の乾燥したる後多少の降雨あるは差支へ無きも次回の撒布期を斟酌して短縮すべし
- 二、梨、苹果等の果實の大豆粒大以上に達するときは果皮に被害あるを以て撒布すべからず
- 三、梅、桃李巴且杏等の十分開綻したる後撒布すれば落葉の虞あり
- 四、胡瓜、葡萄、葉菜類其他軟弱なる蔬菜に對しては三斗式以上の稀釋せるものを用ふべし
- 五、本劑撒布後又は其以前に石油乳劑其他の驅蟲劑を撒布せざる様注意すべし
- 六、果實蔬菜等にボルドー液の汚染を存して食用並に外觀を損するものは食用酢の稀釋中に浸して少しく振盪すれば消失すべく後清水にて十分洗滌すべし

〔二〕石灰硫黃合劑

千八百八十六年米國に於て創製せられたるものにして近來盛に賞用せらるゝ、有効な

る藥劑なり本邦に於ては未だ廣く使用せずと雖年々其用途の擴張せらるゝは明かなる事實なり而して本劑は調製に際し比較的長時間の煮沸を要する不利ありと雖も特に介殼蟲驅除に効あると病害豫防の効を兼備せるとは記憶せざるべからず

生石灰	百二十匁
調合量 硫黃華	百二十匁
湯	一斗

原料の選擇 硫黃華は普通坊間販賣するものにて可なれども硫黃塊は使用すべからず生石灰はポルドー液に使用せしものに等しく夾雜物なき良品なるを要す

製法 豫め二個の鍋を用意し一を湯鍋一を煎鍋とす湯鍋に水を充たして煮沸せしめ其間に生石灰を別器に入れ少量宛水又は湯を滴下して全く消化せしめ之を煎鍋に移し湯鍋の湯を三升位入れ攪拌煮沸し之に豫め湯を以て濕し置きたる硫黃華を入れ攪拌しつゝ、煮沸すべし煮沸を續くると共に藥劑の色を變ず此時少量の湯を入れ尙煮沸すれば赤褐色に變ずるを以て湯鍋の湯を漸次此内に入れて遂に全量一斗となし後二十分間位煮沸し赭色となるに及びて調製終る其時間初めより約一時間位とす

調製上の注意

- 一、必ず硫黃華を用ふべし
 - 二、生石灰は夾雜物なき良品を用ふべし且消化の方法はポルドー液に等し
 - 三、硫黃華は豫め湯にて濕し置かざれば混入後液面に浮ぶものと知るべし
 - 四、次第に湯鍋の湯を用ひて決して水を用ふべからず
 - 五、煮沸中は常に攪拌すべし
 - 六、煮沸は焚火にて一時間位を要し藥劑の赭色に變ずるに及びて止む
 - 七、數石の藥劑を要すれば溜桶に貯へ置くも差支へなし然れ雖冷却せるものは再び暖めて用ふべし
- 撒布上の注意
- 一、溫氣の全く去らざる内即ち微溫湯の時撒布すべし
 - 二、特に夏期に於て濃度は常に嚴格に検査して撒布すべし
 - 三、冬期は普通原液を撒布せしむるものにて其場合一度冷却せるものは溫湯加減に溫め沈澱を溶解せしめて使用すべし
 - 四、高温なるものを撒布せば噴霧器を損す
 - 五、使用の際は絶えず攪拌しつゝ、あるべし

六、撒布に際して被服は特に悪しき物を用ふべし
七、灌注は晴天無風の日を選ぶに利あり

〔三〕 濃厚石灰硫黄合劑

石灰硫黄合劑は其効力絶大なるを以て園藝家の認むる所となり従つて需要額も大なるが故に強度石灰硫黄合劑或は酸曹液等の名を以て販賣せらるゝに至れり然れども之等は稍高價なる缺點あり

生石灰	六百匁
調合量硫黄華	一貫二百匁
水	一斗

調製法 前者と異なる點なきも只本劑は液量少なきを以て初めより全量の水を以て之を煮沸し調製後布にて濾過し沈澱物を去りて適當に稀釋して用ふべし

〔四〕 石油乳劑

米國に於て千八百六十六年六月の發行にかゝるガーデナス・モンストリー(Gardener's Monthly)誌上に於て大いに石油の使用を勸告したり其後之に關する研究は歩を進め石油乳劑(Kerosene Emulsion)發見されたるも一も明確なる記録を見ず然れども石油乳劑を研

究し盛に其使用を勸誘したる最初の人は恐らく米國のクック氏(Mr. Cook)なるべし其後本邦に於ては明治二十四年の發行にかゝる小野孫三郎氏著重要植物害蟲要說中に記載を見るも未だ石油乳劑の名稱無し亞で明治三十二年六月の發行にかゝる河原丑之輔氏著害蟲驅除要覽中に石油乳劑の名あり其後完全なる石油乳劑の創製せらるるに關しては農商務省農事試驗場の力與つて大なるものあるを知るべし今や本劑は害蟲驅除劑として經濟効力兩方面に於て最も有効にして且つ應用し易き藥劑の一として廣く使用せらるゝに至れり

石油	一升
調合量石鹼	十二匁乃至十五匁
水	五合

原料の選擇 石油は普通燈用のものを用ふべし殺蟲除蟲液等と稱して坊間に販賣する重油又は輕油の如きものは十分石鹼と調和せざれば殆ど用ふに耐へず次に石鹼は純良なるものを用ふべく著者の實驗によればアイボリー、マルセル、シスターの如き石鹼を以て最も完全なる藥劑を調製し得らると信ず
水は清水にして石灰分、有機質アンモニア鹽分等を含ませざるものたらざるべからず

若し之等の内何れかの少量を含有すれば最早完全なる乳劑は製し能はざるものと知るべし

調製法 所要の石鹼を細割し水に入れて煮沸溶解せしめ又石油は別器に入れ危険なき様文火にて暖め兩液の充分暖まりたる時混合し短かきホースにボルドー噴口を付けたる噴霧器にて約十分乃至十五分間劇しく液を混合するときは牛乳狀の藥劑を得之れ即ち石油乳劑の原液にして其儘にては被灌注物に害を與ふるを以て害蟲の種類と時期に應じて稀釋使用すべし

調製上の注意

- 一、石鹼を豫め細割し置く事
 - 二、石油は引火し易きものなれば加熱に際し特に注意すべし
 - 三、兩液を混合するには手早く行ひ冷却せざる間に調製終るべく混合の際噴口を高く上げず液面に近く支持し液の冷却せざる事に努むべし
- 液の検査 石油と石鹼との調和不良にして幾分にも石油分離して液面に浮ぶが如きは植物に有害にして全く用をなさざるものなり然れば其良否を検するは最も大切な事なり即ち之を検するには硝子板に塗り透視して油胞あるは不良なる徴なり而

して石油不良の爲分離したるは之を再製するの餘地無きも石油の温め方或は混合の方法不充分なるため分離せしときは更に煮沸混合すべし

施用上の注意

- 一、原液を處定量に稀釋するには最初二、三倍の湯を以てし噴霧器にて充分混交し夫より適宜水にて稀釋すべし
- 二、石油乳劑五倍液とは原液一升到水四升を加へ全量五升となれるものなり之れ何種の藥劑を問はず之に準すべし普通石油一升水五合にて製せるものは原液一升四合を得べし
- 三、乳劑は勿論稀釋液に塵芥等の混入せざる様注意すべし之れ使用の際噴口を塞ぐの恐れあればなり
- 四、可成新鮮なるものを用ひ、調製後長時日を経過し石油の分離せるものは使用すべからず且つ如何なる場合と雖も液面に油胞の認めらるゝが如きものは使用すべからず

五、乳劑使用は晴天無風の日を選ぶべし

〔五〕 松脂合劑

本剤は冬期各種介殼蟲驅除剤として有効なるものにして從來の松脂合剤をば農商務省園藝試験場にて改良創製せられたるものなり

松脂	百二十匁
調合量 苛性曹達	百匁
水	一升

本剤を調製するには先づ石油空罐の如きものに水一升を入れ煮沸せしめ之に松脂及苛性曹達を入れ煮沸すること十五分間にして凡て溶解し黒褐色を呈するに至れば可なり使用に際しては處定量の水にて稀釋すべし而して本剤の何倍液と稱するは石油乳劑に於けると等しく全量に於ける液量を指すものと知るべし

調製上の注意

- 一、苛性曹達の溶解するときは大に發熱するものなるが故に取扱上注意すべし
- 二、松脂は豫め細碎し篩ひ置くときは液に塵芥を混せざるのみならず溶解容易なり

〔六〕 除蟲菊石鹼液

本剤は發芽前後より夏期の間害蟲驅除に用ひて其効大なるものなり

〔除蟲菊〕 二十匁

洗濯曹達	五匁
調合量 石鹼	二十匁乃至三十匁
水	一升

本剤を調製するには最初三升の水に洗濯曹達を投じ之に除蟲菊を入れて約三、四十分間煮沸し之に薄く削りたる石鹼を入れて溶解せしめ後水を加へて全量一斗となすものなり

又一時に多量を要する場合には釜二個以上を用意し一方の釜にては水三斗に對し洗濯曹達及除蟲菊を前記の二十倍を入れ煮沸せしめ一方には同様の分量の石鹼を溶解せしめ双方充分溶解したるを度として混合し良く攪拌し使用に際し適宜稀釋して用ふべし

調製上の注意

- 一、除蟲菊は時に不純物あるを以て花を用ひて製するを良とす
- 二、除蟲菊粉(花は豫め碎末し置く)は豫め少量の水にて捏ね置くを便利とす
- 三、除蟲菊を加用して後煮沸長きに失すれば除蟲菊の効力減少するを以て五分間位に止むべし

使用上の注意

- 一、本剤は蟲體に觸る、様丁寧に撒布すべし。
- 二、晴天の日中に撒布するを良しとす。
- 三、本剤は液の冷却して粘氣を増したるものを使用すべし。

第二編 加島村農會施設事業

本村は概む平坦なる沃野なるを以て従來米麥作を專業とし他に殆ど副業として見る可きもの無かりしも獨り梨樹の栽培は最も克く本村の土質に適し相當の收益を擧げしかば其栽培反別も次第に増加し現今に於ては我國梨の主産地として世に喧傳せらるゝに至れり然れ共尙舊慣を墨守し進で發展の途を講ずるもの尠く動もすれば他地方の梨に壓倒せらるゝの憾なきにあらず而して現今に於ては斯業の衰頽は本村經濟界に於ける一大打撃なるを以て本農會は夙に農事の現況に鑑み益々斯業の改善發達を計るの急務なるを認め左に掲ぐるが如き諸般の方法に依り指導獎勵の任に當り大いに當業者の覺醒を促し年を逐て其面目を革新するに至れり今左に其採りたる方法の大略を示す可し

第一章 視察員の派遣

明治四十二年より本農會は年々精農家を選抜し縣内外の有名なる栽培地の狀況を調査せしめ彼の長所を採りて以て我の短所を補ひ本村梨栽培の改良發達に資し同時に

販賣方法等を攻究し之が改善並に販路の擴張に努めつゝ、あり
視察員派遣の狀況を示せば次の如し

年次	日程	視察員	視察地名	視察目的
明治四十二年	往復五日間	金指喜作 外三名	名古屋枇杷島市場	梨果販賣狀況視察
同 四十三年	同 七日間	幾見嘉十郎	岡山縣下の園藝	岡山市六六園栽培ノ狀況及其附近園藝地視察
同 四十四年	同 二日間	望月豐太郎 外十一名	興津園藝部縣立農事試驗場	長十郎不結果の爲め其原因視察
同 年	同 六日間	佐野房次郎 牧田寛一	東京、横濱、長野、甲府、千葉	各市場及栽培視察
同 四十五年	同 三日間	金指喜作 外十一名	東京府下稻城村 神奈川縣下稻毛郷	栽培狀況
大正二年	同 三日間	望月八名 外八名	神奈川縣下稻毛郷、東京府下稻城村、千葉縣試驗場	同
同 年	同 二日間	金指喜作 外三名	安倍郡大里村、志太郡相川村 藤原郡川崎町	産業組合經營方法及栽培狀況
同 三年	同 四日間	金指喜作 外四名	神奈川縣下稻毛郷 東京府立園藝學校	園藝視察
同 年	同 十三日間	松永正名 佐野房次郎	大阪、神戸、下ノ關 並ニ九州方面	各市場視察
同 四年	同 三日間	古郡虎次郎 外四名	神奈川縣橋本郡稻田村地方	栽培視察
同 五年	同 四日間	三浦小太郎 外七名	神奈川縣橋本郡稻田村 千葉縣立農事試驗場	同

大正六年度亦該事業を繼續して奈良、京都、大阪、神奈川二府二縣下に於ける各産地を調査したり

今茲に視察せし主なる栽培家の經營と特産地の狀況とに就き其調査の概要を示せば次の如し

奈良縣下梨栽培狀況

沿革

奈良縣に於ける梨栽培地は生駒郡安堵村を中心として同郡平垣地方及山邊郡西部磯城郡西北部等を主なるものとし年々栽植を擴張せり而して安堵村に於て初めて梨樹を栽培せしは今より六十四年前にして同村大字東安堵村岡野源三氏京都に赴き歸途南山城長池附近に於ける梨樹栽培の利益あるを聞き杉本の苗木種類は島田、瀬川を持歸り同地方の栽培法によりて試作せしに相當の利益ありしも當時交通の不便なる爲販路容易に開けず漸く磯城郡田原村地方に賣捌く位にして從て栽培者も増加せざりしが其後維新の頃に至り岡野氏の梨樹も老朽して一時栽培の跡を絶つに至れり
明治六年岡野源三氏再び梨園を開き金子吉藏氏と共に極力之れが擴張を計りしも遂に好結果を得るに至らざりき其後數年を経て辻本忠二郎庄司倉藏氏等再び該業を起し梨園を開くに至れり下りて明治十五年の頃米價低落の際には非常の利益ありしを以て近隣相傳へて之れが栽培を擴張せり然るに明治二十三年の頃米價下落し米價騰貴せしを以て一時衰微せしが幸に維持するを得たり其後日清戰爭後は果價常に高く加ふるに交通の便大いに開けたるを以て益々梨樹の繁殖を來たし近

村相傳へて栽培に従事し明治三十五年頃には盛に増殖するに至れり
一方他府縣よりも梨果の輸入せられざるを以て京阪地方及名古屋方面は大和梨獨占にして非常に好
評たりき次で明治四十三年頃は縣下全般南部方面へ五百町歩に増加したり
其後増減ありたるも南西方面に變遷して現在磯城郡添上郡山邊郡最も盛にして其産額貳百萬貫價格
參拾萬圓を算するの盛況を呈するに至れり

位置及地勢

梨樹栽培地は所謂大和の平垣部地方にして沃野數里に連亘せる所なり而して栽培地附近には傾斜地
高原の如きは殆んど見ず只河川も數流の瀧漉排水路あるのみ故に前記傾斜地の高原河川の附近に於
ては栽培せられず其栽培地は開潤なる田圃なりとす
前述の如く地形傾斜地に非らざるを以て梨園の方向は別に注意せずと雖唯畦の方向を能く考慮せざ
れば結果數及病蟲害に至大の關係を有す而して一般に南北畦は光線の透過空氣の流通好きを以て病
蟲害少なく從て結果多し之れに反して東西畦とすれば空氣光線の透過不平均なるのみならずぐる植
(ぐる植の事は別に詳記す)となせば畦間の稻作成育上早晚を生じ取扱上非常に不便を生ず故に概れ南
北畦とせり

氣候及土質

氣候の梨樹に及ぼす關係は至て稀なり而して栽培地の初霜は通例十一月上旬にして終霜は四月下旬
なれ共時に五月上旬に來る事ありとす雪は十二月中下旬に始まり三月上旬に終るものにして此期間
に三回乃至五回一寸内外積る事ありと雖も概れ一日に融解するを常とせり又梨樹栽培地は開潤なる
平地なるを以て強風一度至れば梨架を倒すの恐れあるも斯る事は至て稀なり而して開花の際晴雨寒

暖及風の有無は結果に至大の影響を及ぼすものにして風雨冷温の時落果多し其尤も適當なる氣候は
比較的晴天打續き氣候乾燥にして土地に適宜の温氣を有する時なりとす
土質は栽培地數里に亘るを以て地味一定せず然れ共概れ壤土にして少しく砂質を帯ぶ又往々粘質を
交ゆる所少なからず而して地質の梨樹に及ぼす關係を見るに砂質地は比較的地力瘠薄にして乾燥に
過ぐるを以て樹幹の成長大ならず且つ樹齡も短かきを常とす然れども果實の品質良好にして味又佳
良なり之に反して粘土地味膏腹にして枝幹能く繁茂して樹勢強大に過ぎ從て樹齡長し然れ共果實の
品位比較的悪しくして且病蟲害に罹り易し夫れ斯の如く一利一害あるを以て梨樹栽培地として砂質
土壤最も適せるが如し何んとなれば上記の中庸を得て好く結果するを以て品位割合に良好なりとす

品種

過去と現在の栽培品種を比較するに其間多少の變遷なき能はず今より六十三年前に於て島田梨盛に
栽培せられ次で出物金子赤丸赤龍大谷瀬川等漸次栽植するに至れり
然して明治三十年頃には早生種にて土用金子中生種にては出物大谷赤丸島田十次郎力彌大和白龍太
平瀬川晚生種にては水熊備中白龍鐵瓶トモ云フ雲勢以上十數種ありと雖も尤も多く栽培を擴張せら
るゝものは早生種として金子出物類次に太平大和白龍貯藏用としては早生赤鐵瓶等最も尙ばる而し
て各種類何れも一得一失あり即ち早生は珍しきと品位良好なるを以て市價高けれども果小にして從
て産額少し晚生種は果大にして産額多きも市場に品物多きを以て價は比較的低きを常とせり然れど
も概して貯藏用種は品拂底に當り賣却する事を得るの便を以て栽培するもの多しと雖ども時世の進
運と新種の發現とにより以上の如き品種は漸次減少し明治三十七八年頃は水熊種最も全盛を極めた
り然して其當時長十郎種生駒郡安堵村に輸入せられしが品質良好なると價格の意外に高きと樹勢の

強健なるとに因り非常なる勢を以て栽植せられ明治四十年頃には大和梨の六割を占むるに至れり
水熊種は姫心喰の被害を受くる事甚だしく爲に長十郎種に變遷せり嗜好の程度向上するに連れ長十郎種は世人の嗜好に適し需要も廣く市價自ら高く最も有利有望なれば明治四十年頃より今日に至るも依然梨中の重鎮として稱揚せられ現今にては僅に大和梨の九割を占むるに至れり

栽植

大和梨は平坦なる水田に土を盛り上げ九尺幅の畦を造り之に十尺乃至十二尺の株間に一本宛栽植す土を取りたる場所は四尺の溝となり之に稻作を植ふ付くるものにして所謂之を大和のぐる植と稱すぐる植は間作物たる稻作地の廣狭により一反歩の栽植本數一定せず又種類により株の距離に廣狹を付する事殆ど稀なれども早生種は比較的密植するが如し之れ樹の繁茂せざると樹齡の短かきによる尙密植と疎植とは樹命及結果に至大の關係を有するものにして疎植は結果多く樹齡長きを以て宜數栽植の初めに當り注意するを要す

灌溉

梨樹は周年適當の濕氣を要するものにして灌溉の便否は收利上影響を及ぼす事少なからず而して前述せる如くぐる植にありては水稻を交植するを以て稻栽培期間に各ぐるの間即ち稻田に灌水をなすを以て従つて梨樹に濕氣を與ふる便利あれども平植にありては斯かる事無きを以て特に灌溉せざるべからず

其時期は一年中春秋冬の三季は降雨適宜にして土地の乾燥亦甚だしからずと雖も夏季は乾燥甚だしく且つ樹の水分を要する事尤も多きを以て灌溉は大抵夏季に於てす而して可及的夏季日没より灌溉するを可とすと雖も冬季稻田を排水すべきや否やは種々の説あり然れども要するに冬季排水せば翌春果樹の發育を始むるに當り直ちに灌水すれば可なれども若し冬作を行ひ六月迄排水せば自然果樹根が下層に蔓延して夏季に至り灌水すれば腐敗して發育を害するに至ると言ふ故に梨樹は往々増加してぐる植を設くるに至るも長時間に渉らずして直ちに減水舊に復するが如き處に於ては二毛作地を利用して栽培せむよりは寧ろ一毛作地を利用するを以て經濟上利益ありとす

肥料

肥料の種類は大豆粕ニカソ粕糸屑綿實粕雞糞油粕人糞尿過燐酸石灰木灰糞灰等なりとす而して此れを施すには全量の二分五厘を果實採收後四分を寒明け前殘三分五厘を梨果採指大の時三回に施さる人糞尿は得るに従ひ施すを以て其分量時期は一定せず施肥量は栽培者により或は土質樹齡樹勢等により差異あれども十年前後の結果樹一本に對しては窒素五〇匁燐酸五〇匁乃至加里六七匁位の割にして反當二十五圓乃至三十圓内外の肥料を施す

整枝及剪定

縣下に栽培せらるる梨樹の大部は架上誘引盃狀兼棚造なりとす其方法は栽植當時苗木を地上一尺五寸内外の所より切斷す而して之れに數枝を發生すれば其の中枝の配置適當にして且つ發育良好なるもの四五枝を残し他は摘斷し之を以て將來架上に排置すべき主枝となす而して棚架になすは本植後滿四々年の後にして十二月より翌年二月迄の間に行ふ其高さは果實採收に差支なき位即五尺内外にして創設の年栽植後三年目には梨樹を中心として縱横一條を架すると共に其左右各一尺五寸内外を隔て、二條の竹竿を架すべく後は竹竿を縱横に添架して年々伸長する枝梢を結纏す而して同地に於ける棚架は枝を支柱に代用するものとす然れども平植にありては縱横四間毎に支柱を設くるが如し

一、棚竹及支柱

棚竹及支柱は共に竹にして棚竹は周圍二寸五分内外支柱は五寸内外のものをを用ふ大抵三、四年目より腐敗するを以て漸次腐敗せるものより取替るものとす、一反歩に要する棚竹及支柱合計平植なれば二十畝ぐる植なれば十畝とし一畝は四十貫にして、一畝に付大小混合四十本位あるものとす、近年棚竹は害蟲の潜伏所となり且つ竹の價額非常に高きを以て五年前は竹の代りにトタン製の針金を用ふるものあり

二、棚結繩

棚竹を結ぶに針金を以てせば腐敗する事なきを以て便利なれども樹枝を棚に結び附くるは是非共葉繩を用ひざるべからず之れ樹枝の生育に伴ひ葉繩を伸長すれども針金線は斯る事無きを以て樹枝に喰込み生育に害を及ぼすものなり

葉繩は一年にして腐敗するを以て毎年冬季に交換するを要す一反歩には大抵平植なれば四貫乃至五貫ぐる植なれば二貫内外を用ふと云ふ

三、摘果法

花蕾を摘除して結果を制限することは未だ多く行はれず只落花後大豆粒位の時蠶豆位の時梅實位の三回に損傷せるもの形狀悪しきもの蟲害に罹りたるもの等より摘除して五寸平方に一個を標準とし一本に(八年生乃至十年生)二百五十個より三百個を結果せしむ

四、採收の季節及度數

採收は各種類とも最終の採收迄は凡そ三、四回位形狀悪しきもの損傷せるもの等所謂疵物より漸次採收するものなれど其成熟は種類によりて差異あり大約次の如し

土用金子 七月下旬より八月月上旬迄

出物大谷金子 八月月上旬より中旬迄

大和白龍、其他中生種 八月中旬より九月月上旬迄

長十郎 八月二十日より九月十八日迄

早生赤 九月十五日より九月下旬迄

袋掛法

近來梨姬心喰及輪紋病の被害甚だしきを以て新聞製の袋を用ふるに至れり

貯藏法

貯藏法は未だ進歩せりと云ふ能はず之れ貯藏用種類の如きものも採收後直に販賣するの便利あると且つ貯藏法を熟知せざるに依るならん然れども近來産額の増加著しきを以て貯藏するもの往々あり而して貯藏に用ふる種類は水熊及鐵瓶晚三吉にして此等は採收の當時にありては色澤品質共に劣等なれども之を貯藏するときは漸次品位を先進すに至る

貯藏の方法に二つあり一つは箱又は壺に乾砂を入れ顆々相接せざる様に列べ更に乾砂を入れ其上に果實を併ぶる事前の如くし順次層々相重ね器に充滿するに至らば器口を密封して屋内寒暖の變化少なき冷涼なる所に置き販賣する迄は決して口を開かず斯くすれば大抵翌春四、五月頃迄は貯藏するを得又一法は貯藏用種類を一々新聞紙若しくは澁紙に包み箱若しくは紙張籠に層々相重ねて密封し置く時は能く二、三月位は貯藏し得と言ふ

販賣及荷造

販賣は箱賣、實賣及樹立賣等にして栽培地に於て採收の期間集合組合又は市場を開設するが故に其場所を持ち行きて仲買人に賣渡すものなり又各産地の間屋に持ち行くものあり丹羽市は寄屋と言ふものありて生産者のものを買ひ占むる所もあり
仲買人の各地に搬出するは多く石油の空箱を用ひ其中に梨果を一々新聞紙にて包みて詰め込み蓋をなし横に二ヶ所の掛繩をなすのみなり

病蟲害

梨樹を害する病蟲害の種類は甚だ多くて栽培上最も勞費を要す奈良縣下に於ける病害の種類は赤星病、黒星病、輪紋病、白紋羽病、褐斑病等にして害蟲には姫心喰、介殼蟲、鋸蜂、心喰蟲、梨蠹、星蝨、梨葉捲蟲、刺蟲、象鼻蟲、赤壁蠹、軍配蟲等にして其の中被害の最も甚だしき物の豫防方法を述べん

一、赤星病及黒星病は満花落花(六七分小指大の時の三回)に二斗五升式乃至三斗式石灰ホルド液の撒布を行ふ

二、輪紋病

之が豫防法は未だ試験中なるも奈良縣立農事試験場中川技手の試験せる成績を示せば次の如し

六月上旬石灰多用ホルド液石灰六〇〇勿硫酸一二〇勿水三斗五升を十日ごととに數回撒布せりと
其他炭酸銅アンモニア液、炭酸ホルド液、硫酸合劑、袋に殺菌劑を塗布せしもの等試験せしも其中最も成績良好なるは石灰多用ホルド液なりとす但し冬季枝梢に附着し居る輪紋病を取らざれば假令殺菌劑を撒布するも其効極めて少なし而して薬水園主奥徳平氏は曰く廿世紀に最も被害多く生産高の四分の三は輪紋病の爲に侵され甚だしきものは袋掛の十分の九は被害を來すと同氏は豫防として六月二十七日を最終に十一回石灰多用ホルド液を撒布し其他發芽前に一回昇永水及クレオソート二

液を一回撒布せりと

三、姫心喰蟲

姫心喰の被害は全縣下に及ぼし一般當業者の困難甚だしく之が成蟲豫防として松脂苛性曹達合劑(曹達三〇勿松脂六〇勿水一斗)を七月八月の時期に撒布して効果多しと

但し日中撒布は葉が焼け被害を呈するを以て曇天に撒布するを安全とす
鋸蜂は水田には來襲せず山林原野の附近及び畑には非常に發生多しと言ふ

小作料

水田の小作料二石梨畑の小作料一石五斗土地賣買價格六、七百圓なり(一反當)

京都府下梨栽培狀況

沿革

久世郡にては文政年間に寺田村近藤平兵衛なる者攝津地方より苗木を購入し漸次栽培に従事せしを
始めとす、綴喜郡にては今より七十餘年前森田源左衛門なるもの栽培に着手せしを始めとすれども多
く之れを仕立つるに至りしは明治初年以降に屬すと言ふ

著名産地 久世郡 百町歩
栽培町村 寺田村 富野莊村 久津川村 御牧村 佐山村

綴喜郡 百十町歩
有智郷村 都々城村 八幡町

紀伊郡 十五町歩
南桑田郡 七十町歩

右産地は何れも未だ若木多く市場に出づる量多からず然れども栽培反別三百町歩價格貳拾萬圓を算する現今の状況なり

氣候

栽培地は概して冷涼なれども年中曇雨天日數比較的多く夏秋の候多くは西南の暴風あり冬季は西北の強風を受くること間々あれども被害概して大ならず而して一年中の氣象概ね左表の如し

自明治四十五年至大正三年三ヶ年間平均氣象

月次別	溫度			度			日數			降雪數
	平均溫度	最高溫度	最低溫度	晴	雨	曇	晴	雨	曇	
一月	四、〇	八、二	一、八	二一	二	六	二	〇	二	
二月	五、七	九、七	一、三	一七	二	九	〇	〇	〇	
三月	八、八	一二、三	二、四	一八	四	七	〇	〇	〇	
四月	一四、七	一八、六	六、六	一九	〇	八	〇	〇	〇	
五月	一九、二	二三、三	一一、九	一八	四	七	〇	〇	〇	
六月	二三、四	二六、七	一五、七	二一	三	七	〇	〇	〇	
七月	二七、七	三二、二	二〇、二	二二	二	七	〇	〇	〇	
八月	二九、〇	三一、八	二一、五	二二	二	七	〇	〇	〇	
九月	三三、六	二七、八	一六、二	一八	三	九	〇	〇	〇	
十月	一八、二	二二、〇	九、七	二一	四	六	〇	〇	〇	

月次別	平均	合計	十一月	十二月	平均
最高溫度	三、七、二	一九三、一	一七、〇	一〇、〇	四、六
最低溫度	零下七、七	一六、一	二〇、一	〇、三	二〇
初霜期	十一月三日前後	二四〇、六	一一、二	一八	二〇
晚霜期	五月四、五日前後	二〇、一	九、四	一九	一
備考					九三
					九
					〇
					〇

地勢及土質

谿間又は狹隘の地は空氣の流通宜しからざるを以て斯かる地には栽培せられず主なる産地は平坦なる木津川沿岸の廣潤なる地に栽培せらる

土質第四紀古層にして瘠薄なる礫質砂土又は粘質壤土にして排水良好なり

肥料の種類及施肥の季節

油粕、人糞尿の二種を主なるものとす油粕は一株に付粉末一升人糞は一荷の四分の一位を限度とす季節は一月及十月又は採收後及寒中の二回とす然れども地味の肥瘠により肥料の分量を異にし富野莊村に於ける施肥量は次の如し

反當拾年生八拾本植

第一章 視察員の派遣

- 油粕 二拾五貫
- 人糞尿 百貳拾貫
- 石灰 七貫
- 草木灰 三拾四貫

中耕

從來十二月より一月に亘りて一回中耕せしも以來其害あることを發見し單に除草するのみ然れども地方に依り淺耕度數二、三回に及ぶものあり

剪定整枝

剪定及整枝は加島村地方と大差無きを以て此れを略す

貯藏法

長さ二尺幅一尺五寸高さ一尺位の箱を作り其底及側面上部共に藁或は麥稈を布き疵なき果實一個宛を紙に包みて之を納め蓋を施し温度の劇變なき土藏中に貯藏するものとす其種類は大抵晚三吉、瀬川にして普通より少しく早く採收し貯藏前腐敗若しくは害蟲の有無等を充分に點檢し然る後前法を施すものとす

荷造法

箱を以てするものは麥稈若しくは飽屑を箱底に布き果實を其上に並置し新聞紙等を以て其間を區別し幾重にも詰め入れ掛繩を以て之を縛り籠を以てするものは直ちに籠内に納め細繩を以て之を掩ふものとす

販賣並に病蟲害

販賣法及病蟲害の種類驅除豫防は奈良縣と同様なり

小作料

小作料は高く一反歩に付一石五斗位にして普通田の小作料と同様なり

神奈川縣橘樹郡稻毛地方梨栽培狀況

由來及び現況

東京市場に出る梨は武州大師河原産か下總八幡産と昔より定まりしが近時交通機關の發達に伴ひて各地より搬出するに至れり然れども品質優等耐久力強き點に於ては武州稻毛梨が最も歡迎せらるる福島縣庭坂産も早生赤水熊は好評なるも其他の品種に至りては稻毛梨に及ばざるが如し稻毛とは神奈川縣橘樹郡北部の總稱にして徳川時代に稻毛領と稱せしに起因せしなり此地方は古來より梨の栽培を以て著る起原は八九十年前東京府南多摩郡稻城村長沼より傳來し一時栽培せしも中絶し明治二十五年より漸次盛となり本場たりし川崎大師河原を凌駕する勢にて目下梨栽培反別は稻田村のみにて約七十町歩餘栽培戸數三百十戸、一兩年は拾萬圓内外の生産あり
販路は概ね東京にて稀に横濱横須賀等にも輸出せらるる五、六年前迄は栽培管理販賣法等も幼稚なりしが時運の趨勢と共に改良に熱中し今や稻毛梨栽培同業組合を設け爲に栽培法も改良上進し市場に歡迎せられ販路も擴張するに至れり

地勢及土質

此地方は多摩川上流の沿岸に位し地積は狹隘なるも第四紀新層の沖積土にして稻毛米の産地なり地

氣候

味豊沃にして梨樹栽培には最も適當せり平坦地にして水田を耕起し梨園とせるものなり
降雨及び曇天の打ち續く時は果樹類の開花結果を妨げ病虫害を誘致し易き事甚だし南面は丘を以て
園み風害極めて少し今此地方に於ける氣象の概略を示せば次の如し

平均温度 (大正五年度)

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
本年	五.〇	五.七	六.〇	六.一	六.二	六.三	六.四	六.五	六.六	六.七	六.八	六.九
平年より	高1.5	高0.3	低1.7	高1.1	高0.3	高1.3	低0.5	低0.2	高1.9	低0.5	高1.0	高0.4

最低温度 (大正五年度)

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
〇下5.5	〇下4.5	〇下4.5	〇下3.5	〇下3.5	〇下3.5	〇下3.5	〇下3.5	〇下3.5	〇下3.5	〇下3.5	〇下3.5	〇下3.5

降水量 (大正五年度)

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
本年	三六.一	一三九.八	六七.一	一〇九.四	一三〇.一	一三六.一	一五七.七	一九七.三	一六六.六	三〇三.七	三五四.一	五七四.一
平年より	少四二.六	多四三.〇	少六六.〇	少六三.九	少三三.三	少三三.五	多二二.七	少九四.六	少八二.九	多六六.六	多八〇.七	多三三.三

雨天日數

一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
本年	四	八	一三	一一	一一	二〇	二〇	一一	一六	二〇	一〇	一六一
平年より	少四	少三	〇	少二	少二	少一	少二	多八	少一	多八	多七	多二六

初霜月日 十一月二十三日

終霜月日 三月二十七日

品種

栽培品種は頗る多しと雖も今其の主なるもの及割合を示せば次の如し

品種名	全面積に對する割合	栽培の状況
長十郎	六割	各區を通じて栽培す
早生赤	二割	尙増加の傾向あり
幸藏太平雜種	二割	

赤種太平は赤星黒星に犯され太平は九月頃の降雨の爲甚だしく落花するを以つて漸次減少し早生幸藏之に代らんとするの傾向なり稻毛地方にては早生幸藏を有望種となし早生赤と共に混植して長十郎の増收を計る

各品種の開花期及採收期

品種名	開花期	採收期
長十郎	四月二十日より二十五日	初 八月二十五日 終 九月二十日
早生赤	四月二十二日より二十七日	初 九月十五日 終 十月十日
幸藏	四月二十四日より二十五日	初 八月二十日 終 九月十日
太平	四月二十日より二十五日	初 九月十五日 終 十月十日
早生幸藏	四月十二日より十七日	初 九月五日 終 九月十五日

開花期は七分通り開きたるときを指す年により多少の差あり又地勢土質樹齡により多少の差あり故に何月何日に至ると記したるものなり

栽植

栽植の距離は土質により多少異なれども普通二間四方乃至二間一尺四方に一本を栽植するものとする
一年苗を買ひて二年位假植して三年目に定植す五、六年生の大木を買ひ入れて栽植せるも今は殆ど見
受けす

間作の種類

幼樹二年間は里芋を間作とし其後は間作物を栽培せ

中耕及除草

中耕は十二月一回之を行ひ除草は五回に行ふ七月下旬に根本へは日覆として葉を撒布す新くせば日
覆のみならず雑草の發生を防ぎ又腐敗せば肥料となるによる

肥料

肥料の種類及施用方法の良否は成育並びに結實に至大の關係を有するものなるも多くは過去の経験
と先輩の實驗を基礎としつゝあり

肥料の種類は人糞尿、大豆粕、米糠、過磷酸石灰、木灰、粕堆肥等とす而して施肥の時期回数分量等に至り
ては栽培者により或は土質樹齡等によりて區々にして一定ならずと雖も今普通に行はるゝ方法に付
調査するに左の如し

成木一本に對する分量

寒 肥 (二、三月の候) || (下肥) || (一斗五升)
|| (二、三升)
芽出肥 (發 芽 前) || 人糞尿の少量を施す

實 肥 (六、七月) || 完全肥料の四、五合を施す
採收後 || 根の周圍を人糞尿にて潤す

肥料は凡て幹の直径の三倍位の處即ち根の先端に施す
此の地方に於ける最も多量に施肥するものゝ例

種目	數量	單價	價格	原肥	補肥
人糞尿	七〇荷	一荷	一五、四〇	三五荷	三五荷
大豆粕	二石二斗五升	一枚七貫目	一四、五〇	二石二斗五升	—
過磷酸石灰	一〇貫目	一圓四十五錢	一四、五〇	一〇貫目	—
二例 最も少量のもの					
人糞尿	五〇荷			大豆粕 一石五斗	
人糞尿	五〇荷			過磷酸	六貫目

人糞尿に過磷酸を混じて直ちに施す大豆粕は其儘施用す
尙上原子之吉氏の施肥法を示せば

- 一回 (二月下旬) 下肥大豆粕過磷酸石灰
- 二回 (六月下旬) 完全肥料
- 三回 (七月下旬) アンモニア過磷酸石灰

十二月斷根の際土地を軟くして大豆粕、粕少量を施す
價格より言へば多きものにて四拾圓少なき物にて二拾圓平均三拾圓内外を施す而して人糞尿は全肥
料の六割に及ぶと言ふ

樹姿

樹幹により適宜距離を定めて樹の周囲一尺七、八寸圓形に幅五、六寸深き四寸にし豆粕を入れて土壤と混じて人糞尿を入れて土地を覆ふ樹幹周囲の土地を全部取り除きて一回に施すものあり

夏季摘心

此地方は夏季摘心を勉めて施行する所にして冗枝其他徒長枝を除去するは勿論にして春季嫩芽の伸長してより爾後枝梢發育の模様により絶えず施さるゝ方法にして新梢の組織未だ木質化せざる以前に施さるゝを常とす摘心は四月下旬乃至五月上旬より漸次始め主枝より直接伸長せる縁枝は三芽にて此を摘心し結果枝より伸長せしものは二芽にて摘心し其後は一芽位にて二三回摘心を連續する時は七月中旬に至りて縁枝の伸長全く停止するものなり

摘果及袋掛

袋掛を行ふべき間際に唯一回の摘果をなすことあれども多くは四月下旬の落花後及六月下旬の二回に行はる即ち第一回の摘果には一花序より結果せる數個の中一、二顆に減じ第二回は果形正しき發育可算なるものを結果枝の勢力に應じて普通一結果枝に二個を残し其後接近の場所を摘除し袋掛に従事す

袋は日本紙に塗を刷きたるものは二年間使用に耐ゆるも二年目には塗を刷き直す其他新聞紙を用ひ塗を刷かざるものは一年限りとす

塗は一度半位の柿澆(通例水と等量乃至水七分に塗三分の割合を以て稀薄にしたるもの)

袋を巻縛するには蘭草を用ゆ、一貫目五十錢(土地にて出来る)或は二十五番内外の亞鉛線を用ふ針金は作業早く大規模の果樹園に在りては人夫賃を節するの利益あり亦打ち葉を用ふる所もあり針金よりも安價にして且つ買入れに面倒なければ副業的に經營する者は主に之を使用せり而して其功程は一入一日一千五百乃至二千五百は袋掛を行ふこと普通なり、賃金は男一人四十錢乃至三十錢女は花時期に蟲取二十錢乃至二十五錢袋掛の方法は風強きを以て果實と共に果枝迄も包むものなり

採收及撰果

當地方は東京横濱の如き大都會を附近に有するを以て固有の熟色を呈し成熟するを待ちて採收すれども遠隔の地に販賣するものは稍未熟の時摘採す

採收は手にて掻きとる、一人にて一日七十貫採收し得採收後園中にて大いさを撰び直ちに市場に出す稻田村より荏原村を経て神田市場に持ち運ぶものなり

荷造

採收したる果實は大小及疵の有無等によりて數等に撰別し籠の大きさは稍朝顔形を爲し底徑九寸口徑一尺六寸高さ一尺三寸籠目は幅三分中位の割竹にて風袋共四貫入とす荷造り法は底に麥稈少量を敷き梨果を三十乃至百個詰るものにして上層に比すれば下層は幾分小果を詰むるを習慣とす

最上層の表面に稻毛梨の商標を一枚宛添へ更らに新聞紙を覆ひ(絲だて)を以て兩端を合せ結束し且つ其上に麥稈を覆ひ太き六分周りの掛繩を以て上十文字胴巻結とす籠代は五錢より五錢五厘蓋三錢五

厘掛繩等を入れて合計拾錢位となる一籠普通品七、八十錢より最上一圓位の平均なり出荷先は主として東京神田及青山市場にて多くは各自別々に車によりて運搬するものとす

病蟲害

病害としては普通一般に見受くべき黒星病赤星病等主なるものにして之が驅除豫防法としては開花前落花後の二回に二斗五升式石灰ホルド液を撒布にて充分に効果を奏しつゝあり

上原氏は二斗五升式石灰ホルド液を四月十七、八日に第一回を施し第二回を四月二十九日に第三回を五月十日に撒布せり、病害は少なき方なるも害蟲としては象鼻蟲、鋸蜂、姬心喰、梨心喰、葉捲蟲、星蝸蝓、梨蠹、軍配、赤壁蟲の發生を見る

上原氏は介殼蟲其他の害蟲驅除の爲め石灰硫黄合劑を落葉後十一月頃に一回撒布を行ひ翌春開花時期に多く襲來する諸害蟲の被害亦甚だしく之が豫防驅除として花蕾鱗片の將に剥脱せんとする頃即ち四月十二、三日開花前に石灰硫黄合劑(ホーメー)の五度の撒布を行ひて其効果顯著なりと、二月頃に撒布したるものは介殼蟲驅除のみなれども四月の撒布は諸害蟲にも共に効果を奏すとの事なり

稻毛地方にては彼の鋸蜂の被害を蒙むる事故甚にして鋸蜂は驅除出來ざるものと稱し若し驅除し得る時は五圓の懸賞をなすと稱し居れり

上原氏は鋸蜂に對し硫黄の燻蒸法を發見せり明治四十年初めて行ひしものにして其當時近隣のもの皆嘲笑せしも其効果あるを見て漸次普及するに至れり

其方法は石油空罐に手吊を付け中に瓶一斗に硫黄華六合に落葉を少し入れて燻すものなり

燻蒸は雨天及露のあるときは宜しからずして風無くして日没の時を最も良しとす蛾は之が爲勢力を減じて飛び立つ能はず其他害鳥の鴉等も全然來らずとの事なり

販賣法

當地梨の販賣法は凡て個人販賣とす東京、横濱の如き無限の販路を有する大都會を左右に控へる地なれば生産品の販路に苦しむ事無く梨果共同販賣の必要を認めざるなり然れども稻毛地方にては梨栽培上必要な物品を共同に購入し之を組合員に賣却するを以て稻田、生田、向岳、高津の四ヶ村にて稻毛果物同業組合を設け組合創立に就きては樋口橋樹郡長、元橋樹郡立農事試験場技師片岡氏等の盡力に依る事大にして又當業者の斯業に熱心なる結果によるなり

稻毛の梨は風味に於ては優良なりと稱するも過言には非ざるべく肉質緻密にして多漿甘味なり爲に東京神田市場並に京橋市場にては最早稻毛を本場と稱するに至れり

第一章 梨果並梨園經營品評會

明治四十年より同四十二年迄三ヶ年間梨果品評會を開催し當業者を裨益する所尠からざりしと雖も更に其効果を顯著ならしむる爲梨園品評會をも併せ開き同時に剪定法、肥料の配合、施肥量、病蟲害驅除豫防法等に付き其缺點を指摘し専ら改良方法の指導に力を盡せり

尙一般梨樹栽培者は家計と事業との經濟に何等の區別なく經營に従事せるを以て六年度より經營の改善並に知識の普及を目的として梨園經營品評會を開設せり

之れ亦經營上極めて肝要なる事項にして事業の收支を明かにせば經營上の缺點をも探知し得て翌年注意の資料ともなり純益如何をも知るを得べく支出の節約を行ふ場合の参考ともなり其他研究調査の好材料ともなり其効果一層大にして年と共に其面目を改むるに至れり左に其の概況を示さん

梨果梨園品評會一覽

年 度	種 類	出 品 點 數	受 賞					會 期	
			特 等	一 等	二 等	三 等	四 等		
明治四十年	梨 果	一〇四		三	五	八	一五	二一	八月廿三日
同 四十一年	梨 果	四八		三	五	八	一〇	一六	八月廿五日
同 四十二年	梨 果	一五二		三	五	八	一五	三〇	八月廿八日
同 四十三年	梨 園	一二五	一	三	五	二	〇	一九	八月四日
同 四十四年	梨 園	一六	五	二	五	二	一	一五	八月五日
大正元年	梨 園	九八		一	七	九	二	二	八月六日
大正二年	梨 園	六二		三	六	七	一	八	八月八日
大正三年	梨 園	五四		二	七	一	九		八月九日

年 度	種 類	出 品 點 數	特 等	一 等	二 等	三 等	四 等	會 期
大正四年	梨 園	四六		二	五	一	六	八月十日
大正五年	梨 園	四九		二	九	八	九	八月七日
大正六年	梨 園	四二		六	一	八		八月十四日

梨園品評會審査報告

本村に於る梨園品評會は回を重ねること四にして年々進歩の狀ありと雖も地方により多少の消長を免れず然れども漸次改善の域に進みつゝあるは大に喜ぶべし從て其栽培區域及梨實の收穫も年と共に進みつゝあるは次表を見て明らかなり

明治三十九年より大正元年に至る七ヶ年栽培反別收量箱數價格表

年 度	作付反別	收 量	箱 數	價 格	壹箱の價格
明治三十九年	二二 _町	一一〇、〇〇〇 _貫	一八、〇〇〇 _箱	二一、〇〇〇 _円	一、二〇〇 _圓
同 四十一年	二五	一五〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	二八、七五〇	一、一五〇
同 四十一年	三〇	一八〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三六、〇〇〇	一、二〇〇
同 四十二年	三五	二〇〇、〇〇〇	三三、〇〇〇	三九、〇〇〇	一、三〇〇

同 四十三年	四〇 二五〇、〇〇〇	四二、〇〇〇	四八、〇〇〇	一、一五〇
同 四十四年	五二 二五〇、〇〇〇	四二、〇〇〇	五四、〇〇〇	一、三〇〇
大正元年	五五 三六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	七二、〇〇〇	一、二〇〇

備考 大正二年に於て富士驛より販出せしものは五萬六千八百六十八箱にして價格六萬五千四百四拾六圓及同驛を經由せず近郷に搬出せしもの約二千五百箱價格貳千五百圓に達せりと云ふ

之に依て見れば本村の梨園及梨實の收量は之を七ヶ年前に比すれば反別に於て二倍半收量に於て三倍強價格に於ても三倍強の多大なる發達を見るに至れるは當業者諸氏の熱心と本村農會の指導宜しきを得たるの結果と云はざるべからず而して之れが販路の狀況を見るに是亦多大の發展を見つゝ、あり其主なる仕向地は東京横濱小田原平塚鎌倉横須賀其他關東各地方關西に於ては豊橋名古屋四日市敦賀下ノ關多治見其他關西九州各地等に及び殊に東京に於ては近來富士梨の聲價大に舉れりと云ふ是亦大に喜ぶべき現象と云はざるべからず從て本村當業者としても進で良種の生産を圖り品質の向上を圖ること極めて急務となれり茲に於て本村農會は再三再四本會を開

き益々其改善を圖らんことを期せらる不肖囑を審査長に承け去る八月九日より三日間審査員佐野政治金指喜作古郡虎次郎佐野房次郎石川清藏の五氏と共に例に依り梨園の視察を行ひ其査定を了し壹等貳名貳等七名參等拾貳名四等拾九名合計四拾名を選拔し會長に對し其報告を了せり今出品の梨園に對し今後の注意を述べて審査の概評に代へんとす

今回出品地は前回に比し一般に佳良のもの多く剪定施肥病蟲害驅除豫防等に對し稍其の當を得たるもの多かりしは甚だ喜ぶべく殊に本市場新田菅谷邦太郎氏の園の如き大に見るべき價値あり然れども前回優良なりし中島水戸島方面の比較的佳良ならざりしは大に遺憾に堪へざる所なり横割平垣の如きは稍良好の成績を維持せり尙一層の奮勵を望む蓼原地方は前回と同く進歩の狀を見ず尙研究を要すべきものとす前に述ぶるが如く本村梨園の栽培は漸次増加の傾向あると同時に全國各地又競うて之が栽培に従事せんとするの狀あるを以て將來生産過多に陥るなきを保せず此の時に當りては品質の如何が市價を左右するに至るべきや明かなり依て今日より之に對する手段として品質向上の策を取ること極めて必要ならん其の方法としては第一施肥法の研究第二剪枝摘果及混植の研究第三病蟲害豫防驅除の研究等其主なるものに

して漸次品種の改良の如きも必要となるに至るべし

第一 施肥法の研究

晩近果樹に對する肥料に就ては世界各國競て其研究に従事せるがヤツプアー、コルセイ兩氏の説の如き大に参考に資すべきものなり兩氏の説によれば果實組成成分中無機成分として含まれ居るものは加里と石灰にして次で硫酸苦土と云ふ順序なるが故に果實の爲めに施肥として供給を要する成分は加里磷酸石灰窒素の四要素なるべし又米國カリホルニアに於る永年間の栽培的試験の成績によれば單に果樹及果實に現はる、分量よりするも肥料として施すべき窒素は實際少量にて足るも之に反し磷酸は理論上の計算より以上多量に施さざれば生育上の樹勢を満足し得る能はず又加里は理論上の分量より少く施すも差支なしと云ふ故に果實の肥料としては窒素の外磷酸及加里の必要を認むることを得るなり獨逸の園藝試験の成績によれば果樹に窒素肥料のみ施せば果實外觀極めて醜く品質劣等にして風味乏しく加里肥料を施したるものは味甘く磷酸肥料を與へたるものは香氣極めて佳なりと云ふ又梨の肥料の効果に就て試験せしものによれば無窒素に對し完全なる肥料を施したるものは無窒素一〇〇に對し完全一六五即ち六割五分の増收あり故に合理的施肥は其收量を大ならしむ

るのみならず果實の形態を大ならしめ品質を佳良ならしむ又加里肥料を施せるものは色澤著しく佳良にして且つ熟期を早め香味も佳良なり磷酸に缺乏したる土地に栽培せるものは酸味を帯ぶること強し窒素は果形の大小に關係する外大なる影響なしと雖も多きに過るときは果肉縮らず水分多きに過ぎ貯蔵に耐ゆる力少なしと云ふ尙本縣農事試験場に於て分析せる結果によれば肥料の如何により其結實中に含める糖分に大なる關係あるが如し

梨果の成分と窒素肥料との關係

試験區別	新鮮果實 百分中水分	新鮮汁液百分中			新鮮果實百分中				
		遊離酸	還元糖	全糖	遊離酸	還元糖	全糖		
大豆粕區	八四、八四一	二、五八	二、二九	六、二六	二、三三	二、九五〇	五、一九〇	〇、七	〇、一〇
鯨粕區	八五、六九九	二、四八	二、三〇九	六、一九〇	二、二六	二、九七九	五、三〇五	〇、八四	〇、五
堆肥區	八四、四九一	二、五	二、二六四	六、二四三	二、三三	二、九五五	五、三三七	〇、六三	〇、七
人糞尿區	八四、五〇六	二、六五	二、五〇五	六、五〇二	二、三九	二、二一七	五、四九四	〇、一〇〇	〇、七
無窒素區	八五、四三三	二、五二	二、二〇九	六、四三三	二、二九	二、二三〇	五、四九七	〇、七	〇、一〇

備考 本成績は各區二本乃至四本より採集せる梨果の一乃至二個を別々に分析し平均したるものなり

梨果の成分と磷酸肥料との關係

試驗區別	新鮮果實百分中水分			汁液百分中			新鮮果實百分中		
	遊離酸	還元糖	全糖	遊離酸	還元糖	全糖	窒素	磷酸	
過磷酸石灰區	八六、一九七	一、四〇〇	三、三三七	三、五九三	一、二二	二、七〇三	三、〇九七	〇、七二	
骨粉區	八五、五七四	一、六五	三、三三七	三、五九	一、四二	二、六八四	三、一三一	〇、七六	
トリス肥區	八六、七三二	一、六五	三、一八七	三、六三六	一、四三	二、七六四	三、一四五	〇、八六	
米糖區	八七、〇四	一、六五	三、〇三八	三、五九	一、四四	二、六四五	三、〇七一	〇、七二	
無磷酸區	八七、二〇三	一、六五	三、一三七	三、五九三	一、二五	二、七三三	三、一三三	〇、六四	

備考 酸及糖分量表示法は前者と同一なり

以上の成績に於て肥料と果實中に含有せらる、酸分糖分が如何なる關係を有するかを察知するを得べし之を要するに肥料の配合を適度にし以て品質の向上を圖ること極めて必要のことならん

興津町農商務省農事試驗場に於て梨樹に對し實際に施用する肥料の種類及其分量は左の如くなるを以て土質の状態に鑑み取捨して之を應用せば可ならんと信す

肥料名	全施肥量	基肥	追肥
大豆粕	二二、五〇〇 _g	二二、五〇〇 _g	
堆肥	三七五、〇〇〇	三七五、〇〇〇	
人糞尿	三七五、〇〇〇	一八七、五〇〇	一八七、五〇〇
過磷酸石灰	二二、五〇〇	一三、五〇〇	九、〇〇〇
木灰	二二、五〇〇	一三、五〇〇	九、〇〇〇

右は日本梨棚造一反歩七十五本九年生の場合の用量なり
三要素の割合は左の如し

- 窒素 五貫五百八十八匁
 - 磷酸 六貫百二十四匁
 - 加里 六貫四百五十九匁
- 比較的加里を餘分に與ふる割合なり

第二 剪枝摘果混植

梨樹に相當の剪枝を施すことは一般に行はれ居れども近來夏期剪定の如何に就て本村梨樹栽培者間に種々議論ありと雖も之を要するに期節の問題なり夏期と雖も適期に剪定を施せば無論被害なきものなり彼の菅谷邦太郎氏の園に就て見るも明かなり抑も夏期の剪定たるや夏期新梢が凡一尺位伸長せしとき本葉四五枚枝の基部に群集せる葉は算入せずを殘して摘み取るべし之を摘心と云ふ斯して十數日を経れば上部の葉脚に存する芽は發芽し一本若は二本の新梢を生じ漸次伸長するを以て又一尺位に伸びたる時二三枝の葉を殘して摘心す斯くて芽の出るに従ひ二三葉にて摘心し枝の生長衰へ來りし時枝の下部より切取る方法にして一名之を綠枝剪定と云ふ此の方法は不良なる芽を良好なる芽に變じ中間芽となるべきものを花芽に變せしむるものにして剪定せざるものよりも花芽を多く生ずるのみならず梨樹の生理的作用を直接間接に良好ならしむるものなるを以て適當の時期に之を行へば決して害あることなし一般に梨樹栽培者は多量の收穫を希望するの結果摘果を怠り徒らに樹勢を貧弱ならしむるの傾向なきにあらず當業者は成るべく適當の時期に於て適當の摘果を行ひ良質の果實を收穫すべきことに注意すべき要あり

近來長十郎種は比較的不結果なりと云ふ説あり當業者としても現に不結果を見しもの尠からず之れ大に注意を要すべき點なりとす

長十郎種の結果せざるは花粉少なき爲めのみならず同株の花の花粉は勿論同種の他の花の花粉を交配するも結果不良なり故に他の品種を混植せざれば完全なる結果を得難きことは實驗上明かなる事實にして現に栽培家にして獨逸種の如きものを混植せしに其周圍は比較的良好の結實を見たりと云へり依て長十郎のみ單植せずして長十郎種と同時期に開花するものを植ゑざれば充分の結果を見ること困難ならん今本縣農事試験場囑托松平氏の實驗によれば長十郎と同時に満開するものは左の如し

明治四十三年調査

一、長十郎と同時に満開のもの

平子、旭龍、重次郎、江戸屋、耕三、渡、晚六、衣通姫

同四十四年調査

一、長十郎と同時に満開のもの

衣通姫、江戸屋、獨逸、旭龍、赤穂、瀬川、大谷、伯帝龍

其他長十郎の開花中に開花するもの

明治四十三年調査

關西一、明月、伯帝龍、瀬川、早生赤、大谷、初霜、世界一、赤穂、太平、大廣丸、國富

明治四十四年調査

晚六、早生長十郎、重次郎、今村夏、明月、巾着、耕三波、關西一、國富、大廣丸、世界一、平子、眞鍮、初霜

尙幸藏の如きは長十郎より早く開花するが如し

以上の調査によれば長十郎種を栽培するに當り此等の種類を混植せば可なるが如し
當業者諸氏は勉めて混植を行ひ長十郎種をして充分の收穫を得んことを望む

第三 病害蟲驅除豫防

本年に於る本村梨園の病害蟲は其の種類少からずと雖も冬期青酸瓦斯燻蒸を行ひ或は石灰硫黄合劑の撒布を督勵せし結果害蟲の棲息比較的少しと雖も黒星病は著しく蔓延の狀あり中島方面の如き殊に其の著しきを見たり之れ石灰硫黄合劑を用ゆれば病菌も之れが爲め撲滅すべきものと信じボルドー液の撒布を怠りたる結果なるべしと信ず當業者諸氏は害蟲と病菌の差別を明かにし以て其驅除豫防の方法を愆らざる様注意すべきこと肝要なり又石灰硫黄合劑の如き其製法を會得せずして之を用ひ梨

樹を害せしもの少からずと云ふ此等に對しても相當知識を有する人に圖り其製法を愆らざる様注意すべきこと肝要なりとす

尙近來浦港に向け西洋種の販路漸次擴張し岡山縣の如き大輸出を見るの狀況なり本村に於ても本年試賣を行ひ良結果を得たりと云ふを以て本村梨樹の將來としては外國種を栽培するの利益を見るの時期あるを信ず故に當業者は須らく試験的に此等の良種を栽培し將來の企圖を講ずること又必要ならん今數年間縣立試験場に栽培せる外國種の梨にして比較的有望なる種類を擧げ以て参考に供せん

パートルレット 八月―九月成熟比較的豊産なり

フレミツシユビユーター 八月―九月成熟良種なり

クラツブスケエボリート 八月成熟

ジュツセス、ダングレーム 九月―十一月成熟

以上は本村に於る梨樹栽培改良の要を述べたり當業者諸氏宜くこれを參酌して得るところあらば幸甚なり

大正三年二月

第四回加島梨園品評會審査長

靜岡縣立農事試験場長 狩野辰男

第三章 肥料試験地の設置

本村に於て長十郎種を栽培せるものは凡て他品種を混植しあるも中には尙引續き結實不良のものあり故に本會にては本縣立農事試験場に出願し田崎技師の出張を乞ひ該園に就き調査せしに或は肥料の關係にはあらずやとの疑問あり依て大正四年より本縣立農事試験場委託肥料試験地を設置し三ヶ年間繼續試験の結果肥料の配合により完全なる成績を表し一般當業者指導上其効果顯著なり今試験の成績を示せば次の如し

梨樹肥料委託試験設計

- 一、試験地 富士郡加島村大字中島
- 一、擔當人 古郡虎次郎
- 一、種類 長十郎
- 一、樹齡 十一年生(五年生苗栽植後六年)
- 一、樹數 反當七十五本植

- 一、肥料成分量 反當窒素六貫匁磷酸及加里各七貫匁
- 一、普通施肥期 一月下旬乃至二月上旬 五月下旬乃至六月上旬
- 一、試験區別 次表ノ如シ

第一 肥料配合試験

區名	肥料ノ種類	備	考
一	堆肥、鯀粕、大豆粕、過磷酸石灰、木灰	普通ノ通り施用ス	
二	堆肥、鯀粕、大豆粕、過磷酸石灰、木灰	大豆粕九月上旬用フ他ハ普通ノ通り用フ	
三	堆肥、鯀粕、大豆粕、過磷酸石灰、木灰及硫酸苦土	石灰率ハ二、八五トシ木灰ノ一部及ビ硫酸苦土ハ九月ニ施シ他ハ普通ノ通り	
四	堆肥、鯀粕、大豆粕、過磷酸石灰、木灰及硫酸苦土	同前大豆粕及ビ硫酸苦土ハ九月ノ施用	
五	大豆粕(窒素三貫) 硫酸アンモニア(窒素三貫) 過磷酸石灰、硫酸加里	一月下旬乃至二月上旬 三月 五月下旬乃至六月上旬 三回分施	
六	同前	硫酸アンモニアノ窒素ノ内第二區大豆粕中ノ窒素ニ相當スル量ハ九月ニ施シ他ハ五區ト同様三回ニ分施ス	

七	大豆粕、硫酸アンモニア、過燐酸石灰、硫酸加里及肥料石灰、硫酸苦土	石灰及苦土量ハ三區ト同様ニシテ石灰率ヲ二、八五トシ石灰及ビ苦土ノ一部ハ九月ニ施シ他ハ三回ニ分施ス
八	同前	硫酸アンモニアヲ六區ト同量及石灰苦土ヲ七區ト同様九月施用他ハ三回分施

第二 石灰用量試験

區名	肥料種類	反當量	窒素	要素	加里	石灰	苦土	一本當量	九月用量	一二月五月六月施用	
甲	大豆粕、硫酸アンモニア、過燐酸石灰、硫酸加里	一八二	一八四	〇・七六	〇・二七	一・〇一九	〇・二七	〇・二四三	—	〇・二六三	〇・〇八〇
乙	大豆粕、硫酸アンモニア、過燐酸石灰、硫酸加里、肥料石灰	二九四	二七六	〇・四一	〇・五八八	〇・〇五九	〇・〇八八	〇・三九二	—	〇・二六二	〇・一三〇
丙	同前	一六一	—	三・二二三	—	四・五〇八	—	〇・二二五	—	〇・二二五	—

第一 肥料配合試験

區名	肥料種類	反當量	窒素	要素	加里	石灰	苦土	一本當量	九月用量	一二月五月六月施用	
堆肥	—	四〇〇・〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	五・三三三	—	五・三三三	—

區名	肥料種類	反當量	要素		加里	石灰	苦土	一本當量	九月用量	一二月五月六月施用	輪狀施用
			窒素	磷							
一	大豆粕	一八二	一八四	〇・七六	〇・二七	一・〇一九	〇・二七	〇・二四三	—	〇・二六三	〇・〇八〇
二	大豆粕	二九四	二七六	〇・四一	〇・五八八	〇・〇五九	〇・〇八八	〇・三九二	—	〇・二六二	〇・一三〇
計	木灰	一六一	—	三・二二三	—	四・五〇八	—	〇・二二五	—	〇・二二五	—
二	大豆粕	二九四	二七六	〇・四一	〇・五八八	〇・〇五九	〇・〇八八	〇・三九二	—	〇・二六三	〇・〇八〇
三	過燐酸石灰	一六一	—	三・二二三	—	四・五〇八	—	〇・二二五	—	〇・二二五	—
計	木灰	六四七	—	一・六一八	—	三・八八五	—	三・二三五	—	〇・八六三	—
堆肥	—	四〇〇・〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	五・三三三	—	五・三三三	—
堆粕	—	一八二	—	七・〇〇〇	—	七・〇〇〇	—	〇・二四三	—	〇・一六三	—

四						三		
大豆粕	計	硫酸苦土	木灰	過燐酸石灰	堆肥	大豆粕	木灰	過燐酸石灰
四〇.五		一八.三	八四.七	一六.一	四〇〇.〇	二九.四	六四.七	一六.一
三〇〇〇	六〇〇〇					六〇〇〇		
〇.六〇八	七〇〇〇					七〇〇〇		
〇.八〇〇	七〇〇〇					七〇〇〇		
〇.〇八一	二七.七九六					二七.七九六		
〇.〇三三	九.七四〇					九.七四〇	五.四九〇	
〇.五四〇		〇.二四四	〇.八六三	〇.二二五	五.三三三	〇.二四四	〇.八六三	〇.二二五
		〇.二四四	〇.二五〇	〇.三九二	〇.二四三	〇.二四四	〇.二五〇	
〇.一八〇		〇.四三三	〇.一四五		〇.一六三		〇.六二三	〇.二二五
〇.三六〇		〇.一〇〇	〇.七三〇		〇.〇八〇			〇.一三〇
				施用狀スニ				

周形一圃
圓和面
ニ混和
同液前
水溶解

輪狀スニ
施用

五				六				七				
大豆粕	計	硫酸アソモ	過燐酸石灰	大豆粕	計	硫酸アソモ	過燐酸石灰	大豆粕	計	硫酸アソモ	過燐酸石灰	硫酸加里
一五.〇		三三.〇	三三.〇	四〇.五		一五.〇	三三.〇	四〇.五		一五.〇	三三.〇	一三.七
三〇〇〇	六〇〇〇				六〇〇〇				六〇〇〇			
			六.三九二		七〇〇〇				七〇〇〇			
					七〇〇〇				七〇〇〇			
〇.〇七五	九.一四三	〇.〇二七	八.九六〇	〇.五四〇	九.一四三	〇.〇二七	八.九六〇	〇.五四〇	九.一四三	〇.〇二七	八.九六〇	〇.一八三
	〇.二四五	〇.二二三		〇.二四〇	〇.二四五	〇.二二三		〇.二四〇	〇.二四五	〇.二二三		〇.一八三
〇.二〇〇		〇.四二七		〇.一〇〇		〇.四二七		〇.一〇〇		〇.四二七		〇.二八三
				〇.二四三				〇.二四三				〇.四三七
												〇.一八〇
〇.一三〇				〇.三六〇				〇.三六〇				〇.一八三

水溶液ト
シテ樹園
一面ニ施
用

區名	肥料種類	反當量	要素					一本當量	九月用量	一二月五六月施用量	樹園形ニシテ液用	
			窒素	磷酸	加里	石灰	苦土					
大豆粕	計	四〇.五	三〇〇	〇.六〇八	〇.八一〇	〇.八一〇	〇.二二二	〇.五四〇	—	〇.一八〇	〇.三六〇	樹園形ニシテ液用
大豆粕	計	四〇.五	四〇.五	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大豆粕	計	四〇.五	四〇.五	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大豆粕	計	四〇.五	四〇.五	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第二 石灰用量試験

區名	肥料種類	反當量	要素					一本當量	九月用量	一二月五六月施用量	樹園形ニシテ液用	
			窒素	磷酸	加里	石灰	苦土					
大豆粕	計	四〇.五	三〇〇	〇.六〇八	〇.八一〇	〇.八一〇	〇.二二二	〇.五四〇	—	〇.一八〇	〇.三六〇	樹園形ニシテ液用
大豆粕	計	四〇.五	四〇.五	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大豆粕	計	四〇.五	四〇.五	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大豆粕	計	四〇.五	四〇.五	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第三章 肥料試験地の設置

計	六、〇〇〇	七、〇〇〇	七、〇〇〇	二九、一四三	〇、二四五	〇、四一〇	〇、一八三	〇、一八三	—
硫酸加里	—	—	—	—	—	—	—	—	—
消石灰	三〇、八	—	—	—	—	—	—	—	—

各肥料ノ成分含有量次表ノ如シ

	窒素	磷酸	加里	石灰	苦土	備考
堆肥	〇、五	〇、二五	〇、六	〇、七	〇、二	
鍊粕	一〇、五	四、〇	〇、七	五、六	〇、七	
大豆粕	七、四	一、五	二、〇	〇、二	〇、三	油脂ヲ溶解液
硫酸アンモニ	二〇、〇	—	—	〇、五	—	
過磷酸石灰	—	二〇、〇	—	二、八、〇	—	
木灰	—	二、五	六、〇	三〇、〇	五、〇	
硫酸加里	—	—	四、五、〇	〇、二	〇、九	
消石灰	—	—	—	六、五、〇	—	

硫酸苦土	—	—	—	—	三〇、〇	—
------	---	---	---	---	------	---

第一 肥料配合試験成績

(収量調査表) 一區四本合計

區名	肥料名及其施用方法	収量			反當改算
		個數	三ヶ年平均	重	
一區	堆肥、鍊粕、大豆粕、過磷酸石灰、木灰、同上但シ大豆粕ノ一部ヲ前年九月ニ施用ス	一〇四八	五四三、三	—	一〇一八九
二區	堆肥、鍊粕、大豆粕、過磷酸石灰、木灰、硫酸苦土(初年ノミ苦土ヲ用フ)	九七二	五四〇、三	—	九七五、六
三區	同上但シ大豆粕ノ一部即チ反當二九、四〇〇前年九月施用	九四八	五四、八六九	—	一〇四七、六
四區	大豆粕、硫酸、過磷酸石灰、硫酸加里、同上但シ硫酸安母尼亞ノ一部ヲ前年九月施用ス	八九三	五四、六三四	—	一〇〇五、六
五區	大豆粕、硫酸安母尼亞、過磷酸石灰、硫酸加里、消石灰(初年ノミ苦土ヲ用フ)	九六一	五四、二一六	—	一〇五九、一
六區	同上但シ硫酸安母尼亞ノ一部ヲ前年九月ニ施用ス	九六九	五四、七四四	—	一一〇一、一
七區	同上但シ硫酸安母尼亞ノ一部ヲ前年九月ニ施用ス	九五〇	五四、六九八	—	一一〇〇、六

分析成績

區名	遊離酸 (林橋酸トシテ)		還元糖 (葡萄糖トシテ)		全糖 (甘蔗糖トシテ)					
	試験前	試験中平均	試験前	試験中平均	試験前	試験中平均				
一區	0.13	0.11	-	0.001	三,110	四,311	+ 1.11	八,512	八,691	+ 0.177
二區	0.11	0.11	0.000	三,110	四,191	+ 1.09	七,971	八,511	+ 0.540	
三區	0.11	0.11	0.000	三,351	四,231	+ 0.88	七,551	八,661	+ 1.110	
四區	0.13	0.11	-	二,911	四,231	+ 1.30	八,141	八,731	+ 0.590	
五區	0.11	0.10	-	二,881	四,381	+ 1.50	八,331	八,511	+ 0.180	
六區	0.11	0.10	-	三,171	四,511	+ 1.34	七,801	八,151	+ 0.350	
七區	0.13	0.11	-	三,110	四,141	+ 1.04	七,491	八,071	+ 0.580	
八區	0.13	0.10	-	三,511	四,471	+ 0.95	七,061	八,211	+ 1.150	

第二 石灰用量試験成績

本試験の目的は梨樹及梨果に及ぼす石灰の影響を査定せんが爲前記設計書の通り試験を行ひたり

供試樹は試験開始の當時十二年生反當七十五本植各區四本宛となし樹勢均一にして全く混植及混枝を避けたり本試験は三ケ年間繼續し樹勢には大なる差異を認めずと雖も第二區は比較的葉色濃厚にして樹勢盛なり次に果實の色澤は石灰加用區幾分良好にして風味も亦佳良なり就中第二區は三ケ年を通じて稍其の著しきを認めたり左に果實收量及分析結果を示さん

區名	試驗區別	收量		三ケ年平均	反當收算
		個數	重		
甲區	標準區	1059	6,103.6	11,313	
乙區	反當十貫ノ酸化石灰加用	1045	6,382.0	11,956	
丙區	同二十貫ノ酸化石灰加用	831	5,153.3	9,656	

備考 共通肥料は一本當り大豆粕五百四十匁硫酸安母尼亞二百匁過磷酸石灰四百二十七匁硫酸加里(四十五%)百八十三匁にして反當要素量は窒素六貫匁磷酸及加里七貫匁とす

區名	遊離酸 (林檎酸トシテ)			還元糖 (葡萄糖トシテ)			全糖 (轉化糖トシテ)		
	試験前	試験中平均	試験前後ノ増減	試験前	試験中平均	試験前後ノ増減	試験前	試験中平均	試験前後ノ増減
甲區	0.114	0.109	- 0.015	3.48	4.85	+ 1.37	7.44	8.31	+ 0.87
乙區	0.117	0.097	- 0.020	3.35	4.61	+ 1.26	7.35	8.71	+ 1.36
丙區	0.111	0.099	- 0.012	3.73	4.60	+ 0.87	7.10	8.70	+ 1.60

前表に據れば梨果の收量は第二區に於て僅かに增收を來したるも第三區に於ては稍大なる減收を示せり而して果汁の成分中遊離酸は第二區に於て其量を減じたりと雖も第三區は標準區と大差なきを以て是は寧ろ試験の誤差と認むるを至當とすべし次に石灰加用によりて還元糖は次第に減少し全糖は却つて漸次著しく増加せり從つて還元糖による所謂溫和なる甘味は稍減少すべしと雖も蔗糖による強き甘味は甚だしく増加するものにして石灰によりて熟期の促進せられたることを明かに知り得べし此に由つて之を觀れば本試験地の如き沖積地にして而も比較的石灰に富む土地に於ては石灰加用に依り收量の増加は極めて尠なきのみならず其の加用量少しく多きに失せんか却つて收量減少するの虞あるも果實の品質は改善せられ色澤良好にして且

つ甘味多きものを産し而も熟期を促進することを得べし然りと雖も肥料として蒸製骨粉、荒粕、木灰等を施用するに於ては勢ひ多量の鹽基性石灰を供給せしと同一結果を生ずるが故尠くとも砂質の地にありては特に肥料用石灰を施用するの要なきものとす

第四章 剪定指導

從來剪定は専ら舊慣を守り進歩せる剪定法を採用するもの無く遺憾に堪へざりしを以て本農會は茲に見る所あり農商務省農事試験場園藝部に出願し技師及見習生の出張を乞ひ明治四十三年より五ヶ年間冬季剪定或は夏季剪定の實地指導を爲せし結果頓に其面目を改め何れも進歩せる剪定法を採用するに至れり左に其概況を示さん

年次	日數	剪定指導者	摘	要
明治四十三年	一日	草野技師外見習生十五名	水戸島、森島、宮下三區ニ於テ當業者ヲ集メ冬季剪定指導ヲナス	各區ニ於テ冬季剪定指導ヲナス
明治四十四年	五日	松平技師外見習生八名		
大正元年	一日	草野技師外見習生六名		

大正二年	二日	松平技師外	見習生七名	同
大正三年	一日	松平技師及	見習生二名	
				夏季剪定指導ヲナス

第五章 梨樹研究會

本村の梨は年と共に隆盛に赴くと雖も尙肥料に病蟲害驅除豫防或は販賣方法等種々研究すべき餘地あるを以て大正三年より研究會を開催し研究問題は當業者より提出し決定せる事項は印刷し一般農家に配布する事となしたり

左に研究問題及決定せる事項を掲げん

研究問題

- 一、ボルドー液の撒布時期及有効なる配合方法
- 二、除蟲菊石鹼合劑の有効なる製造方法
- 三、左記病蟲害の豫防驅除法
 - イ、輪紋病
 - ロ、白紋羽病

ハ、鋸蜂の成蟲及幼蟲

ニ、梨蝨の成蟲及幼蟲

ホ、皮潜蛾の幼蟲及成蟲

ヘ、赤芽蟲星毛蟲葉捲蟲の幼蟲

四、梨の開花の早晚が長十郎の結果に及ぼす影響如何

五、追肥の最も有効なる施肥期及翌年の結果に及ぼす影響如何

六、各品種により三要素配合量に關係ありや

七、夏季灌水の適期及翌年の結果に及ぼす影響如何

八、夏季剪定の收量及び翌年の結果に及ぼす影響如何

研究會の結果左記事項を印刷し當業者に配布せり

一、ボルドー液撒布時期及有効なる配合法

石灰ボルドー液は空氣傳染による病害の病原菌の病芽(孢子)が傳播し來り梨の莖葉に發芽し侵入し被害する時に當りて之を撒布し置きて其孢子の發芽を防止し此病菌を作物の體内に侵入せしめず従つて發病する事無からしむるものなり

故に之が撒布は必ず發病期よりも以前に於てせざるべからず既に作物の體内に侵入

したる病原菌は到底外部よりの撒布によりて死滅せしめん事不可能にして發病後に於て撒布するは既に遅くして豫防殺菌としての効果は既に經過し何等奏効するの餘地なく徒勞徒費に終るものなり

故に本年の開花期より觀察して左の時期を標準とし撒布するを有効なる時期とす

發芽前三月廿八日(第一回) 開花前四月三日(第二回)

落花後四月十五日(第三回) 小豆大五月八日(第四回)

松尾(大古河)今村秋早生長十郎等の如きポルドー液の被害ある種類に對しては開花前に終るを好時期とす

配合法 硫酸銅一二〇匆生石灰一〇〇匆乃至一二〇匆水三斗石灰の溶解せる中に角又の溶液を少量加ふるときは一層附着力を大ならしむ昨年黒星病の發生激甚なりし梨園は撒布の時期を失したると一般に硫酸銅其他の費用を吝み撒布を差控へ回数少なかりしと通じて窒素質肥料過用のため枝葉軟弱に徒長せるを以て被害甚だしきこと製造法の不完全なること被害の落葉處分を行はざること以上は昨年の失敗に鑑み本年は最も有効なる撒布を行ひ以て完全に發生を豫防せらるべし

二葉掃蟲赤芽蟲等の驅除法

開花前には種々の害蟲多數發生し肉眼にて一見視えざる程度に鱗片萼花芽の中に附着し居るを以て此際極めて稀薄なる除蟲菊石鹼合劑を撒布することは最も有効なり害蟲驅除は彼等の抵抗力の極めて薄弱なる時に行はざれば完全なる驅除は行ひ難し今日既に害蟲發生し居るも除蟲菊石鹼液の最も有効なる撒布時期(四月三日第一回)落花後四月二十日頃(第二回)に行ふべし

三、除蟲菊石鹼合劑の有効なる製造方法

除蟲菊花	一二〇匆
洗濯曹達	四〇匆
石鹼	三〇〇匆
水	一斗

製造方法 鍋又は釜に七升の水を盛り之に薄く削りたる石鹼を入れ下より熱して石鹼が溶解したらば之に除蟲菊花の豫め細末したるものを入れ直ちに洗濯曹達をも投入したる後下より盛に焚火して沸騰し釜の外に溢れ出るに至らば残り三升の水を徐徐に注入し煮沸すること三、四十分にして釜を卸し細かき篩にて濾過したる儘二晝夜密閉し置くときは除蟲菊の有効成分及粘着力を一層増進せしむることを得

斯くして得たる原液は開花前には二十倍とし開花後は十五倍落果後は十倍乃至十二倍の稀薄液として撒布するものなり

第六章 模範梨園設置

梨樹栽培は年を逐て増殖しつゝ、あるも尙當業者に範を示し大いに改良の餘地あるを認め縣立農事試験場に其設計を依頼し明治四十三年以降模範梨園を設置し實地に當業者を指導せり

一、模範梨園の位置面積及擔當人

模範梨園の位置	面積	擔當人住所氏名
加島村水戸島二七八番地	一三〇〇 ^反	加島村水戸島 熊王藤 一

二、模範梨園設置精算書

種目	數量	單價	金額	摘要
整地人夫賃	一人	四五〇	四五〇	
			九〇〇	

種目	數量	單價	金額	摘要
植付人夫賃	四	四五〇	一八〇〇	
苗	一一	二五〇	二七五〇	普通棚造用
同	三四	〇五〇	一七〇〇	水平整枝用
同	四〇	〇五〇	二〇〇〇	苗木仕立用
竹	二六	三三〇	八四四五	棚竹
繩(綱繩)	二	二五〇	五〇〇	結束用
杭	一九	〇五〇	九五〇	棚杭用
結束人夫	五	二五〇	一二五〇	棚に使用
鐵線	一	五八〇	五八〇	垣根用
杭	一八	〇五〇	九〇〇	垣根用
竹	二五	四〇〇	一〇〇〇〇	竹代及人夫賃共一式
堆肥	二	五〇〇	一〇〇〇	施肥
大豆粕	六	二八〇	一六八〇	施肥
人糞尿	二五	二〇〇	五〇〇〇	

計

一〇七七五五

三、模範梨園設計

一目的

從來栽培者の行へる種類及施肥剪定病蟲害の防除等區々にして然も甚しきに至ては全く其方法を誤り爲めに良果を得ざるあり或は經濟的ならざるもの少なしとせず尙地方の慣行に鑑み之に參酌を加へ模範を示し研究の資に供せんとす

一面積 一反三畝歩

一土質 砂質壤土にして深さ五六寸心土僅に粘壤土一二寸ありて礫となる

一地形 平坦にして東南より西北に走り方形なり

一植付の種類及其歩合

早生 獨逸早生長十郎 三分

中生 長十郎、平子、明月 五分

晩生 金龍、今村秋 二分

一樹形及植付距離

棚架法	高サ	東	植付距離
		西	
水平法	擔當人の頭に握掌を載せたる上に棚竹を架す 最下段地上二尺五寸残り三段は一尺一寸を一段とす	二	間
		十	
		一	間
		五	尺

備考 棚架法の間植は二、三年の後には二間に復するものなり

一肥料 (一反歩の用量)

二、三年生	五年生	十年生	堆肥	躑躅粕	大豆粕	人糞尿	過磷酸石灰	木灰	三成分の割合		
									窒素	磷酸	加里
二五〇	三五〇	五五〇	九	二〇	五〇	六四〇	二〇	一	一、九四二	一、〇〇一	一、六三三
九	一〇	二〇	九	二五	三〇〇	一五	八	四	三、〇五六	一、七〇〇	二、五四三
一	四	三	一	三	四七四	三、五六	四、五六二				

備考 人糞尿は元液の九—一〇倍なること又人糞尿の全量は二、三回に分ち而して

過磷酸石灰の半量は第一回の堆肥として分施す

一施肥期

	元肥	第一回	第二回	第三回
二、三年生	二月下旬	四月上旬	五月上旬	六月上旬
五年生	二月上旬	三月中旬	同	同
十年生	二月上旬	三月中旬	四月下旬	五月中旬

一施肥法 (圓溝を造り之に施す)

木の基部より距離	二、三年生	五年生	十年生
溝の深さ	一尺一尺二寸	二尺	三尺
	二	二寸五分	二寸五分

一敷草

稍乾燥せる紫雲英の反當量	二、三年生	五年生	十年生
	一五〇 _匁	二〇〇 _匁	二〇〇 _匁

備考 根際に敷き稍腐敗に傾きたるとき施肥の部に浅く埋む

一中耕

- 一 冬季施肥の際凡隔年位に施肥溝を稍深く耕す但勢力偉大なるものは年々深耕す
- 二 爾後追肥施用のとき及除草のとき浅く耕に過す
- 三 根邊にして施肥溝より内側は只除草するのみにして中耕すべからず

一除草

雑草の生ずる毎に之を行ふ

一誘引

時	冬	夏	季
期	剪定の時	新梢一尺位に伸びたるとき主枝を目的の方向に向けて一回誘引す凡六月下旬とす	

一剪定

時	冬	夏	季
期	十二月上旬より	五月下旬より七月上旬に至る	

一 病蟲害の防除法

	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回
ボルドー液	自三月下旬 至四月上旬	自四月上旬 至四月中旬	四月下旬	七月下旬	十月下旬
除蟲菊石鹼	四月上旬	四月下旬	五月中下旬		

一 藥液の分量

	發芽期	發芽並に開花期	落花期	生長期
ボルドー液	三斗五升式	三斗式	同	同
除蟲菊石鹼水	一八〇〇倍液	一五〇一八倍液	同	一〇〇一二倍液

一 摘果法

四月下旬より六月中旬の間に行ふ
 一袋掛
 五月下旬より六月中旬の間に行ふ

第七章 園藝講習會及講話會

當業者に農業に關する知識を普及し學理を實地に應用せしめ以て之れが改良發達を圖らんが爲め明治四十年以降四回開催せり而して毎年春秋二回縣立農事試驗場及縣農會技術員其他名士を聘し講話會を開き部農會に於ては毎月又は年數回之を開催するを以て本會は各部農會に對し補助金を交付し獎勵せり講習會の成績左の如し

年 度	期 日	會 場	科 目	修了生	講 師 名
明治四十年	七日間	役場内	普通農事園藝	八五	井上喜作 岡田忠男
明治四十三年	七日間	加島尋常高等小學校	同上	一〇二	松野政親 佐野治徳
明治四十四年	四日間	役場内	同上	九一	岡野治男 田崎一男
大正六年	四日間	役場内	園藝	七六	岡田親徳 松平親徳

第八章 石灰硫黃合劑製造

本村梨樹栽培者は冬期介殼蟲其他の害蟲驅除の爲め年々酸曹會社より高價なる石灰硫黄合劑を購入し來りしが大正六年度より本會にて製造を行ひ實費にて農會員全部に配布せり

從來硫黄合劑は主として東京酸曹會社より原液一石拾八圓乃至貳拾圓にて毎年百石内外を共同購入しつゝ、ありしが斯る販賣物は假令ボーメーの度は強しとするも其効力甚だ薄し因て本會茲に見る所あり大正六年度より全村使用の原液全部技術員指導の下に之を調製したるに全量百石を一石に付七圓内外にて精製し得たり若し夫れ之を酸曹液として購入する時はボーメー三十度のものが貳拾圓内外にして之を組合の如き團體を以て注文するも昨年如きは拾八圓を下らず乃ち本村は今回の舉によりて一石に付少くとも拾圓全體に於ては千圓以上の節約を圖るを得たりしなり特に原料は全部本村商人の手より購入したれば彼れ此れ綜合して村經濟に及したる利益鮮少にあらず

石灰硫黄合劑收支計算

一、收入之部

金額	額	配布數量	部名	拂込人氏名
二六 ^円	八八 ^圓	三三 ^石 三六	新市場	時田辰藏
二四	一六	三、〇二	高島	田中金作
二九	七六	三、七二	蓼原	小林由太郎
三四	九六	四、三七	藤間	藤田銀三郎
二五	六八	三、二一	上横割	加茂茂良藏
三六	一六	四、五二	下横割	田島彌十郎
二九	四四	三、六八	十兵衛	栗田專治
三三	五二	四、一九	河原宿	加藤角太郎
一一五	九二	一四、四九	水戸島	朝田市平
一八四	五六	二、三〇七	森島	和田精太郎
五三	〇四	六、六三	平垣	前田理作
四五	五二	五、六九	松本	稻垣虎松
三八	六四	四、八三	五味島	花崎正三九